

平成 27 年度

弘前大学生涯学習教育研究センター年報
第19号

平成 28 年 5 月

弘前大学生涯学習教育研究センター

目 次

挨拶 弘前大学生涯学習教育研究センター長 曾 我 亨

I. 論文等

地域の教育課題と大学開放

弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授 藤 田 昇 治…… 1

大学生が担う大学開放事業に関する一考察

—「ちびっこ海賊の佐井村まち探検」3年間の取り組みを例に—

弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深 作 拓 郎…… 13

II. 事業報告

1. 生涯学習教育研究センター主催・共催事業

事業報告・アンケート集計結果…… 27

2. 学部・大学院の主催事業など

人文学部…… 77

医学研究科…… 77

保健学研究科…… 78

理工学研究科…… 81

農学生命科学部…… 84

地域社会研究科…… 85

白神自然環境研究所…… 86

医学部附属病院…… 88

研究・イノベーション推進機構…… 101

COI研究推進機構…… 102

男女共同参画推進室…… 106

事務局…… 107

III. センター関連規則など

1. センター関連規則…… 113

2. 機構・組織…… 117

3. 地図・連絡先…… 118

編集後記

地域に貢献できる人材育成を目指して

弘前大学生涯学習教育研究センター長

曾 我 亨

平成28年、弘前大学生涯学習教育研究センターは、設置20周年を迎えます。この間、生涯学習教育研究センターは、弘前大学の知を地域に還元すべく、多くの社会教育事業をおこなってまいりました。とくに平成25年からは、一般市民向けの講座を減らす一方、地域で実践的な活動をしておられる方々や、職業として地域の活性化に携わっておられる専門家の方々を支援する講座に重点を移してきました。この背景には、青森県が抱える喫緊の問題があります。

青森県では、若年人口の流出、高齢化の進行、地域コミュニティ機能の低下など多くの問題が生じています。こうした現状を鑑みたとき、大学の知識をただ消費するのではなく、大学の知識を糧に、地域に刺激を与えてくれる人を支援していくことが重要だと考えました。たとえば、青森県内には「地域おこし協力隊」が活躍していますが、彼らの力を活かすには、自治体や地域の人びとの協力や参加が欠かせません。そこで生涯学習教育研究センターでは「地域おこし協力隊研修会」を実施し、協力隊員・自治体職員・地域住民が一緒になって目標を立て、その実現にいたるロードマップ作りに取り組んできました。こうした地域で活躍する人びとを、これからも支援していきたいと考えています。

さらに今年度は、文部科学省が勧める「履修証明制度」を、弘前大学で初めて導入します。これは120時間以上の系統的な学習プログラムから成るもので、生涯学習教育研究センターでは、青森県が誇る世界自然遺産「白神山地」を保護し活用できる専門人材の育成を目指しています。また、高度で実践的な知識を修得した専門人材に活躍の場を与えることで、白神山地を次世代教育の場として活用したり、魅力的な観光資源として活用したりすることを目指します。

地域の皆さんには、地域づくりの主役として、是非、生涯学習教育研究センターのプログラムにご参加いただけたらと思います。一緒に、地域の未来を創っていきましょう。

I. 論 文 等

地域の教育課題と大学開放

藤 田 昇 治

I. はじめに

「教育問題」という場合、多くの人にとって学校教育における問題が連想されるのではない。「学力」をめぐる問題や「いじめ」等の問題が、毎日のようにマスコミで取り沙汰されている。確かに、学校現場では、多様な現象形態をとって、児童生徒の成長発達に関わる問題が現出している、ということができよう。

「教育問題」の解決を図る上で、およそ「教育」に関わる人々が連携して取り組むことが必要とされるのではあるが、必ずしも連携が充分追求されているとは言えない。むしろ、その連携の必要性についてさえ十分共通の理解が形成されているとはいえない、というのが現状ではなかろうか。教員や保護者というまでもなく、社会教育や医療・健康・福祉等の様々な領域の関係者（行政、民間企業などを含む）、地域住民組織、NPOなど、組織・団体・個人の「協働・協同」を実践的に追求していくことが必要とされている、と考える。「地域の教育力」の実体をどのように捉え、どのようにして実践的に向上させていくのか、ということが問われている、と考える。

以上のような問題意識を前提として、「教育問題」へのアプローチを図る上で、この小論では、「教育」と「学習」についての基本的な理解の再確認を行うところから始めたいと思う。さらに、「大学開放」ということで、今日大学がどのような役割を果たすべきか、ということを検討してみたい。

II. 「教育問題」への協働による取り組みを展望する

(1) 今日の「教育問題」

「学力問題」や「いじめ」をめぐる問題など、学校現場での教育問題は、地域によってその現れ方は異なる。しかし、「いじめ」や「家庭内暴力」といった問題は、文部科学省の調査などでは報告されなくても、水面下で事態が進行し、突然「事件」として表面化する、ということもある。各地で生じている児童生徒の自殺も重要な教育問題であり、最近では教員による「指導」が直接の原因となる、「指導死」についても取り沙汰されるようになってきている。そこには、教員個人の資質や力量だけに問題を収斂させることができない、様々な問題が内在している、と考える¹⁾。

学校現場からは、児童生徒の生活習慣などが十分身につけていない、といった問題が指摘されることも多い。本来なら家庭で行われるべき「教育」や「しつけ」が十分なされていない、といったことである。

「食育」や「早寝早起き朝ご飯運動」について考えた場合、「教育」や「しつけ」という

よりも、より生活の営みに直結する問題として捉える必要がある。児童生徒の生活時間の使い方・生活のリズムの作り方に関わるものであり、「食べる」さらには「生きる」という根源的な生活の営みの内実に関わる問題である。また、「学習」の基礎・基盤となる、様々な生活体験や「挑戦する」ということの経験が乏しくなっている、ということができないのではないか。

社会教育の立場からは、「林間学校」や「通学合宿」などの事業を実施する上で様々な課題が生じてきている。例えば、刃物を使用して工作作業を行う場合など、家庭での日常生活で刃物を扱う経験が乏しいことから、スタッフは細心の注意を払う必要がある、といったことが指摘されている。だからこそ、公民館での事業をはじめ、社会教育の場面では多様な「学習の場」を提供することが必要とされており、実際事業の過程で大きな学習成果を上げている、ということができよう。

(2) 学校・家庭・地域の「協働」

筆者は、「教育」とりわけ「学校教育」という営みは、多様な人々と行政・組織・企業・NPOなどとの「協働・協同」によって遂行されるべきものである、と考えている²⁾。

ところで、全国的な傾向として、家庭の教育力をめぐって様々な問題が深刻化してきている、ということができるのではないか。

近年、「しつけ」や「家庭内暴力」など、様々な問題が指摘されている。その基底には、家族の個別化・個人化の傾向がある、と考える。

また、「子どもの貧困化」が重要な問題として指摘されている。「貧困」は、単に生活が苦しい、自由に使用できる金銭・所得が少ない、ということではない。保護者の長時間労働にともなって、児童生徒が孤立した状況に置かれる、親子の間のコミュニケーションが十分とれなくなる、ということになりがちである。その結果、子どもの悩みを親が受けとめきれない、といった状況に陥る可能性もある。また、所持品や服装などが、経済的な「貧困」に規定されたものとなり、それが子ども集団の中で「いじめ」の要因となる、ということもあり得る。さらに、経済的に「塾通い」が困難なため、「学力」を伸ばしきれない、という場合もある。

こうした「貧困」の問題について、これまで学校教育関係者は、教員の力の及ばざるところ、として関わることを拒否してきたのではないかと考える。

「教育」に関わって、近年学校側からは「コミュニティ・スクール」や「教育自立圏」といったことが今後の実践的課題として提起されてきている。そこで提起されているものは、学校運営に積極的に住民の協力を得たい、ということである。

この間、「学校支援地域本部」といった取り組みが追求されてきた。弘前市においても、住民の積極的な協力があり、大きな成果を上げてきた、ということができよう。しかし、住民の一部の協力にとどまっている、ということは否定しがたい。

社会教育について考えると、公民館を中心とした事業の中で、文部科学省が推進してきた事業「公民館等を中心とした社会教育活性化支援事業」などでも、積極的に学校教育と連携して事業を展開することが模索されている例も多い³⁾。また、博物館が学校教育と連携する場合、「博学連携」ということで、博物館が集積した資料や調査研究活動の成果を活用したり、展示を活用しようとする例も多い。

とはいえ、全体的には家庭・学校・地域が連携しようとする動きは、極めて限定されたものにとどまっている、と考える。

ここでは、家庭：学校・地域の「協同」ということについて、弘前市の実践例を中心に検討してみたい。

弘前市では、中央公民館の他に12の地区公民館があり、各地区で学校教育と「協働」する事業に取り組んでいる。

地区公民館の運営に当たって、運営委員会が組織されているのだが、その構成メンバーとして地域の町内会などの社会組織や農協・社会福祉協議会等が名前を連ねている。地区内の小中学校の代表も参加している。

この運営委員会の構成団体は、年2回開催される会議に出席し意見を述べるだけ、という実態の場合もあるのだが、公民館が開催する様々な事業に、個人として、あるいは組織として協力している例も多い。その意味で、公民館の側からする「地域学校協働」が追求されている、ということである。

弘前市では、各小学校区ごとに「学区まなびい」という組織があり、多様な学習・文化・体育事業が行われている。構成団体は、町内会や体育協会、小中学校、PTA、社会福祉協議会などであり、多くの児童生徒や住民が参加している。ある意味では、地域住民・学校・社会組織などが「教育ネットワーク」を組織し活動している、ということができる。もっとも、実態としては一部の人々に「仕事」が集中している、という問題があるのだが。

また、弘前市の場合、「教育創生市民会議」という組織が現市長の肝いりで立ち上げられ、3年目に入っている。教育に関わる様々な団体・組織の代表などで構成されているのだが、そこでの議論は、必ずしも十分深められ実践されているとは言い難い。

Ⅲ. 「教育のグランドデザイン」を考える

教育に関する研究は、学校教育や家庭教育、社会教育、生涯学習の様々な領域に関わっており、また、広い基盤の上に成立している。研究課題・方法論も多様である。しかも、「たこつぼ化」の傾向も深まり、そのため、教育について共通の基盤（いわば「教育のグランドデザイン」）を構築することが困難になっている。行政においても、「縦割り」や「細分化」が進行し、さらに短期間での人事異動という要因も作用してくる。

こうした状況にあるからこそ、「教育のグランドデザイン」を構築することが必要とされている、ということができるのではないか。以下で、「教育のグランドデザイン」について現時点での試論を提示したい。

(1) 「教育」と「学習」の相互規定的関係

「教育」も「学習」も、一義的に規定し難い概念であるが、「教育」と「学習」は相互規定的関係にあるもの、と捉える必要性について検討したい。

ここでは先ず、「教育」という営みについて、次のように捉えておきたい。

「教育」については、「個人の成長発達」という側面と、「社会的に営まれる社会システム」という側面と、2つの視点が必要である。

先ず「個人の成長発達」という視点から捉えてみよう。「社会的に営まれる社会システム」という側面については次節で検討する。

「教育」について触れる前に、現代社会における教育に関連するいくつかの基礎的な概念の検討を行ってみたい。

「教育」について考える際に、「人間」をどのように捉えるのか、ということが問題になる。ここでは、「人間」を、自然的・歴史的・社会的存在として捉えておきたい。「自然的」ということは、生物としての人間、また、自然界を構成するものの一つとしての人間、ということである。アミノ酸やタンパク質（さらに細分化すれば炭素や水素、酸素といった元素に還元される）で構成された生命体である。地球で40億年という時間を掛けて進化してきた生命体であり、その基本的な機能はDNAによって規定されている。また、常に自然界・外界と交渉することで、自己の生命の生産と再生産を行っている。高度に発達した現代文明のもとでも、生命の生産と再生産には「自然」が不可欠である。また、7万年ほど以前に「グレイト・ジャーニー」と呼ばれる、東アフリカからの人間の移動があり、それが現在の多種多様な民族に分化した人類の源流である、と言われている。

人類が類人猿から別れて独自に進化するようになったのは700万年前という説もあるようだが、長い間人間は「狩猟・採集」を中心とした生活を営んできた。そして、農耕を中心とした生活へと移行してきたのだが、それぞれの生活様式に規定された文化や行動規範・世界観などを形成し、社会的に再生産してきたのである。とりわけ産業革命以降は資本主義社会となり、政治・経済・教育などの様々な領域で、それ以前の社会とは異なるものを生み出してきた。例えば教育について見た場合、国民が等しく教育を受ける「学校」という社会システムは、近代社会になって初めて成立したものである。日本の場合、近世には支配階級の「武士」と被支配階級である「農民・職人・商人」では基本的に異なった教育システムの下で教育を受け、就学状況も大きく異なっていた。

現代社会の特質を端的に表現するのは難しいが、次の点について触れておきたい。現在、極端な分業が進行し、多くの人々が「自然に働きかけて自らの生命の維持と再生産を行っている」ということを実感し難くなっている。例えば、魚や肉などの様々な食材がもとはどのような形状にあり、また自然の生態系の中でどのような位置にあるのか、ということについての基本的な知識・理解は習得していない場合が多い。そこから、環境問題が深刻化し多くの生物が絶滅に瀕していることや、温暖化にともなって異常気象が「常態化」していることへの懸念などを持ちあわせていない人も決して少なくない。

一方、社会の中で、それぞれの個人は「個人として基本的人権を有する独立した存在である」ということへの理解が重要なのではあるが、同時に「他者と協力・連携・協働・協同することによってのみ、自己も他者も人間らしく生きることができる」ということについての理解も極めて重要である、と考える。

また、社会的な協同によって成立している社会である、ということについての理解をどのようにして深めるのか、ということも重要である⁴⁾。

次に、「教育」や「学習」との関連で、「意識」について触れてみたい。

「意識」ということを考える上で、人間が様々な意識・認識し、一定の意思・目的をもって行動する、という過程を考えてみよう。少なくとも、以下の点を確認できるのでは

ないだろうか。

第一に、その一連の過程は、基本的に自然物としての人間の機能として発現していく。気温や風といった気象的条件が作用する場面もあれば、空腹・のどの渇きといった生命体としての自然的・内発的要素が作用する場面もある。それらは、外界からのあるいは内発的な刺激に対する脳や各種の臓器・器官、筋肉、皮膚などの作用である。

しかし、第二に、意識・認識・行為といったものは、他者との関わりの中で作用し発現する場合も多い。社会的な意味を持つもの（例えば、他者のために食事を用意する、等々）、社会的に規定されたものとして追求・遂行されるもの（例えば、尿意を感じても、トイレがあるところまで排泄を我慢する、自分の生物的欲求を社会的規範に適合させるようにコントロールする等）である。一定の行動・行為、その前提となる意識を規定するのは、社会的に継承されてきた生活文化や規範・法律・科学的な知見・技術・商品やサービス等々の作用するところである。

第三に、歴史的に規定される、ということが出来る。社会の発展段階、社会システムの在り方を規定する条件として、歴史的な到達点に規定される、ということである。例えば、日本の学校教育システムは、戦前と戦後とでは大きく成立条件を異にしている、ということである。かつては当然のこと・正しいこととされていた規範・価値観などが、社会の発展段階がことなれば、当然修正されてくる。過去10～20年のことで考えてみても、「男女共同参画」という価値観が支配的になってきており、「LGBT」の人々への配慮も改善されてきている⁵⁾。

次に、「意識」や「認識する」ということとの関連で、「記憶」について触れておきたい。

脳の中でも記憶を司る部位として「海馬」が重要な存在であることは、従来から指摘されてきた。最近の研究の発展により、「海馬」の果たしている役割・機能が一段と明らかになってきている。「海馬」で定着させられた「記憶」が、大脳皮質に移転される、ということが分かってきた⁶⁾。

ところで、人間の成長発達について考える場合、精神的・身体的成長発達を規定する要因の一つとして、社会的に取り結ぶ人間関係が大きな役割を果たしていることも確認しておきたい。いわば、社会的な「成長のステージ」ということである。6歳になると小学校へ、そして中学校・高校へと進学するのが現代では基本的なライフコースである。大学へも半数以上の人々が進学している。そして、大学卒業後は、今日では大学院に進学する人も多いのだが、多くは企業等で社会人として働くようになる。そうした、社会（企業、行政など）で働くことのほかにも、経済的に独立していくことが必要とされる、あるいは社会人としての価値観・行動規範を身につけるといった側面での、社会的な評価・処遇の違いなども「画期」を構成する条件となる。

関連することとして、「小中一貫」教育システムの構築、ということがある。児童生徒にとって、小学校から中学校へ進学することは、通学ルート・時間の変更から、クラスメートを構成する条件の変更（より多様な人格と触れ合うことになることから、「いじめ」が生じやすくなる、という面もある）などの大きな条件の変容をもたらす。

教員の側では、小学校と中学校の教員の相互の交流が促進されるというメリットの面も強調されている。教育内容の連続性や、教員の立場からの児童生徒の状況の把握における連続性、といったことが合理的に追求し得る、ということである。

「教育」という営みを、最も抽象化し、一般化した表現として、「他者の成長発達を図り、一定の内容をもって他者に働きかける営み」として捉えておきたい⁷⁾。「成長発達」には、身体的・精神的なものがあり、「知識の獲得」や「科学的世界観の形成」、「豊かな人格の形成」、そして「身体的発達」などが含まれる。「成長発達」は生涯にわたって追求することが可能である。こうした捉え方は、「学校教育」や「家庭教育」、さらに「社会教育」にいたるまで、およそ「教育」という営みに共通するものと考ええる。勿論、「教育する主体」は、実際の場面では「教師」や「保護者」、あるいは学習会・講演会などの「講師」といった役割を担う人々である。

一方、「学習」とは、「外界に対して主体的に働きかけることで、様々な知識・情報を得たり、世界観の再構築や身体的な側面も含めて成長発達を図ること」として捉えておきたい。本を読むという行為を通じての「学習」は勿論、様々な経験の蓄積も含めて位置づけられる。技能の習得や身体的発達も含めておきたい。

家庭生活・学校生活・地域生活、さらに「社会」との結びつきの中で、児童生徒は様々な「学び」を体験し蓄積していく。そのトータルの結果として、「成長発達」がある。

インフォーマルな教育の果たす役割も重要なものである。様々な「遊び」や自然体験も「学び」を構成する重要な要素である。図書を読むということを通じた「学び」や、ゲームや音楽といった社会的に提供される学習・文化的素材の役割も大きい。

これまで「教育」と「学習」について述べてきたが、ここで「教育と学習との相互規定的関係」について整理しておきたい。

一般的なイメージとして、「教育」という場合には学校教育に引きつけて捉えることが多いことから、先生や保護者が行う「教育」と児童生徒が主体的に行う「学習」とは別のものとして考えられがちである。しかし、学校での授業や保護者による「教育」においても、また、公民館などで開催される講座等の場面でも、「教育」という営みを通じて「教育を受ける側」が主体的に「学習」している、と捉えるべきである。換言すれば、「教育」という営みは同時に「学習」する過程である、ということである。

このように捉えることで、「教育」する側が「学習」する側の理解について積極的に配慮する、自らの教育実践が相手（児童生徒や講座受講者など）が持っている予備知識や世界観、蓄積した経験、持っている行動規範などを、教育実践の前提条件として十分位置づけるとすることが必要とされてくる、ということになる。さらに、教育実践の過程で相手がどのように「変化」しているのか、「変化」したのか、ということを検証する必要性についても自ずから積極的に位置づけられることになる。換言すれば、「学習」する側の論理や主体的条件などとの相互作用として教育実践が遂行されていく、ということである。そこにはまた、「教育」という営みの合法則性が問われることになる。相手が理解できないような専門用語や難解な論理では、「学習」する側が受け入れない、ということになる。また、「しつけ」などの場面では、保護者などが感情的になり、感情の赴くままに言動をとった場合、子どもは「教育」を受け入れるどころか自己防衛に必死になったり、強く反発することになってしまいがちである。

以上のように、「教育する側と学習する側」が対等で、「学習」する側の主体性が尊重されてこそ、相互規定的な関係の中で「教育」の成果が上げられる、ということである。

(2) 学校教育・家庭教育と社会教育

個人の成長発達を支える条件について考えた場合、就学前期では「家庭教育」の比重が極めて大きい。言語の習得や日常的な生活規範の習得等々、「家庭教育」に期待されることは多い。「生活者」として社会の中で自立して生きていく上での基本的な知識・技能・規範などが、家族という人間関係の中で継承されていく。また、「人格」の形成が図られる。最も、後にも触れるように、「虐待」などの問題も表面化しており、また、「子どもの貧困化」という問題も深刻化している、という事実は見逃せないのだが。

次に、「学校教育」すなわち近代公教育制度の意義、社会的に見た学校の基本的な位置づけについて触れておきたい。

近代社会が「国民教育」を必要としたのは、端的に言えば社会（労働者を雇用する資本家）が一定の水準に達した労働力を必要としたから、ということである。「読み書き算盤」に集約的に表現される基礎学力や社会性・規範を身につけておくことを、企業の下で働く上での前提条件とし、そのための教育システムを社会的に整備するように求めた、ということである。勿論、社会人として自立して生きて行く上で必要とされる知識・学習力、人格形成、身体的成長発達などの具体的な内容は社会の発展にともなって変化していく。その教育を全社会的に重視し、公教育としてシステム化したものが学校教育である。

「学力」に関連して、修得すべき「学習内容」は、社会的に蓄積された自然科学・人文科学・社会科学のエッセンスから学習内容として精査されたもの、として捉えたい。「学力」や「学習内容」については、今日様々な問題があり、今後十分検討していく必要がある、と考える。

ところで、社会的に必要とされる「教育」の位置づけと「個人」の「成長発達」を基本とする考えとは、矛盾する関係にあることを指摘しておきたい。「社会的な位置づけ・要請」が一面的に強調された場合、個人の基本的人権が制約されることになり、極端な場合には戦前の軍国主義教育にまで行き着く事になりかねない。他方で、「個人の成長発達」の視点だけで議論すると、社会発展を担う人材育成とということや「社会的協同」によって行われる事業である、という側面が見失われてしまう。結果として、予算処置をはじめ社会的に手だてする必要性・責任が不明確になりかねない。

また、個人と社会との関係についても検討する必要がある、と考える。「公共の福祉のため」ということで、個人の基本的人権が制約される傾向が強まっている。また、「国益」が「地方自治体」や地域住民の「利益」に優先するのは当然だ、といった感覚も強まっているように思う。沖縄県の「辺野古」への基地移転の問題に象徴されるように、国家主義的価値観が強まってきていることが危惧される。

それは、集団的自衛権をめぐる議論にも関係してくる。「国家存亡の危機」といった状況に追い込まれた場合、「国を守る」ということを無批判的に受け入れる人々が決して少なくはない⁸⁾。確かに、テロとの戦いも激しさを増している状況の中で、「敵」や「敵の脅威」への警戒心は否応なしに強調されがちである。しかし、憲法では、戦争という形態での紛争解決を根本から否定しているのである。武力を用いた紛争の解決は、基本的に最も愚劣な手段である、と考える。

また、個人主義的傾向が強くなり過ぎて、「自己責任論」や「リバタリアン」の主張が強まると、「社会的協同性」は後景に追いやられることになってしまう。「一億総活躍」と

いうことを単に政治的スローガンに終わらせないようにするためには、真に個人の基本的人権や主体性の尊重が図られなければならない。「ひきこもり」や「社会的弱者」、非正規雇用状態の人々などが、自立し、「社会参加」できるように手だてする必要がある⁹⁾。

次に、社会教育について簡単に触れておきたい。社会教育は、教育行政が関わるものをはじめ、首長行政が関わるもの、さらに社会教育関係団体、民間教育産業、企業、ボランティア・NPO等が関わるものなど、多様なものがある。また、個人の「学び」に注目して整理される場合もある。近年、公民館・図書館・博物館等の社会教育施設の運営が「指定管理」に委託される傾向が強まっているが、基本的に公的な教育行政の責任の下に設置・運営されている、ということを重視したい。

また、社会教育について考える場合、「共同学習」の重要性について言及しておく必要がある。社会教育の領域では、「自己教育」と同時に「共同学習」の重要性が注目されてきた。かつての「青年団」などの「社会教育関係団体」における実践は言うまでもなくその重要性は明らかであり、現在の公民館事業として展開される講座や「ワークショップ」等々、様々な場面で「共同学習」が追求されている。また、多様な住民運動や「ボランティア活動」の場面などでも、実質的に組織的な活動の中で「共同学習」が追求されている、ということができる。

(3)「地域の教育力」をめぐって

これまで「教育」と「学習」、「家庭教育」、「学校教育」、「社会教育」について触れてきたが、それらに関連することとしてここで「地域の教育力」をめぐって述べておきたい。

地域住民が実践している様々な学習活動や地域活性化の取り組みなどの中で、住民相互の交流や学習活動が展開されている。そうした実践・学習活動が基盤となって「地域の教育力」が形成されていく。また、公民館・博物館等の社会教育施設を利用した学習活動や交流、さらに社会教育施設を拠点とした住民の学習活動の蓄積や学習した成果を活用しての社会的実践もあり得る。そこでは、専門職員の果たすべき役割も大きい。

さらに「町内会」などの社会組織では、組織活動を通した中での教育条件の整備（「子供会」の育成など）や、ボランティア活動の展開、といったこともあり得る。実際、「通学見守り」の活動や、ゲストティーチャーとしての活動などに関わっている例も多い。そうした様々な事業の場面での世代間交流や児童生徒の学びは重要なものであり、また、事業の準備の過程での「学習」や「人格形成」等々が考えられる。地域の活動が、科学的な思考に結びついたり、人間としての成長発達に結びつく経験として蓄積される。それが学校教育の場面にも大きくプラスの面で作用する、といったことが考えられる。

弘前市の場合は、先にも触れたが、地区公民館や「学区まなびい」の果たしている役割が大きい、と考える。

以上のことを「社会的な協働・協同」の文脈の中で捉え直してみると、地域の保護者、住民、教員、行政、町内会などの社会組織、企業、NPOなどが、「社会的協働・協同」で、「教育」という営みを遂行する、ということである。さらに、「博学連携」のように、地域における調査研究や資料の収集・保存・管理、展示、教育普及事業を行っている博物館などとの連携も追求し得るところであり、図書館や公民館などとの連携も可能である。加えて、公立の研究機関や大学等との連携も可能である。

次に、企業活動と教育・学習について簡単に触れておきたい。業種や企業の個別性にもよるが、企業が「地域の教育力」の一端を担うことは明らかである。それは、児童生徒が労働の疑似体験を行う「インターンシップ」だけの問題ではない。保護者が企業に雇用されている場合が多いのだが、就業時間や勤務条件、さらに給与水準などによって、「保護者」として児童生徒に関わりあえる条件が規定されてくる。授業参観やPTA活動への配慮ということも重要である。また、企業活動を通じた教育内容の構築・教育実践への協力、ということも追求されている。いわば「企業文化」ということにも関連してくるのだが、今日「ワーク・ライフ・バランス」ということも重視されてきていることに注目したい。さらに、「キャリア教育」との関連でも、企業が積極的に学校教育に「貢献」できることは多い。例えば、教育内容として銀行や加工工場の仕組みについて理解を深める、といったことも可能である。

昨年、寝屋川市で中学1年生二人が殺害される、という事件があった。この事件を見ても「地域の教育力」の形成が重要な課題である、ということが明らかである。

Ⅳ. 「教育問題」と「大学開放」

(1) 「教育問題」を捉える基本視点

ここでは「いじめ」について考えてみたい。

児童生徒の間で生じる「いじめ」については、基本的に以下のような視点が重要である、と考える。

第一に、児童生徒の成長発達段階（概ね小学校高学年生から高校生）に起こりがちな、社会性を十分発達させていない時期に起こることが多い社会的現象である。「いじめ」をする側も受ける側も、「社会性」を十分形成できていないことが主要な問題である、ということである。

第二に、その「いじめ」を受けた側についても「いじめ」をする側においても、その兆候が初期の段階から教員・保護者などが把握し適切に対応することが重要であり、そのためには、学校・家庭・地域が児童生徒を見守り、機敏に対応することが必要である。実際には、学校では教員が、家庭では保護者が「兆候」を見逃しがちである。昨年岩手県矢巾中学校で起きた、中学2年生の自殺事件は衝撃的であった。学校では業務多忙という実態や組織的な対応をし難い状況があり、家庭では保護者に余裕がなく親子関係がうまくいっていない、等々の状況があったりする。また、子どもに教員や児童福祉関係の職員が尋ねても、子どもはなかなか事実を話さない、告白しない。だからこそ、日常的に見守り、「兆候」を見逃さず、また、信頼関係を確立しておくことが求められる。

第三に、児童生徒の生活の基盤において、「いじめ」を生み出しやすい、そしてそれを深刻化させやすい状況がある、と考える。例えば、遊びの内容・方法を見ると一人ひとり孤立した傾向が強まっていること、地域での子ども集団が解体した中で、年少から年長までの集団が存在せず、また、集団の中でルールのある遊びをする経験が非常に少なくなっていることも指摘できよう。さらに、豊かな自然が身の回りにありながら、積極的に自然と触れあう、自然と関わった遊びを通じて様々な体験をすることがし難くなっている、等々のことが考えられる。

第四に、そうした子どもが置かれている状況を改善し、社会性を含めた子どもの成長（知識の獲得、科学的世界観の形成、身体的成長発達など）を図ることが求められるのだが、それには学校・家庭の果たすべき役割とともに、社会教育が重要な役割を果たし得る（現に一定の役割を果たしている）、と考える。弘前市の場合、地区公民館や「学区学びい」等が様々な実績を上げていることを確認したい。地域での「運動会」や農作業体験、「ジャンボカルタ作り」、「イワナ獲り」、国際交流事業等々の事業を企画実施し、それらに参加した子ども達が確実に成長した姿を見せている。このように、「地域の教育力」を向上させていくことが、「いじめ」を防止し、また、深刻化することを防ぐことにつながるものと考えられる。

次に、「虐待」について考えてみたい。保護者が子どもを虐待するケースでは、以下のような傾向・要因が指摘できるのではないかな。

第一に、保護者自身に大きなストレスが生じていることである。職場や家族・地域での人間関係や仕事上でのストレス、自己の将来の不安・健康の不安などのストレスにより、子どもの発言や所作などに対して過剰に強い言葉（叱責、しつけの範囲を超えたもの）や体罰・暴力に走ってしまう、ということである。

第二に、成長過程で、保護者自身が「体罰」や「暴力」を受ける経験をしたことで、自分の子どもにも同じことをしてしまう、という場合である。世代間での再生産なのだが、自分自身が経験しているので、それが正しい（適切な、求められる、必要とされる）行為ではないということに気付かずにいる、という場合である。

第三に、子どもに対する教育やしつけについて、基本的な態度・内容・方法を理解していない、という場合である。知識を欠如しているが為に、感情の赴くままに子どもに接してしまう、という場合である。子どもの成長発達や成長発達過程における子どもの様々な発言・所作について十分理解していない、あるいは子どもは親の所有物ではない（子どもは基本的人権を持つ、独立した人格を持つ存在・個人である）ということの理解が不足している、という場合である。

第四に、自分を客観的に評価しコントロールすることが十分できていない、発達が不十分である、という場合である。

これまで「いじめ」と「虐待」をめぐって述べてきたが、この節の最後に「生涯発達」ということに触れておきたい。

近年、認知症患者の「社会参加」をめぐって医療・福祉の領域を中心に、活発に研究・実践の成果が紹介されてきている。そこに、教育論としても注目されることが多い。

昨年9月に放送された「認知症」に関する番組は、極めて示唆的なものであった¹⁰⁾。番組に出演した患者さんの、発症から現在に至る労働・生活の営みが詳しく紹介されていた。その中で、発症した時点でJRの職員であったのだが、職場の理解があって暫く勤務を継続したこと、そしてその間は症状の進行が非常に緩やかであった、ということである。その後、JRを退職するのだが、家にいることが多くなる中で症状が急速に進行し、その後ボランティア活動で「社会参加」することで、再び症状が改善され今日に至っている、というものであった。

ここから、「生涯発達」の可能性と、「社会参加」の重要性を読み解くことができる、と

考える。

(2)「大学開放」の可能性

周知のように、昨年、二人の日本人がノーベル賞を受賞した。二人とも大学はいわゆる「旧7帝大」ではなかったことなども含めて様々な意味で注目されたのだが、今後の日本の研究者育成という意味では大きな課題があることを指摘する意見もあったことが注目される¹¹⁾。

言うまでもなく、現在は資本主義社会であり、社会の基本原則では、資本の論理として少しでも多くの利潤を得ることを考える。また、投資した資本を少しでも早く回収したい、と考える。そうした傾向は、大学の研究にも影響を与えており、短期間で成果が出ないテーマ・内容の研究、利潤の上がらない研究には補助しない・投資しない、ということになる。大学の研究者との共同研究においても同様である。

さらに、科研費も含めてこうした「成果主義」が基調になっており、「金儲けにつながらない」研究（基礎研究など）には研究費がまわってこない、という状況になっている。

そこにはまた、社会的に「人材育成をどのように図るべきか」という問題も内在させている。資本が編成する研究、あるいは資本に包摂された研究が、全社会的にみた場合には、著しく偏差を必然的にもたらすことになる。研究領域によっては、次代を担う人材が消失してしまう、ということになる。

一方、日本の今後の経済発展を展望した場合、中小企業の商品開発力や技術力を発展させることで持続的な社会の発展を図る、という課題があることを指摘しておきたい。周知のように、「家電」の領域では多くの部門で、中国や韓国等の国に市場が支配されてきている。「シャープ」という企業の買収問題は、その象徴的なものと言える。今日、日本企業には新たな技術開発・商品開発をすることが求められているのであるが、そうした期待に応えるようなシステムづくりや「担い手の育成」が必要とされている。その際、かつてのような「大企業を軸とした輸出中心産業」という経済モデルよりも、多様な中小企業の多方面にわたる技術開発・商品開発ということに将来展望を見いだすべきではないか、と考える。

現在、日本企業の内部留保金は350兆円になると言われている。こうした「余剰金」が、真に効果的な技術開発・商品開発に投じられるならば、日本の将来も明るいものとなる、と考える。

現在、「地方創生」が重要な政策課題となっているが、これまで述べてきたように、中小企業をサポートすることが何よりも必要とされていることとして確認したい。そのためには、多様な領域での「大学開放」が求められている、と考える。また、地域の経済的な発展条件が整備されることがあってこそ、「地域の教育力」を発展させることが可能になる、と考える。

これまでの「大学開放」は、一方で「公開講座」や「授業公開」、「履修証明制度」のように「教育」機能が取り沙汰され、他方で「研究」は「教育」と完全に切り離された枠組みの中で追求されることが多かったのではないだろうか。今後は、「地域」に即して、「教育」と「研究」を統一した形で「大学開放」の内実が探究されるべきである、と考える。

V. 結び

今日、様々な教育問題が取り沙汰されているが、「いじめ」や「虐待」といった問題にしても、「教育」と「学習」について掘り下げて考える必要がある。また、児童生徒の日常生活における「学び」や自然体験なども含めて、総合的に捉えることが必要とされている。

また、「家庭教育」や「学校教育」、「社会教育」との関連の中で問題を捉え、「社会的協同性」の文脈において理解を深め、実践していくことが問われている。「地域の教育力」についても同様であり、「地方創生」の課題とも密接に関係している。

この小論では、そうした問題意識をもって「教育のグランドデザイン」を構築する上で、とりあえず第一步を踏み出した。もとより、一人で対応できる範囲は限定されており、関係者からのご意見をいただくためのきっかけ作りになれば、と思った次第である。

〈注〉

- 1) 2016年3月10日放送のNHK「NEWS WEB」では、昨年12月に起きた、広島県府中町の中学3年生が自殺した事件を扱っていた。この事件は、直接には誤った非行歴にもとづく「進路指導」が問題であるとして取り上げられているケースが多いのだが、この番組の中で教育評論家の尾木直樹氏は、「教員評価システム」を含めて現在の学校運営・管理システムの問題に言及し、これまでの教育行政が果たしてきた役割・責任にもメスを入れるべきではないか、と指摘している。なお、筆者は関連して、東日本大震災の際に大川小学校で生徒・教員に多くの犠牲者がでたことについて、今日の学校の管理運営体制に内在する問題に触れたことがある。拙稿「大学の社会的役割と『大学開放』」（『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第17号、2014年）を参照されたい。
- 2) 拙稿「協同性を捉える視座—キャリア教育の展望と大学開放との関わりで—」（『弘前大学生涯学習教育研究センター年報』、第18号、2015年）参照。
- 3) 藤田公仁子「地域住民の参加・参画型学習活動と大学開放事業プログラムの可能性」（『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門 年報』、第17巻、2016年）を参照されたい。
- 4) 注2、と同じ。
- 5) 現在アメリカの大統領候補の選挙が行われているが、候補者の発言をめぐって議論がなされている。「共和党」の候補選びの中で、イスラム教徒を排除しようとする趣旨の発言をしている候補が優勢になっている。日本でも、「ヘイトスピーチ」をする人々がおり、大きな問題になっている。ここでは、こうした排外主義的な思想と行動は、人類が発展させてきた「基本的人権の尊重」という価値観・行動規範を否定する、時代に逆行するものである、ということを指摘しておきたい。また、アメリカ大統領選挙や「EU」におけるシリア難民の受け入れ拒否問題も「対岸の火事」ということではない。確かに、外国人労働者の大量入国は、国内における労働市場の競争激化をもたらす要因である。しかし、問題の所在は、外国人労働者の受け入れの如何ではなく、「非正規雇用」を大量に創出し、相対的過剰人口を意識的に増大させ、労働

者の雇用条件を劣悪な状態に押しとどめようとする「資本」の動向とその利益にそのような政策を推進する政府や政治家・高級官僚にある、という基本的な問題を見失ってはならない。

- 6) 「一卵性双生児」についての研究から学ぶことは多い。遺伝子の構成が全く同じである一卵性双生児についての研究は、人間の成長発達が遺伝子によって生物学的に規定されていると同時に、社会的な要因・環境にも大きく規定されていることを明らかにしている。「家族」という人間関係が、構成員である親子・兄弟や姉妹などとして取り結ぶ家族関係の中で、それぞれ「個人」として独立した人格に成長していくものと考ええる。
- 7) 基本的な整理として、「一般」、「特殊」、「個別」を区別して捉える必要がある、と考える。また、「教育」について議論する前提として、どのような「場」の設定をするのか、ということが問題である。「場」の設定は、それを成立させている条件と、そこに貫徹する「法則」や「本質」を規定することになる。
- 8) 「国家存亡の危機」というイデオロギーには、民族主義的・国家主義的な価値観の同調を迫る「魔力」がある。かつて、「ノーベル賞」も受賞した天才的科学家ハーバーは、第一次世界大戦の際に毒ガスの開発を行った。大量の兵士を死傷させた毒ガス兵器は、今日では「非人道的」ということで国際的には使用することを禁じる条約を多くの国が批准している。しかし、当時、ハーバーは、「戦争を早く終わらせる」という大義名分と「国家存亡の危機」ということで、非人道的な毒ガス開発を積極的に行ったのである。21世紀に生きる私達は、「積極的平和主義」という美名のものも含め、「戦争」そのものの「非人道的」、「非人間的」、「反社会的」な本質を見据えた議論・実践をする必要があるのではないか。また、戦争は本質的に政治の継続である。一端戦争が始まった場合、軍事の独立した論理が展開されることになるが、あくまでも政治の延長上にあるのが「戦争」である。そして、「政治」は、本質的に「経済的利害関係」を反映した形で行われる。
- 9) 各地で「ひきこもり」の人々の「社会参加」をサポートする取り組みがなされているが、秋田県藤里町の取り組みは注目されるところである。
- 10) NHK「認知症キャンペーン『アルツハイマー病 進行を食い止めろ!』」(2015年9月8日放送)。
- 11) 2015年10月10日放送、NHK「ニュース深読み」。科学ジャーナリストの馬場錬成氏は、昨年の日本人二人がノーベル賞を受賞した際に、現在の日本の研究・技術開発の危機的状况について研究のための「投資」が少ないこと、大学院に進学する若者が絶対的に減少していること、を指摘している。これでは、将来的に、日本の研究が行き詰まることは明白である、と考える。

大学生が担う大学開放事業に関する一考察

—「ちびっこ海賊の佐井村まち探検」3年間の取り組みを例に—

深 作 拓 郎

1. はじめに

大学開放は新たな局面を迎えている。教育・福祉・産業などあらゆる領域において「再生・再構築」が必要とされている今日の日本社会において、大学開放は、一方的な「公開講座」の提供等から脱し、地域の「再生・再構築」のための主体形成を目指した学習内容の開発、相互学習や連携・協働のシステムの開発が求められているのである。さらに、「地(知)の拠点整備事業」などでは、学生の実践的教育の場、地域参加活動の場としての教育システムの構築をも柱に据えた大学と地域の関係づくりが求められているのである。

そこで本稿は、筆者が学生とともに取り組んでいる学生・教員研究会「らぶちる—LOVE for Children」(以下、「らぶちる」と称す)の取り組みの中から、学生が地域の社会教育関係団体と協働で行っている事業を紹介し、その可能性を探っていくこととする。

2. らぶちる-LOVE for Children-とは

(1) 活動の発端と基本姿勢

「らぶちる」は、2012年6月に結成された研究会である。同年12月に開催された『第58回子どもを守る文化会議』のシンポジウムの企画と運営を担うことが1つのきっかけに、筆者の講義を受講した数名の学生からの要望があり結成した。子どもと関わる術や地域社会との関わり方について体験的に習得していくことを通して地域社会を担う一員である意識の形成(市民性の涵養)を目的に据え、児童福祉施設設置最低基準第39条に定められている「遊びを指導する者」¹⁾を指針に、①子どもが主体であること、②広がりのある遊びを考えること、③子どもたちとの距離感を保つこと、の3点を基本姿勢としている。

構成メンバーは、2015年末現在で学生18名と教員1名であり、教育学部生が一番多いが、人文学部、理工学部、医学部医学科、同保健学科で構成している。ここでの教員の関わりは、指導者としてではなく研究会のメンバーのひとりとして位置付けを基本とし、「共に活動し、信じて見守る」姿勢を貫いているが、指導者的役割をすべて払拭できていないわけではない。その背景として、とりわけ遊びを通した子どもとの関わり方と地域との関わり方については、大学の教育課程には盛り込まれていないため、その方法を習得する上で助言・指導が必要となるからである。具体的に行っている助言・指導の内容は、①「主体」を常に意識して活動できるようにする、②手段としての「遊び」がさまざまな方向に広がるよう、「展開ができる・世界が広がる遊び」を常に意識するように促す、③活動後のリフレクション(省察的考察)を行う、の3点である。

(2) 活動概要

「らぶちる」の活動は、大きくは4つの柱で展開している。

①らぶちる児童館

段ボールや古新聞などを駆使して「手づくりの遊具」を製作し、地域に出かけていき、子どもたちと遊ぶミニ出前児童館のような活動で、年1～2回開催している。遊び方も来る子どもたちによって変容していく「広がり」のある遊びになるようにしている。加えて、動きのある遊びだけでなく、動きの少ない「静」の遊びの両方を設置するようにしている。

一例を紹介する。2015年3月13日（土）10:00～14:00弘前駅前の商業施設「ヒロロ」内にある公共スペースを借用して開催した。「温泉」をテーマに、5つの遊びを設置した。古新聞を細かくちぎって直径約5メートルの段ボールの囲いの中に、70リットルのごみ袋12袋分の細かくちぎった古新聞を敷き詰めた「しんぶんプール」、同様に70リットルのごみ袋7袋分のペットボトルキャップを敷き詰めた「キャップの湯」、ワインコルクを用いた「コルクの湯」や「カプラの湯」を設置した。

当日は、約200人の子どもたちが来場し、さまざまな遊びを繰り広げた。とりわけキャップの湯では、無数にあるキャップからオレンジ色のものだけを集めて金魚を制作したり、紫色のキャップを集めて「ぶどう飴」と名付けて行商する子どもがいたり、学生たちが事前に予測していた遊びの内容をはるかに超える広がりがみられた。

②らぶちるひろば

毎年10月の第4土・日に開催される弘前大学総合文化祭に合わせて開設している。教室を1つ借用し、大学祭に来場している小～高校生のフリースペースを提供しながら、らぶちるメンバーと語り合う機会を設けている。ふらりと来る子どもから毎年2日間ずっと滞留する常連の子どもとさまざまである。

子どもたちからは、学校や家庭でおきている教師や親への不平・不満、友人関係の悩みなどが語られ、彼らの心の底にある声を汲みとる貴重な機会となっている。

③市町村教育委員会、児童館等の依頼による活動

詳細は後述する佐井村教育委員会・子育てサークル「ぼぷり」・弘大生涯学習教育研究センター共催事業「ちびっこ海賊の佐井村まち探検」をはじめ、近隣の市町村教委や関係諸団体からの依頼による活動をしている。主たる内容は、上記「らぶちる児童館」のアウトリーチ的な内容が多い。

このほか、あおもりで「生きる・働く」を学ぶ中南地区実行委員会との共催で「こどものまちミニひろさき」を実施している。「こどものまち」は、1979年ドイツ・ミュンヘンでスタートした取り組みで、子どもたちが「遊び」ながら、自分たちの手で自分たちの「まちづくり」を行い、市民としてそこで生活することを体験する。この取り組みを通じて、市民の一員であることと、まちを創り担う主体であること（＝市民性の涵養）を体感的に学ぶ取り組みである。ここでの「らぶちる」の役割は、実行委員会と子どもたちのコーディネート役として事業全体の準備と進行管理を務めた、「こどものまち」の具体的な内容を企画する「子どもスタッフ」（公募制、小学5・6年生20人）の子どもスタッフ会議のサポート役、本番当日は「先住民族らぶチアーノ族」と称して、2日間で延べ350人

の子どもたちが主体的に活動できるように見守り・寄り添い・実現のための後方支援を行った。

④定期的な学習会、施設見学等

毎年5月に岩手県立児童館いわてこどもの森の施設見学、学外から講師を招いた学習会を年1～2回開催している。また、希望者を募り「児童館・児童クラブ全国大会」などの研修会へも参加し、全国の児童厚生員・放課後児童支援員との交流を図っている。2015年度は、盛岡市で開催された「第55回社会教育研究全国集会」において事例報告を行った。

3. 佐井村教委・弘大生涯学習教育研究センターの共催事業から

(1) 佐井村について

佐井村は、青森県下北半島の北西部沿岸に位置し南北に細長い形状を成している。600～800m級の山々に周囲を囲まれ、集落は海岸線に沿って8集落（原田、古佐井、大佐井、矢越、磯谷、長後、福浦、牛滝）が、山間部に1集落（野平）が点在する。人口は約2,200人超、世帯数約1,000戸で佐井地区（大佐井、古佐井地区）に人口の6割近くが集中している。村内には、公立保育所が1か所、小学校3校、中学校3校が設置されているが、福浦地区と牛滝地区は小・中併設校となっており、牛滝小・中学校はかつて本州唯一のへき地5級校に指定されていた。高等学校は隣接する大間町にある県立大間高校へ通学するかむつ市や青森市などの遠隔地に進学する生徒もみられ、その場合は通学が不可能なため村を離れ下宿等をしている。村内の医療機関は歯科診療所のみであり、近くても大間町にある大間病院かむつ総合病院という地域である。古くより蝦夷の定住集落が存在していたとみられており、江戸時代にはヒバの産地および積出し港として、また、北前船寄港地として栄えた。林業・漁業が主産業であるが、国指定の名勝・天然記念物に指定された「仏ヶ浦」をはじめ、福浦地区の漁師によって継承されている「福浦歌舞伎」や京都の祇園祭のながれを汲むといわれる箭根森八幡宮例大祭など伝承文化も盛んなこともあり、年間約20万人の観光客が訪れており、観光も主要な産業である。

(2) 事業のきっかけ

この村で活動する子育てサークル「ぽぷり」（以下「ぽぷり」と称す）は、首都圏から同村に嫁いできたAさんら女性数名が中心となり、保育所入所前の子どものいる母親たちの居場所づくりを目的に、2012年に設立したサークルである。発足時は約6名近い母親たちが情報交換等の活動を定期的に行っていたが、現在は3～4名で細々と活動している。当時は近隣に子育てサークルがなく、他の団体との交流もなかったようであるが、村教委に赴任した派遣社会教育主事B氏の誘いによって参加した青森県総合社会教育センター主催「絆でつながる家庭教育支援事業」がきっかけとなり、自分たちもより積極的に他団体と交流しながら活動の幅を広げていきたいとB氏に相談し、B氏から筆者が打診をしてきたことから、2013年度から、村教委・「ぽぷり」・当センターの3者共催による事業を実施することになった。

B氏からは、「ぽぷり」からの要望として、地域の小学生を募った「まち探検」的な活

動をしたいので、その具体的支援をしてほしいということが伝えられた。このことを「らぶちる」メンバーに相談したところ「是非一緒にやりたい」との即答を受け、1年目は筆者が講師、「らぶちる」は補助者として、2年目からは筆者は全般的な管理に徹し、「らぶちる」が企画とコーディネート役として関わってもらっている。

	1年目（2013年度）	2年目（2014年度）	3年目（2015年度）
テーマ	ちびっこ海賊が佐井村に出没	仏ヶ浦で秘宝の水と薬を探せ	ちびっこ海賊と謎の地図
期 日	2013年10月12日（土）	2014年10月11日（土）	2015年10月31日（土）
場 所	佐井村佐井地区	佐井村福浦地区（仏ヶ浦）	佐井村佐井地区
参加者数	小学生30名、高校生2名、現地スタッフ6名	幼児・小学生35名、中学生4名、現地スタッフ9名	幼児・小学生36名、中学生5名、高校生1名、現地スタッフ11名
概 要	村内の要所を巡りながら、数々のミッションをクリアして、お宝をゲットするというストーリーで実施しました。当日は風が強く小雨が降る悪天候でしたが、約30名の小学生たちが元気に村内を駆け巡り、最後は海賊の「お宝」を発見した。	村の名所である「仏ヶ浦」を舞台に、病気になった大海賊を助けるために秘宝の水（実在する霊水）と薬を探しに行く！というストーリーでまさしく探検をした。さまざまなミッションをクリアして、最後は水と薬を手に入れることができた。	「大海賊のひ孫が見つけた謎の地図を解き明かす！」という内容で、村史にある写真を手掛かりに昔の村内の様子を学びながら探検を繰り広げた。謎を解き明かして完成させた4枚の地図を合わせると「4031」という数字が…。

資料1 ちびっこ海賊の佐井村まち探検の概要

(3) 事業の準備過程

企画案は、筆者の助言の下で「らぶちる」メンバーが立案し、「ぽぷり」と村教委を交えて協議を重ねながら進めている。1年目である2013年度は3回の講座として構成した。1回目と2回目は本学教員を講師として派遣し、準備から当日の運営を村教委の助言のもと「ぽぷり」のメンバーが行い、「らぶちる」の学生たちは講座実施中の託児を担い、託児終了後に事前調査を実施した。2年目である2014年度以降は、2回の講座を無くして純粹に「ちびっこ海賊の佐井村まち探検」として、2回の事前調査・打ち合わせと本番という形式をとっている。

2014年の事業を例に詳細を説明する。前年度の反省会において、村在住の子どもたちもめったに訪れない仏ヶ浦を舞台に観光船を利用したプログラムにしたいという意向が伝えられていたため、仏ヶ浦に関する文献資料の収集を6月頃から開始した。それにより、題材に使用できそうなポイントを抽出した上で、1回目の事前調査に臨んだ。

仏ヶ浦は岩場のため足場が悪く高低差もあるほか、海の状態によって潮位が大きく変化するため、子どもたちの事故を防ぐ観点からかなり綿密に調査をした。現地調査の後2日間かけて企画案について協議をして企画内容について精査し、双方の役割等の確認を行った。その後メール等で情報を共有しながら、2回目の現地調査で危険箇所等の再確認を行い、実施に向けて企画内容についての再協議をした。この時は、海が時化て観光船が欠航となってバス移動となった場合の対応、悪天候で仏ヶ浦に上陸できない場合の代替案についても協議を行っている。

「らぶちる」は、事前調査と協議で決まった事項を反映させたプログラムを練り直すと

ともに、探検プログラムで必要となるアイテムの作成や最後に褒美として渡す品の試作・本作成を同時並行で行い、本番を迎えた。

	ぽぷり・村教委	らぶちる	大 学
企 画 8月～9月初旬	プログラムの検討 予算案の作成 県教育庁との連絡調整	プログラムの作成・提案 準備分担とタイムスケジュールの提案	予算の作成 タイムテーブルの作成 進捗状況の管理
準 備 9月～10月初旬	参加児童の募集 菓子等の準備 小学校への告知 中学生ボランティアの募集	探検全般 ・アイテムの作成 ・褒美の品の作成	事業全般の進行管理 関係機関との調整
当日の運営	船会社との連絡調整 県教育庁との調整 ミッションポイントの運営 安全管理 記録	探検の運営 ・探検プログラムの進行 ・子どもたちの安全管理 ・中学生へのサポート	事業全般の進行管理 記録

資料2 2回目（2014年度）の役割分担

(4) 事業の様子

①2014年度事業「仏ヶ浦で秘宝の水と薬を探せ」

2014年度の事業当日は、前々日の低気圧の影響により観光船が欠航となったためバスでの移動を余儀なくされたが、この場合を想定したプログラムをあらかじめ用意していたため、大きな混乱もなく事業を開始することができた。

集合場所である「津軽海峡文化館アルサス」に集合した子どもたちは、佐井村のゆるキャラ「雲丹（うんたん）」が大海賊から預けられたというDVDを鑑賞し、そのビデオレターにて、「大海賊（佐井村立保育所長）が病気を患ってしまったため、仏ヶ浦にある秘宝の薬と霊水があれば病気が治るので探してきてほしい」と指令が出されて探検がスタートした。約40分かけてバスで仏ヶ浦へ移動した後に、子どもたちは7～8人のグループを編成し、3つの関門（①「旗をつくって、赤いバンダナの人に見せろ！」、②「海の生き物の写真をとって、青いバンダナの人に見せろ！」、③「動物の形の岩をみつけて写真にとって如来の首に行け」「楽しそうな顔の岩をみつけて写真にとって双鶏門に行け」）をク

観光船欠航時のタイムテーブル

7:30	深作先生、らぶちる、ぽぷり、関係者、アルサス海側駐車場集合
8:15	参加者集合開始（アルサス）出欠確認
8:30	開会式…DVD上映
9:00	バス乗車
9:45	仏ヶ浦到着
10:10	探検スタート
11:55	探検終了
12:25	仏ヶ浦発車、ここで子どもたちにお菓子を配る
13:10	アルサス到着、児童解散
13:40	昼食・反省会（会場：佐井村役場 1階 和室）
15:30	協力者へのお礼の挨拶回り等 深作先生、らぶちる
17:30	解散

資料3 2014年度まち探検のタイムテーブル（実施計画書から抜粋）

リアすると、タヌキの絵とともに「たかたたいたぞたくたのたた旗に行け」と書かれた謎の指令が渡された。子どもたちはこの謎を解き明かして「海賊の旗」が掲げられている蓬莱山へ行き、「ニセ雲丹（うんたん）」から、霊水を汲むビンと白い和紙を受け取り、全員で秘宝の薬（「らぶちる」が作成した偽薬）と霊水（実在する湧き水）の在り処である通称「極楽浜」へ向かい、霊水を汲み事前に渡された和紙を水に濡らすと秘法の薬が隠されている在り処のヒントが浮き出てくるというしかけにした。薬を発見した後は、仏ヶ浦の船着き場前の砂浜に移動して大海賊に霊水と薬を渡し、大海賊からはお礼の褒美の品（らぶちるの手作り）を受け取り、最後にこの日の感想を書いた紙をワインボトルに詰め、「メッセージボトル」として海に投函して事業終了となった。



写真1 海の生き物を探している最中



写真2 次のミッションの謎解き中



写真3 極楽浜に到着



写真4 和紙を水に浸すとなにやら文字が…



写真5 ついに秘宝の薬を発見



写真6 不老長寿の水と薬を大海賊に

	A グループ（ピンク）	B グループ（オレンジ）	C グループ（黄色）	D グループ（みどり）
第一関門	らぶちるから ミッション1を受け取る。			
	ミッション1 「旗をつくって、赤いバンダナの人に見せろ！」 ・各グループに 布（40cm×50cm）、木の棒（80cm）、カラーペンを配布。 ・グループのマークを決めて、布に描き、棒に括り付ける。 ・赤いバンダナを巻いたスタッフを広場に配置するので、確認してもらい、ミッション2を受け取る。 →ここで作った旗は活動中に持ち歩き、第四関門で集まる蓬莱山の麓に立て掛ける予定。記念写真の際にも使用。			
第二関門	ミッション2 「海の生き物の写真をとって、青いバンダナの人に見せろ！」 ・仏ヶ浦を散歩して海の生き物を見つける。 ・らぶちるメンバーのスマホで撮影し、保存。 ・青いバンダナを身に着けたスタッフを広場付近に配置し、ミッション成功を確認してもらう。 ・ミッションの成功が確認されたら、第三関門へのヒントを受け取ることができる。			
第三関門	ヒントa にわたりのイラスト		ヒントb 如来の顔のイラスト	
	双鶏門に行って ぼぶりさんからミッション3を受け取る		如来の首に行って ぼぶりさんからミッション4を受け取る	
	ミッション3 及び ヒントカード 「動物の形の岩をみつけて写真にとって如来の首に行け」 ・動物の形に見える岩を見つける（子どもたちの豊かな想像力にゆだねる）。 ・らぶちるメンバーのスマホで撮影し、保存。 ・ヒントb もミッションの紙に書いておくので、如来の首へ向かう。		ミッション4 及び ヒントカード 「楽しそうな顔の岩をみつけて写真にとって双鶏門に行け」 ・楽しそうな顔に見える岩を探し出す（子どもたちの豊かな想像力にゆだねる）。 ・らぶちるメンバーのスマホで撮影し、保存。 ・ヒントa もミッションの紙に書いておくので、双鶏門へ向かう。	
	如来の首に行って ぼぶりさんにミッション3の確認をしてもらい、ミッション4を受け取る		双鶏門に行って ぼぶりさんにミッション4の確認をしてもらい、ミッション3を受け取る	
	ミッション4 「楽しそうな顔の岩をみつけて写真にとって双鶏門に行け」		ミッション3 「動物の形の岩をみつけて写真にとって如来の首に行け」	
第四関門	ヒントc 「たかたたいたぞたくたのたた旗に行け」 ヒントd 石鹼水の紙と水につける意味のヒント（仮） ・蓬莱山に到着する。 ・旗を立てかける→引き換えにピンを受け取る。 ・みんながピンを受け取ったら、ニセ雲丹が極楽浜に誘導。			
最終関門	4グループそろったら、みんなで極楽浜へ向かう。			
	極楽浜到着 グループ毎に（誰が汲みにいくかは臨機応変に）瓶に不老長寿の水を入れてくる			
	・湧水をかけるとヒントが浮き出てくる仕掛け。 →真っ白い紙に石鹼水で書いておいて、ヒントdとして差し出したもの。 ・薬は事前に窪みにこっそり隠す。			
	岩のくぼみから薬を発見し、採取。			
エンディング	広場へみんなに戻る。			
	広場に戻ったら大海賊が具合悪そうにしている。お話を始める。 「みんなが頑張ってくれているから自分も頑張ってここまで来れたんだ。だが、もうこれ以上無理だったからみんなをここで待ってた！」 ・みんなで大海賊に薬と水を渡して、大海賊はそれを服用して回復！ 大海賊から褒美を貰う →大海賊が宝箱を持ってきて、お礼の言葉と共にみんなに渡す。 まとめ グループでメッセージボトル作成 ・グループにピン1本、紙1枚、ペン数本、ひも1本を配布。 ・活動の感想やメッセージ、絵とか何でも自由に書いてもらう。 ・「拾った人は捨てないでください」とか、佐井村教委の住所や大学研究室の住所とか書いた紙も同封。			

資料4 2014年まち探検の流れ (実施計画書から抜粋)

②2015年事業「ちびっこ海賊と謎の地図」

この年は、「村の歴史を子どもたちに触れてもらえる内容にしたい」というアイデアが「ぼぷり」の側から挙がった。そこで、『村のあゆみ』²⁾などの図書資料を調査し、かつての佐井村の風景写真をヒントに要所をめぐるという企画でまとめ、「大海賊のひ孫が見つけた謎の地図を解き明かす!」というテーマとなった。ミッションの中に歴史を感じる部分と普段はあまり行かない場所を取り入れることで、子ども目線による佐井村の良さを発見することをねらいとした。

10月31日「津軽海峡文化館アルサス」に集合した子どもたちは、オープニングにおいて「雲丹（うんたん）」から届けられたDVDを鑑賞した。これには「大海賊のひ孫が、海賊船を探検したところ謎の地図を発見した」というビデオレターが収録されており、その後大海賊から「この地図の謎を解くには、船にあった写真の場所に行く必要がある。諸君、私の可愛いひ孫のために、謎を解き明かしてくれ!」と指令が出され、子どもたちは4つのグループごとに、謎の地図と昔の写真を手掛かりに探検を繰り広げた。回るポイントは、村中心部の古佐井・大佐井地区にある「旧若山家」、かつて北前船の船宿として繁栄した「能登屋本陣」、「旧佐井郵便局（現「モリピアたけうち）」、2006年に閉院した「旧佐井診療所」、京都祇園祭の名残を残す盛大な秋祭りで有名な「箭根森八幡宮」を回った。それぞれのポイントでは、「ぼぷり」のメンバーから、そのポイント地点にまつわる歴史クイズが出題され、子どもたちは四苦八苦していた。各ポイントを回った子どもたちが完成させた4枚の地図を合わせると「4031（しおさい）」という数字が見えてきた。「津軽海峡文化館アルサス」の近くに「しおさい」の付く場所は3カ所。子どもたちは推理をして意見を出し合い、2カ所目の「しおさい公園」に隠されていたお宝を発見した。

10月31日晴天時のタイムテーブル

- 7:45 深作先生、らぶちる、アルサス海側駐車場集合
- 8:00 大人のスタッフ集合
- 8:30 参加者集合開始（アルサス）出欠
- 9:00 開会式
- 9:30 探検開始 地図作成（アルサス）、最後の謎を解く→しおさい公園でお宝（万華鏡）ゲット
- 12:00 児童解散
- 13:00 昼食・反省会（会場：佐井村役場 1階 和室）
- 15:00 現地後始末、協力者へのお礼の挨拶回り等（深作先生、らぶちる）
- 17:00 解散

☆探検で回る地点（この中から各グループ5地点）衣装は昔風で統一

- ・顔がなくなったこま犬（箭根森八幡宮）
- ・若山家
- ・佐井小学校
- ・能登屋本陣
- ・旧佐井郵便局（現「モリピアたけうち」）
- ・旧佐井診療所
- ・アルサス

☆各グループが回るポイント

- ㌢ (4) 若山家→モリピアたけうち→能登屋→箭根森八幡宮→アルサス
- 行 (0) 佐井小→診療所→箭根森八幡宮→若山家→アルサス
- け (3) 診療所→箭根森八幡宮→モリピアたけうち→能登屋→アルサス
- !! (1) 能登屋→箭根森八幡宮→診療所→モリピアたけうち→アルサス

資料5 2015年度まち探検のタイムテーブルと探検したポイント（実施計画書から抜粋）



写真7 箭根森八幡宮にて



写真8 クイズを出題中



写真9 旧佐井診療所にて



写真10 4つの地図をつなげると…

4. 大学生は大学開放の担い手になりうるのか ―成果と課題からの考察―

(1) 事業の成果と課題

3年間の事業から、「らぶちる」の学生たちはもちろんのこと、「ぽぷり」や村の子どもたちにとって、重要な事業として位置づきは始めている。事業終了後、関係者に行ったヒアリング並びに村教委から提出された内容評価書³⁾からは大きくは次のようなメリットが述べられている。

- ①高校や大学がないため、幼児や小学生児童が中学生、高校生、大学生と一緒に交流できる貴重な経験である
- ②「ぽぷり」のメンバーは、打ち合わせ（事前調査）に積極的に参加し、経験と昨年までの反省をふまえ、より良い企画を作ろうと積極的に発言するなど、主体的参加の度合いが年々高まってきている
- ③ボランティアとして参加している中学生も、自身が楽しみながら的確にサポートを行っていた。その姿を見ている現在の小学校高学年の児童が中学生になった時、その経験を生かしリーダーとして活躍できるのではないかと期待できる。
- ④参加児童のうち、半数近くがリピーターであるということから、このイベントに対する子どもたちはもちろんのこと保護者などの期待度がわかる

⑤子どもたちがワクワクする大胆なストーリーで綿密な計画が練られ、細やかな配慮もなされている

この事業は、「ぽぷり」の活動支援としてスタートした。「ぽぷり」のメンバーからは、「大学生からたくさんの刺激を受けた。アイデアが豊富で創作した小道具や子どもたちとの関わり方、すべて学ぶことがあった」「3年継続しているうちに輪が広がってきている。さまざまな人たちが協力し合えるからこそ実現できる事業」「チラシを受け取った瞬間から子どもたちはもちろんのこと、保護者も楽しみにしている」などのコメントが出されている。「ぽぷり」のメンバー自体は増えていないが村内での認知度は高くなってきており、この事業にもスタッフとして協力してくれる村民が着実に増えてきている。当初は想定していなかったことであるが、中学生がボランティアとしての参加も定着しつつあり、3年間続けて参加している児童10名のうちの数名が今春中学生になることから、村にジュニアリーダーの誕生という期待も芽生えつつある。

「らぶちる」のメンバーからも一人ひとりヒアリングを行っている⁴⁾。佐井村の事業は、学びと気づきのインパクトが大きいようで、普段の活動で大切にしている基本姿勢を活かしながら、子どもとの遊びを手段とした「地域支援」への手応えを実感しているようだ。子どもたちと関わることはもちろんのこと、育児中の母親である「ぽぷり」のメンバーをはじめ、村教委職員、この事業に賛同して関わってくれている村民の方々、中学校のボランティア担当教員、ボランティアスタッフの中学生など、多彩な人々と連絡を密にとりながら事業を練り上げて実施に導く一連の過程からの学びが大きく、3年生や4年生からは「情報共有」と「合意形成」の大切さと難しさを学び取っていることが明らかになっている。子どもと関わる力量形成に留まらず、地域と協働していく上でのコーディネート力育成という点からも、非常に意義深い事業であるといえることができる。

課題も明確になりつつある。毎回ゼロベースから構想を練り上げていくとともに、まち探検で使う小道具・大道具や子どもたちへ渡す褒美の品に至るまで、「らぶちる」の学生たちが一つひとつ手作りし、臨場感を増すため細部にまでさまざまな工夫をしている。試行錯誤をしながら制作するため、8月・9月の夏季休業期間中はほぼ毎日準備に費やす。教育実習や就職試験の時期とも重なる3・4年生は、タイトなスケジュールのなかで準備に参加している。自分たちがやりたいからこそ自主的かつ主体的に一つひとつの作業を真摯に向き合いながら進められるのであるが、仮に佐井村にジュニアリーダーが組織化されるということになれば、制作のノウハウを地域に伝授していく方法についても検討していかなければならない。

(2) 大学生は大学開放の担い手になりうるのか

最後に、大学開放の担い手について論じておきたい。

大学開放において教育を担う教員が主体であることは当然であるが、白戸洋⁵⁾や山本朱美⁶⁾らの先行研究からも、とりわけ「子ども」が対象である場合は特に、大学生が大学開放の主体を担うことへの可能性を示唆している。

本稿で取り上げた実践事例は、「まち探検」事業の参加者は「子ども」であるが、子育てサークル「ぽぷり」の活動支援と育成という目的を内包しており、ヒアリングなどからは互恵性があることが確認されている。このことから、地域と大学の協働による地域課題

の解決を目指した実践という点において、生涯学習教育研究センター教員のマネジメントにより、大学生が大学開放の担い手として十分役割を果たしているということが出来る。とりわけ、「らぶちる」のような課外活動は、「主体的な参加」であることが前提にある。だからこそ、彼らの柔軟な発想と真摯に向き合う姿勢に基づき、固定観念に縛られない学習機会の提供と双方向的の関係性の構築、この2点において可能性があることを、本実践を検討することで明らかにすることができた。

しかし、これだけでは十分とはいえない。地域との接点が乏しい、とりわけ生まれ育った地域から離れた地域の大学に在籍している学生にとって、地域社会と関わることはたやすいことではない。それだけではなく、地域参加の経験の乏しい学生は、いざ地域に出ていっても「何をどうしたらよいかわからない」だろう。筆者は、現在行っている調査から、地域参加活動に参加している青少年は、知識や技術といった「スキル」だけでなく、活動の意義や目的、人と関わる姿勢などの「マインド」を重視した相互学習が自覚的に行われていることが明らかになりつつある⁷⁾。すなわち、地域社会への参加機会の提供だけでなく、彼ら自身が活動を通して得られる学びを自覚化し、より主体的な地域社会への参画に発展していけるような学習環境の醸成が重要であることを示唆しているのである。

拙論において⁸⁾、地方国立大学の生涯学習教育研究センターの使命として、多様な学びの機会を提供していきながら、地域と大学が協働して地域課題の解決に取り組むというような双方向的の関係性の構築が求められており、そのためには、①地域を志向した学生教育の内容、②大学（研究者・学生）と地域社会とのコーディネートのあるあり方、この2点を実践的に検討していく必要があると論じているが、本稿ではこの点について深めきれていない。とりわけ、教員が担うコーディネートの内実を一般化していくことは、学生教育の観点からはもちろんのこと、生涯学習教育研究センターの新たな役割を創造していく上でも必要だからである。今後も実践的な探究のなかで明らかにしていきたい。

〈注〉

- 1) この基準では、「児童厚生施設における遊びの指導は、児童の自主性、社会性及び創造性を高め、もつて地域における健全育成活動の助長を図るようこれを行うものとする。」と定められている。児童健全育成財団では児童厚生員2級・1級の資格を取得するためのカリキュラムを編成して人材を養成し質の向上を図っているが、「らぶちる」においてはカリキュラムをそのまま準用することが不可能であるため、学生が地域社会に出て「子どもの遊びを指導するとは何か」について、問い直しながらの質の確保に努めている。
- 2) 佐井村編『村のあゆみ－佐井村村制施行100周年記念写真集』、1993年。
- 3) 当センターでは、事業終了後に企画担当者（大学と自治体の共催事業の場合は自治体の担当者）から、実施要項に掲げた「ねらい」や事業内容等の振り返りを文書で提出してもらい、省察的考察を行っている。様式などは特に指定していない。
- 4) ヒアリングは、科学研究費助成金（若手B）「地域活動を通じた子どもの主体形成と大人の役割」（研究代表：深作拓郎）の調査の一環として実施した。実施期間：2015年11月中旬～2016年1月初旬。佐井村の事業に参加した13名の学生から協力が得られた。
- 5) 白戸洋編『まちが変わる－若者が育ち、人が元気になる 松本大学生がかかわった松

本のまちづくりー』松本大学出版会、2009年。

- 6) 山本朱美「学生主体の地域貢献ー香川大学博物館におけるミュージアム・レクチャーの取組ー」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告書』2012年、31～46頁。山本朱美「子ども対象の大学開放事業ー大学生が企画する公開セミナーの取組ー」出相泰裕編『大学開放論ーセンター・オブ・コミュニティ（COC）としての大学』、大学出版、2014年、139～148頁。
- 7) 前掲4)。科学研究費助成金（若手B、2013年度～15年度）「地域活動を通した子どもの主体形成と大人の役割」（研究代表 深作拓郎）の助成を受け、10代の青少年が参加する地域参加活動について参与観察を中心にヒアリングなども試みながら調査をした。
- 8) 深作拓郎「生涯学習教育研究センターの新たな役割について考えるー学生と地域社会教育の関係づくりを例にー」『弘前大学生涯学習教育研究センター年報第17号』、2014年、13～24頁

Ⅱ. 事 業 報 告

1. 生涯学習教育研究センター主催・共催事業

「社会教育関係職員ゼミナールM＆D」				
対象者	社会教育・公民館等に勤務する職員、社会教育委員・公民館運営審議会委員等		受講者数	延べ 22名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	—
会 場	①～③ 弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大4F 生涯学習教育研究センター多目的室 ④ 弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大4F 地域社会研究科演習室			
日 時	講 師	所 属	実施概要	
①平成27年5月27日(水) 15:00～17:00	佐藤 三三 氏	弘前大学名誉教授	「『市民参加』『地域参加』を社会教育の観点から考え直そう」	社会教育に関わる政策施策の動向や地域課題や住民の学習課題を把握し、各自の実践に反映できることを目指したゼミナール形式の学習会で、前半は講師を交えたゼミナール形式の学習（meeting）、後半は飲食をしながらの議論のつづき（drinking）の2部として開催し、自治体間を越えた職員間・大学間のネットワークづくりをも目指します。
②平成27年6月24日(水) 15:00～17:00	佐藤 光輝 氏	弘前大学教育学部准教授	「社会教育・公民館事業におけるチラシづくりのコツ、お教えします」	
③平成27年10月29日(木) 15:00～17:00	野口 拓郎 氏	弘前大学COC推進室 助教	「地域づくりの拠点としての公民館 島根県の取り組みを事例に」	
④平成27年11月26日(木) 15:00～17:00	村木 伊織 氏 深作 拓郎 氏・弘前大学学生「らぶちる-Love for children-」	佐井村地域おこし協力隊 弘前大学生涯学習教育研究センター講師	「大学生×社会教育×地域の社会教育事業-佐井村と弘大のコラボを例に-」	





社会教育関係職員ゼミナールM&D

社会教育に関わる政策施策の動向、地域課題や住民の学習ニーズを把握し、社会教育事業に反映できるようにすることを目的としたゼミナール形式の学習会です。前半は講師を交えたゼミナール形式の学習（Meeting）、後半は飲食をしながらの議論のつづき（Drinking：交流会）の2部として開催し、自治体間を越えた職員間・大学間のネットワークづくりをも目指します。

日 時	講 師
1回目 平成27年 5月27日(水) 15:00～17:00 「『市民参加』『地域参加』を社会教育の観点から考え直そう」	講師 弘前大学名誉教授 佐藤三三 社会教育・公民館事業におけるチラシづくりのコツ、お教えします
2回目 平成27年 6月24日(水) 15:00～17:00 「社会教育・公民館事業におけるチラシづくりのコツ、お教えします」	講師 弘前大学教育学部 准教授 佐藤光輝
3回目 平成27年10月29日(木) 15:00～17:00 「地域づくりの拠点としての公民館 島根県の取り組みを事例に」	講師 弘前大学COC推進室 助教 野口拓郎
4回目 平成27年11月26日(木) 15:00～17:00 「大学生×社会教育×地域の社会教育事業-佐井村と弘大のコラボを例に-」	講師 弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作拓郎 佐井村担当 弘前大学学生・教員研究会「らぶちる」学生

※ 毎日講座終了後、18時頃から第2部（Drinking：交流会）を開催します。（飲食代は各自負担）

コーディネーター：弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作 拓郎
弘前大学COC推進室 助教 野口拓郎

対 象 教育委員会や社会教育振興等に勤務する職員、社会教育委員、公民館運営審議会委員等

定 員 15名

会 場 第1～3回 弘前大学コラボ弘大4F 生涯学習教育研究センター 多目的室
第4回 弘前大学コラボ弘大4F 大学院地域社会研究科 演習室

主 催 弘前大学生涯学習教育研究センター

協 賛 各回、前の週の本曜日 氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業等に記入の上、
郵便・FAX・E-Mail等でお申し込みください。

申込み・問合せ
〒030-8581 青森県青森市文京町8番地 弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大4F 生涯学習教育研究センター
TEL 0172-36-3144（受付時間 10:30～16:00（平日））
E-Mail sejuntor@hirosaki-u.ac.jp
URL <http://uit.hi.ac.jp/sejuntor/>

社会教育関係職員間のネットワークづくりを目的として開催します。社会教育関係職員に限定して開催します。

①「『市民参加』、『地域参加』を社会教育の観点から考え直そう」

講師：佐藤 三三（弘前大学 名誉教授）

有効回答票数：3票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3				
内容	3				
資料		2	1		
雰囲気	3				

②「社会教育・公民館事業におけるチラシづくりのコツ、お教えします」

講師：佐藤 光輝（弘前大学教育学部 准教授）

有効回答票数：5票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4		1		
内容	4	1			
資料	4	1			
雰囲気	4	1			

③「地域づくりの拠点としての公民館 島根県の取り組みを事例に」

講師：野口 拓郎（弘前大学COC推進室 助教）

有効回答票数：4票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4				
内容	3	1			
資料	4				
雰囲気	4				

④「大学生×社会教育×地域の社会教育事業－佐井村と弘大のコラボを例に－」

講師：村木 伊織（佐井村地域おこし協力隊）、弘前大学学生2名

深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師） 有効回答票数：6票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	4	2			
内容	3	3			
資料	3	3			
雰囲気	3	3			

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		1	7	2	2	3		
女		1		1		1		
無回答								

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌			3					
新聞								
DM			1	1	1	1		
テレビ・ラジオ				1				
知人から		2						
インターネット								
その他			2	1	1	3		
無回答			1					

「社会教育関係職員ゼミナールM&D」を終えて

深 作 拓 郎

（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

センター開設以来、藤田先生が中心となり、弘前市の社会教育・公民館関係職員を対象としたスキルアップ講座を実施されてきた蓄積がある。それを踏まえながら、弘前市に限定せず、社会教育関係職員と社会教育委員・公民館運営審議会委員を対象としたものとして、本講座を開設した。

この講座の目的は、社会教育に関わる政策施策の動向や地域課題や住民の学習課題を把握し、各自の実践に反映できることを目指したゼミナール形式とし、前半は講師を交えたゼミナール形式の学習（meeting）、後半は飲食をしながらの議論のつづき（drinking）の2部とした。

初年度であることと対象者を専門家に特化したこともあり、各回少数の参加者であるが、社会教育行政には欠かせない「住民の参加・参画」、「広報」「地域づくり」「大学との連携」をテーマに掲げた。

各回講師による問題提起とその後の議論の内容、第2部での交流ともに非常に充実した内容であった。受講者アンケートも良好であることが伺える。

次年度も継続させていく予定であるが、社会教育の理念と本質を確認をしながら、県教委の重点施策である「公民館における若者利用と活性化」「家庭教育支援」「地域におけるキャリア教育推進」等とも呼応させることにより、市町村の社会教育施策が充実できるようなプログラムを提供していきたいと考えている。



「トークと歌で迎えよう初夏、そして新たな出会いを求めて」				
対象者	一般		受講者数	延べ 21名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	—
会 場	弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階 生涯学習教育研究センター多目的室			
日 時	講 師	所 属	実施概要	
平成27年5月30日(土) 13:30 ~ 15:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	トークを交えながら、「5月」や「夏」にちなんだ歌などを参加者と一緒にうたうことで、市民が気楽に集い、交流する。	



参加無料 弘前大学生涯学習教育研究センターイベント

トークと歌で迎えよう初夏、そして新たな出会いを求めて

平成27年5月30日(土) 開催決定!! 時間: 13時30分

トークを交えながら、「5月」や「夏」にちなんだ歌などを参加者と一緒にうたうことで市民が気軽に集い、交流する機会とする。

■ トーク: 藤田 昇治 (弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授)

※ 歌う時は、ピアノの伴奏付き。

■ 会 場: 弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階
生涯学習教育研究センター多目的室

■ 定 員: 30名

■ 参 加 費: 無料

■ 対 象: 一般・学生・高校生

■ 申 込 先: 弘前大学生涯学習教育研究センター

■ 申込締切: 5月26日(火)

※ 締切前に満員となりましたら、締切ります。
お早めにお申し込みください。

■ 申込方法: 講座名・氏名・住所・電話番号・年齢・性別・
ご職業をご記入のうえ、はがき・FAX・E-mail
などでお申込みください。(時間内であれば、電話も可)
※ ご参加の皆様には、「歌集」をお渡しします。
この「歌集」を参考に歌っていただきます。

※ 曲目は、下記も添えて、
15曲程度を予定しています。

- ・こいのぼり
- ・りんごの唄
- ・夏の思い出
- ・丘を登って
- ・花は咲く
- ・喜びも悲しみも幾歳月

〒036-8561 弘前市文京町3番地
弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階
弘前大学生涯学習教育研究センター
TEL/FAX: 0172-39-3146 (平日: 10:30~16:00)
E-mail: sgc@center@hirosaki-u.ac.jp

◆主催 弘前大学生涯学習教育研究センター
※お寄せ頂いた個人情報等の管理には万全を期しております。
本学事業の目的以外に使用することはありません。

【入場への注意】コラボ弘大の正面玄関から入りください。
開演までに4階の会場までお越しください。

「トークと歌で迎えよう初夏、そして新たな出会いを求めて」

講師: 藤田 昇治 (弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授) 有効回答票数: 21票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	18	1			2
内 容	10	7			4
話し方	13	2	3		3
雰囲気	16		1		4

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		1				3	3	
女					1	4	9	
無回答								

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌							1	
新聞							1	
DM					1	7	7	
テレビ・ラジオ								
知人から		1					1	
インターネット								
その他							2	
無回答								

事業評価「トークと歌で迎えよう初夏、そして新たな出会いを求めて」

藤 田 昇 治

(弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授)

昨年度まで実施してきた「トークと歌」と題する事業が比較的好評だったことから、今年度は、「初夏」と「出会い」に焦点を当てた事業を初めての試みとして、5月30日(土)に実施した。

5月にちなんだ曲目として「こいのぼり」や「せいくらべ」、「リンゴの唄」など、夏にちなんだ曲目として「うみ」や「夏は来ぬ」などを選曲した。また、前回の事業の際に参加者から寄せられたリクエストに応じて、「遙かな友に」や「花は咲く」などの曲と一緒に歌った。

また、これまでキーボードで伴奏を担当をしていただいた齊藤さんには、「トーンチャイム」(棒状のもので、「ハンドベル」と同様に振りかざすことで一つの音階の音をかなでることができる)という楽器の演奏を指導していただいた。大多数の受講者に「トーンチャイム」の演奏に協力いただき、「夕焼け小焼け」を一緒に歌った。終了後のアンケートでも、こうした「参加型」の事業とすることは、概ね好評であった。

参加者は21人。60代以上の年齢の人が9割を超え、「ダイレクトメールで事業について知った」という人が7割を超えている。今後、参加者層を拡大することが求められている。

①「『学ぶことのおもしろさ』をともに体験しよう」

講師：中澤 侃志（NPO法人「R.ぶらっと」 理事・弘前市職員） 有効回答票数：1票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	1				

②「ネット社会の未来は…」

講師：一條 健司（弘前大学理工学研究科 助教）

有効回答票数：1票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	1				

③「岩木山は噴火する？—古文書から災害の記録を読み解く—」

講師：白石 睦弥（弘前大学地域社会研究科 客員研究員）

有効回答票数：3票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	1	2			

④「『格差社会』の克服をめざそう—『21世紀の資本』に学ぶ—」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授） 有効回答票数：1票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	1				

⑤「よりよい社会にするために若者に求められること」

講師：中澤 侃志（NPO法人「R.ぶらっと」 理事・弘前市職員）

藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授） 有効回答票数：1票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
内 容	1				

受講のきっかけ（複数回答可）

大学で学び たかった	内容に興味 があった	先生からの すすめ	友人・親か らのすすめ	進路選択の 参考	弘大を受験 したい	その他	無回答
3	7	1			1		



事業評価「大学で『学ぶことのおもしろさ』を体験しよう」

藤 田 昇 治

（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

高校生を対象とした事業として、「大学で『学ぶことのおもしろさ』を体験しよう」を、6月5日から7月3日までの毎週金曜日の夕方5時30分から7時の時間帯で、全5回の講座を実施した。

第1回は「『学ぶことのおもしろさ』をともに体験しよう」、第2回は「ネット社会の未来は…」、第3回は「岩木山は噴火するのか?!—古文書から災害の記録を読み解く—」、第4回は「『格差社会』の克服をめざそう—『21世紀の資本』に学ぶ—」、第5回は「よりよい社会にするために若者に求められること」というテーマが設定された。

去年は、希望者がいなかったため中止した回もあったことを考えると、今年は、毎回受講者がいたという意味での「前進面」はあったと言える。また、高校生ではない、成人の受講希望者がいたことも注目される。しかし、参加者の絶対数は少なく、従来の広報活動（公民館等へのチラシ配布と高校回り）の在り方や、開催時期・曜日・時間帯、そしてテーマ・内容の是非なども含め、この企画については抜本的な検討を行う必要があるのではないか、と考える。

中泊町子育て支援講演会「アロマでこころすっきり体験」			
対象者	中里・小泊地区で育児中の保護者	受講者数	延べ 28名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	中泊町教育委員会
会 場	①中里こども園 中里地域子育て支援センター ②こども園こどもり ぽかぽかクラブ		
日 時	講 師	所 属	実施概要
①平成27年6月9日(火) 10:00～11:30	原田 光子 氏	青森県総合社会教育センター 家庭教育相談員	子育てや育児で感じたストレスを植物の持つ自然の香りを使って心身のバランス復元やリラックス効果をねらいとする。
②平成27年6月16日(火) 10:00～11:30			



弘前大学地域連携推進事業

こころ♡スッキリ アロマ体験講座

子育てや育児で感じたストレスを植物の持つ自然の香りを使って心身のバランスの復元やリラックス効果を実験します。

日時・場所
●6月9日(火) 10:00～11:30
中里こども園 中里地域子育て支援センター
●6月16日(火) 10:00～11:30
こども園こどもり ぽかぽかクラブ
申し込み場 1階職員室
電話にて住所・氏名・年齢を知らなくたい。

対象者
●中泊町で育児中の方(15名)
フェイスタスタもどくお楽しみください。

講 師
原田 光子 (H*H*H*H*H*H)

申込・問合せ先: 中泊町教育委員会 社会教育課 Tel 69-1112
主催: 弘前大学生涯学習教育研究センター、中泊町教育委員会

①「アロマでこころすっきり体験」

会場: 中里こども園 中里地域子育て支援センター
講師: 原田 光子 (青森県総合社会教育センター・家庭教育相談員)

有効回答票数: 14票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	5	7	1	1	
内 容	8	5	1		
資 料	7	5	2		
話し方	10	4			
雰囲気	9	4			1

②「アロマでこころすっきり体験」

会場: こども園こどもり ぽかぽかクラブ
講師: 原田 光子 (青森県総合社会教育センター・家庭教育相談員)

有効回答票数: 11票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	7	3	1		
内 容	7	3	1		
資 料	7	3	1		
話し方	8	3			
雰囲気	8	3			



受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男								
女	1	7	10			2	1	
無回答		2	1	1				

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌								
新聞								
DM								
テレビ・ラジオ								
知人から	1	3	5	1				
インターネット								
その他		6	6			2	1	
無回答								

平成27年度 子育て支援講演会「アロマでこころスッキリ体験講座」

成 田 寿 美

(中泊町教育委員会社会教育課)

子育て支援をテーマに弘前大学と連携し、6年目の事業となりました。

今年は、女子力アップ講座として、「アロマ」について、青森県総合社会教育センター家庭教育相談員、原田光子先生を講師に精油の性質、効果等の説明の後に、フレッシュナーづくり、トリートメントオイルを使用してのハンドマッサージを行いました。2会場とも子育て支援センターで行い、20代の若い世代の参加者でした。参加者からは、「定期的に開催してほしい」、「来年も女子力アップに繋がる講座をお願いしたい（支援センター職員）」という声をいただきました。

参加者が「香り」に少しでも興味を持ち、趣味のフィールドを広げ、ママ友を増やし、子育てと上手く付き合っていくことを願っています。

子どもの育ちを考えるゼミナール			
対象者	子どもに携わる職業（教員・保育者・児童厚生員等）、実践者（子ども会、NPO等）、子どもの育ち・学校外教育に関心のある方	受講者数	延べ 80名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	—
会 場	①～⑤ 弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大4F 生涯学習教育研究センター多目的室 ⑥ 弘前大学総合教育棟306講義室		
日 時	講 師	所 属	実施概要
①平成27年6月10日(水) 18:30～20:30	深作 拓郎 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター講師	「地域」と「遊び」をキーワードに、いくつかの文献資料に基づいて子どもの成長環境についての確に捉えながら、自由に意見を交わすことで相互学習を深めていく実践者を対象としたゼミナール形式の講座です。
②平成27年7月8日(水) 18:30～20:30			
③平成27年9月9日(水) 18:30～20:30			
④平成27年10月7日(水) 18:30～20:30			
⑤平成27年11月11日(水) 18:30～20:30			
⑥平成27年12月10日(木) 18:00～20:00 ※12/9より変更となりました。	渡部 達也 氏、 渡部 美樹 氏	NPO法人 ゆめ・まち・ねっと代表	



参加無料 平成27年度弘前大学公開講座

子どもの育ちを考えるゼミナール

「地域」と「遊び」をキーワードに、いくつかの文献資料に基づいて、子どもの成長環境についての確に捉えながら、自由に意見を交わすことで相互学習を深めていく実践者を対象としたゼミナール形式の講座です。

◆内容
・「子どもの育ちを考えるゼミナール」
日程：6月～12月の毎月第2水曜日
時間：18:30～20:30
①平成27年 6月10日(水)
②平成27年 7月 8日(水)
③平成27年 9月 9日(水)
④平成27年11月 7日(水)
⑤平成27年11月11日(水)
⑥平成27年12月 9日(水)

◆会場
・弘前大学創立60周年記念会館
コラボ弘大4階
生涯学習教育センター多目的室

◆対象
・子どもに携わる職業（教員・保育者・児童厚生員等）
・実践者（子ども会、NPO等）
・子どもの育ち・学校外教育に関心のある方々
・高校生・大学生の参加も大歓迎！

◆定員・受講料
・15名程度・無料（テキスト代別途徴収）

◆主催：弘前大学生涯学習教育研究センター

◆講師
・深作 拓郎
（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

◆申込み方法
・講座名・氏名・住所・電話番号・年齢・性別・職業をご記入のうえ、ハガキ・FAX・E-mailでお申し込みください。

◆申込み締切
・平成27年 6月 5日（金）

◆申込み・お問い合わせ先
・弘前大学生涯学習教育研究センター
〒036-8561
青森県弘前市文京町3番地
弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階
TEL/FAX: 0172-39-3146
【受付時間 10:30-16:00（平日）】
E-mail: secenter@hiroaki-u.ac.jp
※お寄せ頂いた個人情報の管理には万全を期しております。
本学事業の目的以外に使用することはありません。

講師：深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）
 渡部 達也、渡部 美樹（NPO法人 ゆめ・まち・ねっと代表）
 有効回答票数：8票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3	4	1		
内 容	3	5			
資 料	2	6			
雰囲気	5	3			

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男								
女	1	2	1	2	2			
無回答								

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌		1						
新聞								
DM								
テレビ・ラジオ				1	2			
知人から		1						
インターネット			1					
その他	1							
無回答				1				

子どもの育ちを考えるゼミナール

深 作 拓 郎
 （弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

7年目を迎えた「子どもの育ちを考えるゼミナール」は、最年少は高校生・大学生、最年長は…（笑）と、世代や立場を超えて「子どもの主体性」を護るための大人の役割・環境醸成とは何か、例年同様『子ども白書』（本の泉社）を用いて子どもの成育環境の現状を捉えながら相互学習を行っていった。

昨年度は、「子ども貧困」や「子どもの権利」が主に取り上げられたが、今年度は、受講者層の広さを考慮して子どもの仲間関係、地域活動、発達障がいなどより身近なテーマを中心に上げていった。また、最終回には、静岡県富士市で子どもの冒険遊び場や居場所などの運営をしているNPO法人ゆめ・まち・ねっとの渡部達也・美樹さんを招いての学習会も実施した。

受講アンケートはほぼ例年と同様の傾向がみられた。

運営をしていて気が付いた課題に触れておくと

- ① 学習者自らが講座を担っていくという主体性が乏しかった
- ② 読み・書き・話し・聴くという一連の過程がアンバランスであったことが挙げられる。

なぜそうなったのかは、受講者アンケートから読み取ることができなかったが、会場設営や撤収、資料印刷なども受講者に委ねていくことで、意識形成を図っていくことが必要なのかもしれない。

また、2016年には弘前と八戸で「こどものまち」が行われた。いずれも、このゼミの受講者たちが中心メンバーでゼミでの学習内容を事業化させていったことは特筆すべきところである。

地区公民館と弘前大学連携事業「これからの地域農業を考える」				
対象者	農業者・農業に関心のある方		受講者数	延べ 27名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	弘前市立中央公民館・弘前市立高杉公民館
会 場	①、② 弘前市立高杉公民館			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年6月12日(金) 18:30～20:00	石塚 哉史 氏	弘前大学農学生命科学部 准教授	「地域農業の可能性・課題を考える」	弘前市立中央公民館・地区公民館と弘前大学の連携事業の一環として、2回にわたって高杉地区における今後の地域農業の発展方向を探る、農業者や農業に関心のある地域住民を対象とした学習会を実施する。
②平成28年1月29日(金) 18:30～20:00 ※1/22より変更となりました			「グローバル化と地域農業の未来」	



①「地域農業の可能性・課題を考える」

講師：石塚 哉史（弘前大学農学生命科学部 准教授）

有効回答票数：14票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	2	10	1		1
内 容	1	6	5		2
資 料	3	7	2		2
話し方	3	8	2		1
雰囲気	2	7	4		1

②「グローバル化と地域農業の未来」

講師：石塚 哉史（弘前大学農学生命科学部 准教授）

有効回答票数：9票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	2	5	1		1
内 容	1	6	1		1
資 料	2	7			
話し方	3	2	3		1
雰囲気	3	3	2		1

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					4	10	3	
女			2			1		
無回答					1	2		

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌			1		1	3	1	
新聞					1	1		
DM						1		
テレビ・ラジオ								
知人から			1			1		
インターネット						1		
その他					3	5	2	
無回答						1		

弘前大学連携事業「これからの地域農業を考える」

平 井 恵栄子
(弘前市立高杉公民館事務長)

高杉公民館において、地区公民館と弘前大学の連携事業～これからの地区農業を考える～の演題で、弘前大学准教授の講師：農学生命科学部准教授の石塚哉史氏を講師として学習会が行われました。

弘前市立中央公民館・地区公民館と弘前大学の連携事業の一環として、高杉地区における今後の地域農業の発展方向を探る、農業者や農業に関心のある地域住民を対象としたもので、1回目の「地域農業の可能性・課題を考える」に続いての2回目は「グローバル化の地域農業と未来」―日本の農産物輸入依存とTPP大筋合意が与える青森農業への影響―についての講義でした。

1回目15人、2回目12人とどちらも参加者が非常に少ない状況でしたが、資料・情報の収集、分析の提供などきめ細かな講義内容は大変にわかりやすく、また、終了後は活発な質疑応答もなされ、有意義な講演会でした。

◆1回目「地域農業の可能性・課題を考える」

産地偽装や輸入農産物の偽装表示を取り締まる保護法を設けた上で、地域ブランドの構築に向けた日本国内地域団体の取組事例の紹介（加賀野菜・京野菜・西条の七草など）「旬の食材」「自分にあった食べたいもの」「いろいろなものを食べたい」など安全性や品質の保障能力のある「地域ブランド」に関心をもつ人が増えている点など、「地域ブランド化」の推進によって地域経済の活性化につながり、積極的に拡大を図ることが必要と感じた。

◆2回目「グローバル化の地域農業と未来」

今後りんご輸出主要国として注目される、台湾・ベトナム・中国についての視察訪問時の実体験と現地の情報収集など今後を見据える上でも参考になりました。

アメリカ・カナダ主導のTPP大筋合意については、日本の農林水産業総生産比率GDPが低いといわれているが、アメリカ・EUなど他の先進国とほぼ同様であり、農業軽視的発言にたいして「農業の持つ食料供給産業の重要性」損ねてはならないとの指摘は共感するものです。また、TPPについては受講者の関心も高く「農産物貿易の進展とTPP」の農業分野にとどまらないサービス・知的財産等人の移動を含んだ包括的な協定で、農林水産業に打撃を与えるだけでなく、私たちの暮らし、社会に大きなリスクをもたらすことが再認識されました。

◇今後の連携事業開催について

- 1) 一人でも多くの受講者を確保するためにも、当事業単体開催よりも、各種団体（JA、りんご・野菜出荷団体、技術講習会など）と連携して、日時場所を調整しプログラムを組み合わせ合同開催することも検討したい。
- 2) 高杉地区の主要農産物である「りんご」「米」に限定したテーマで開催
- 3) 体験学習や栽培技術講習会など実践講座的な講義（新規就農者・農業後継者対象）

むつ市連続講演会「少子高齢化社会がもたらす地域課題」				
対象者	一般		受講者数	延べ 77名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	むつ市教育委員会
会 場	①、② 下北文化会館 視聴覚教室			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年6月13日(土) 13:30～15:15	金目 哲郎 氏	弘前大学人文学部 准教授	「少子高齢化社会における自治体財政の課題」	晩婚化や仕事と子育ての両立が難しく少子高齢化が進む日本の中でも、特に出生率が全国で2番目に低い青森県の現状とその原因を考える。
②平成27年6月27日(土) 13:30～15:15	李 永俊 氏	弘前大学人文学部 教授	「人口減少問題の克服策を探る」	



弘前大学生涯学習講演会

むつ市で弘前大学の講義が聴けます！！

今年度のテーマは？

「少子高齢化がもたらす地域課題」です！

	1回目	2回目
タイトル	少子高齢化社会における自治体財政の課題	人口減少問題の克服策を探る
講師	弘前大学人文学部 准教授 金目 哲郎 氏	弘前大学人文学部 教授 李 永俊 氏
期日	6月13日(土)	6月27日(土)
時間	13:30～15:15	
会場	下北文化会館 視聴覚教室	

受講料：無料！

事前申込：不要！

☆あおもり県民カレッジ・高校生スキルアッププログラム
単位認定講座です。
※1講座で2単位取得できます。

主 催：弘前大学生涯学習教育研究センター・むつ市教育委員会
問合せ先：むつ市教育委員会 生涯学習課
0175-22-1111（内線3142）

一緒に少子高齢化について考えてみませんか！？

①「少子高齢化社会における自治体財政の課題」

講師：金目 哲郎（弘前大学人文学部 准教授）

有効回答票数：39票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	17	16	3		3
内 容	13	22	1		3
資 料	21	13	3		2
話し方	13	21	3		2
雰囲気	13	24	1		1

②「人口減少問題の克服策を探る」

講師：李 永俊（弘前大学人文学部 教授）

有効回答票数：37票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	26	7	4		
内 容	28	8	1		
資 料	26	9	2		
話し方	31	4	2		
雰囲気	28	9			

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男	7		1	1	2		7	
女	42	2			2	3	5	
無回答	1					1	2	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌	10				1		2	
新聞							8	
DM					1	1		
テレビ・ラジオ								
知人から	1						1	
インターネット	1							
その他	38	2	1	1	2	3	2	
無回答							1	

平成27年度弘前大学生涯学習講演会事業評価

新 保 詠美子

（むつ市教育委員会生涯学習課）

今年度は、「少子高齢化がもたらす地域課題」というテーマで2回の講演を行った。

第1回目は人文学部の金目准教授から少子高齢化における自治体財政の課題について講演いただき、データを使用することによってわかりやすく少子高齢化についての現状を知ることができた。第2回目は同じく人文学部の李教授から人口減少の克服策について講演いただき、人口の流出入をタイプ別に考察し、そこから考えられる克服策を学ぶことができた。

参加者からは、「大変参考になった」「もっと開催してほしい」という声と、地域が抱えるその他の諸問題、また、認知症や年金問題など少子高齢化に関係する諸問題について学びたいという声が多数寄せられたことから、今後も地域問題をテーマにした講演会の実施を検討したい。

託児付の育児支援連続講座「これからの家計のあり方」				
対象者	育児中の保護者		受講者数	延べ 40名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	弘前市
会 場	①～② ヒロロ3階 駅前こどもの広場 多目的室			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年6月19日(金) 11:00～12:30	王前 洋司 氏	野村證券投資情報部 シニア・ファイナン シャル・プランナー	「家計と社会の過去・未来～過去をきちんと理解することが現在、未来の参考書となります～」	育児中の保護者を対象に、家庭生活にまつわる今日的な課題について学習することで、今後の育児や家庭経済の参考にしてもらう。
②平成27年7月3日(金) 11:00～12:30			「お金に対する基礎知識～不安に思いがちな現在、未来を一緒に考えてみましょう。年金、退職金、保険、医療、介護、とにかくいろいろありますね～」	



参加
無料

託児付の育児支援連続講座

育児中の保護者を対象に、家庭生活にまつわる今日的な課題について学習することで、今後の育児や家庭経済の参考にしていきましょう。

【内 容】これからの家計のあり方

1回目 家計と社会の過去・未来
～過去をきちんと理解することが現在、未来の参考書となります～
6月19日(金) 11:00～12:30

2回目 お金に対する基礎知識
～不安に思いがちな現在、未来を一緒に考えてみましょう
年金、退職金、保険、医療、介護、とにかくいろいろありますね～
7月 3日(金) 11:00～12:30

(両日とも) 講師：野村證券投資情報部
シニア・ファイナンシャル・プランナー 王前洋司 氏
会場：ヒロロ3階 駅前こどもの広場 多目的室

◆定 員：20名(託児は15名)

◆参加費：無料

◆対 象：育児中の保護者

◆持ち物：子どもさんをお預け希望の方は、おむつ・おやつ・飲み物など

※ 託児室へのお預け希望は15名座です。申し込みの順に、必ずお知らせください。

◆申込み方法
駅前こどもの広場(ヒロロ3階)へ直接お電話で
(TEL: 0172-35-0156) お申し込みください。

◆締切日：6月12日(金)

◆お問い合わせ先
駅前こどもの広場(ヒロロ3階)
〒036-8002
青森県弘前市駅前町9-20
TEL: 0172-35-0156
【受付時間 8:30～17:00(土日とも休まず受付中!)]

※お寄せいただいた個人情報(管理)には万全を期しております。事業の目的以外に使用することはありません。

主催：弘前大学生涯学習教育研究センター
弘前市
協力：野村證券株式会社

①「家計と社会の過去・未来

～過去をきちんと理解することが現在、未来の参考書となります～

講師：王前 洋司（野村證券投資情報部シニア・ファイナンシャル・プランナー）
有効回答票数：21票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	9	6	4	2	
内容	10	5	6		
資料	5	9	6	1	
話し方	12	6	3		
雰囲気	9	8	4		



②「お金に対する基礎知識

～不安に思いがちな現在、未来を一緒に考えてみましょう。

年金、退職金、保険、医療、介護、とにかくいろいろありますね～

講師：王前 洋司（野村證券投資情報部シニア・ファイナンシャル・プランナー）
有効回答票数：18票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	5	8	4	1	
内容	7	6	5		
資料	5	7	6		
話し方	10	6	2		
雰囲気	8	7	3		



受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男								
女		2	18	14	2			
無回答		1	1	1				

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌		1	4	5				
新聞								
DM			1	10	2			
テレビ・ラジオ			5					
知人から								
インターネット								
その他		2	9					
無回答								

託児付育児支援連続講座振り返り

中 澤 侃 志

（弘前市健康福祉部子育て支援課）

今回の講座は、「これからの家計のあり方」と題し2回開催しましたが、内容がお金の投資や運用のお話ということで、当初、担当者としては難しいお話になるのではないかと参加者が少ないのでは？と少々心配した次第です。

しかし、講座の様子を振り返ると心配は取り越し苦労に終わりました。参加した方々は、熱心に講師のお話に耳を傾け、終わった後も講師に質問していた程です。普段子育てに忙しい母親に対し、子どもを安心して託児できる場所を確保し、自らのスキルアップに資する時間を提供できたことは子育て支援を進めるうえでも意義深いことだと考えており、今後の事業展開にも大いに道が開けているものと益々期待しているところであります。

私も2回全とお話を聞かせていただきましたが、講師のお話が絶妙に面白く、個人的にも興味深い内容で聞き入ってしまったところです。

このように参加者数も多く市民に喜んでいただける講座を実施できたのも、企画段階から大学側と綿密に連携し、お互いの役割について責任を持って担えたからに違いありません。

今後も駅前こどもの広場は、子育て支援の拠点として、弘前大学とのより良い関係性を構築しながら子育て（豊かに生きること）に資するような良質な生涯学習の機会を提供していきたいと考えております。このたびは、大変お世話になりました。

七戸町講演会「『福祉のまち』づくりをめざして」				
対象者	民生委員・福祉によるまちづくりに関心のある方、他		受講者数	延べ 77名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	七戸町教育委員会
会 場	①、② 七戸町中央公民館			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年7月2日(木) 13:30～15:00	野田美保子 氏	弘前大学保健学研究科 教授	「手軽にできる運動で寝たきり予防を図る」	民生委員を主たる対象として、地域課題・生活課題について理解を深めることができ、さらに行政や地域の社会組織などとの連携により地域課題の克服をはかることができる、ということに理解を深める。
②平成27年10月14日(水) 13:30～15:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	「学びと絆づくりで目指す『福祉のまち』」	



生涯学習地域連携講座受講者募集

「少子高齢化」が進行する中で、高齢者の介護や「寝たきり」予防、防災などの取り組みを進める中で、民生委員や町内会・行政・地域住民に必要とされることについて理解を深めます。

日 時 平成27年7月2日(木) 13:30～15:00

会 場 七戸中央公民館（七戸町字森ノ上 210 番地）

内 容 演題：「手軽にできる運動で寝たきり予防を図る」

講師：野田 美保子 先生（弘前大学大学院保健学研究科 教授）

※軽い運動なので、普通の履装で参加です。

対 象 医療、福祉、健康、保健、防災、自治会、行政関係者他
※町内・町外の方、どなたでもご自由に参加できます。

申込み方法 ①氏名、②郵便番号、③電話番号を明記の上、

FAX、Eメール、または電話で申込みください。

〆期 6月24日(木)

申込み問合せ 七戸町教育委員会生涯学習課 担当：今泉

TEL 62-9702 FAX 62-6256

E-mail: kyouko-imaizumi@town.shichinohe.lg.jp

健康で充実した老後を楽しみましょう！



主催：弘前大学生涯学習教育研究センター / 七戸

第2回 生涯学習地域連携講座受講者募集

「少子高齢化」が進行する中で、高齢者の介護や「寝たきり」予防、防災などの取り組みを進める中で、民生委員や町内会・行政・地域住民に必要とされることについて理解を深めます。

日 時 平成27年10月14日(水) 13:30～15:00

会 場 七戸中央公民館2階（七戸町字森ノ上 210 番地）

内 容 演題：「学びと絆づくりで目指す『福祉のまち』」

講師：藤田 昇治 先生（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

対 象 福祉のまちづくりに興味のある方
※町内・町外の方、どなたでもご自由に参加できます。

申込み方法 ①氏名、②郵便番号、③電話番号を明記の上、

FAX、Eメール、または電話で申込みください。

〆期 10月7日(木)

申込み問合せ 七戸町教育委員会生涯学習課 担当：今泉

TEL 62-9702 FAX 62-6256

E-mail: kyouko-imaizumi@town.shichinohe.lg.jp

生涯「学習」と絆が豊かな人生をつくります



主催：弘前大学生涯学習教育研究センター / 七戸町教育委員会

①「手軽にできる運動で寝たきり予防を図る」

講師：野田 美保子（弘前大学保健学研究科 教授）

有効回答票数：31票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	11	14	1	1	4
内 容	12	16	1	1	1
資 料	10	13	3	1	4
話し方	10	15	3	1	2
雰囲気	9	12	3	1	6

②「学びと絆づくりで目指す『福祉のまち』」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：36票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	5	14	11	1	5
内 容	7	13	10	2	4
資 料	3	15	12	1	5
話し方	3	12	11	7	3
雰囲気	4	13	14		5

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男						2	3	
女					12	25	6	
無回答					2	9	8	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌					2	9	3	
新聞								
DM								
テレビ・ラジオ								
知人から						2		
インターネット								
その他					10	17	11	
無回答					2	8	3	

平成27年度 七戸町生涯学習講座「『福祉』のまちづくりをめざして」内容評価

今 泉 今日子

（七戸町教育委員会 生涯学習課 社会教育係）

1. 目 的

民生委員を主たる対象として、地域課題・生活課題について理解を深めてもらい、あわせて行政や企業・地域社会組織などとの連携の下に、「福祉によるまちづくり」を目指す「人材育成」を行う。

2. 成 果

第1回の「手軽にできる運動で寝たきり予防を図る」では、日常生活を活性化させ、積極的に運動に取り組む事が将来の介護予防に繋がることを学習し、また、第2回の「学びと絆づくりで目指す『福祉のまち』」においては、地域の住民や民生委員が、地域の中で進行している課題や状況を把握する察知能力が大切であり、その地域課題について解決する方法として、地域の「絆」づくりが一番大切であるという事を学習した。

これらの講座を、一般町民に加えて地域のリーダーである民生委員が受講したことで、簡単な運動を通して家庭や地域で実践できる福祉の充実や、細やかな地域のコミュニティの再生が図られ、より充実した福祉のまちづくりができる事が期待される。

また、行政関係者と民生委員、一般町民が一同に会する良い機会であったため、講義内容を踏まえて地域課題についての意見交換もなされる場面もあり、大変有意義な講座となった。

3. 課 題

民生委員と一般町民を対象として開催したが、民生委員の中でも講義的な話となると理解が難しいという意見の方も多いため、今回第1回目を実施したような、参加者もその場で実践できるような、簡単なアプローチから取り組むことが出来れば、より深い理解を得られたと考えられる。

中泊町中央公民館「自分史を作ってみよう」			
対象者	一般（高齢者対象）	受講者数	延べ 17名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	中泊町中央公民館
会 場	①～⑥ 中泊町中央公民館		
日 時	講 師	所 属	実施概要
①平成27年7月4日(土) 9:30～11:30	松本 大 氏	弘前大学教育学部 講師	「自分史」を作成することで、家庭・職場や地域の中で、これまでの自分が歩んできた人生を振り返り、得られた経験を今後の地域作りに生かすことについても理解を深める。
②平成27年7月18日(土) 9:30～11:30			
③平成27年8月1日(土) 9:30～11:30			
④平成27年9月5日(土) 9:30～11:30			
⑤平成27年10月3日(土) 9:30～11:30			
⑥平成27年12月5日(土) 9:30～11:30 ※11/4より変更となりました。			

弘前大学地域連携事業

あなただけの私だけの過去、昔、
だから！！
 自分について知ってもらおう！話してみよう！
自分史をつくってみよう！



期 日 平成27年7月4日(土)・7月18日(土)
 8月1日(土)・9月5日(土)
 10月3日(土)・12月5日(土)
 計6回

時 間 午前9時30分～午前11時30分

場 所 中泊町中央公民館会議室

対象者 65歳～80歳までの男女

募集人数 15名(最低2名以上で開催)

参加条件 計6回の日程に参加できる人を希望

申込期日 6月24日(水)までに電話またはFAXで中央公民館へお申し込みください

問 合 中泊町中央公民館 ☎57-2341 FAX57-2343

主催・共催 中泊町中央公民館・弘前大学生涯学習教育研究センター

切・U・取・U・線

自分について知ってもらおう！話してみよう！自分史をつくってみよう！

氏 名	(歳)	生年月日	大正・昭和	年	月	日
住 所	中泊町	電話番号				

①～⑥「自分史を作ってみよう」

講師：松本 大（弘前大学教育学部 講師）

有効回答票数：3票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度		1		1	1
内 容		2			1
資 料	1	2			
話し方	1	2			
雰囲気	2	1			

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男							1	
女							1	
無回答						1		

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌						1	2	
新聞								
DM								
テレビ・ラジオ								
知人から								
インターネット								
その他								
無回答								

弘前大学地域連携事業を活用して

古 川 優
(中泊町中央公民館 係長)

公民館講座のマンネリ化打破と高齢者の生きがいづくりを目的に弘前大学地域連携事業を通して「自分史づくり」を開催した。自分について知ってもらおう! 話してみよう! 自分史をつくってみようのタイトルで募集し、参加者が3名と少なかったが参加して下さったことには本当にありがたかった。

本講座の講師に松本先生、サポートに学生3名が協力してくれた。

少人数だったが、参加者のみなさんは自分の過去・現在・未来について話し、また、他の参加者の話を聞き、質問し(され)、また、さまざまな記憶をたどり、最後に文章にして冊子にすることができた。冊子(自分史)ができるまで7月から12月まで計6回という長丁場だったが参加者にとっては有意義に過ごすことができたと思っている。

参加者から「来年度もこの事業を継続してもらいたい」「楽しい時間だった」など嬉しい言葉を頂くことができた。来年度も本事業を活用してこの講座を開催したい。

来年度に向けての課題

- 少人数で実施したいが、今年度よりもう少しだけ、参加者人数を増やしたい。
- 雪が降る12月までに終了したいので、もっと早い期間から開催したい。
- もっとPRできるチラシを作りたい。

『学区まなびい』講座運営担当者研修会				
対象者	「学区まなびい」の講座運営担当者、公民館職員、生涯学習担当職員、社会教育委員		受講者数	延べ 30名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	弘前市立中央公民館
会 場	弘前市立中央公民館			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
平成27年7月10日(金) 14:30～17:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	『『学区まなびい』の活性化を図る ーその重要性の再確認から未来を見据えてー』	「学区まなびい」の担当者を主な対象とし、地域の多様な課題や地域生涯学習を推進する必要性について理解を深めるための研修です。



講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：23票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
前半	13	8	1		1
後半ワークショップ	15	6	1		1

参加した動機・理由（複数回答可）

	第 1 回
「学区まなびい」公民館の仕事について基本的なことから学びたかったから	9
ワークショップに関心を持ったから	1
他の役員・上司に参加するようすすめられたから	2
友人・知人からすすめられたから	1
日常業務の参考にしたかったから	9
研修に参加することは、当然だと思っていたから	9
前にも研修会に参加して参考になったから	3
その他	4

平成27年度 弘前大学地域連携事業(ワークショップ等)をふりかえって

熊谷克仁

(弘前市立中央公民館学習支援係長)

学区まなびい講座は、地域が主体的に講座の企画や実践に取り組んでいる社会教育活動です。

子どもから高齢者まで幅広い年齢層を対象に、地域の状況に応じて多様な講座や活動が展開されています。

対象となる地域は、市街地中心部にある大成小学校や文京小学校など11の小学校区で、学校などを拠点として昭和52年度から活動しています。

学区まなびい講座の中で参加者が学び合うことによって、より良い地域づくりと人づくりが活発に進められてきました。

中央公民館では、それらの運営に必要な経費の一部を負担するとともに、担当職員を充て、その活動を支援しています。

平成26年度の活動は同一内容の講座を1回としてカウントすると、全学区合計で163回開催し、13,630人が参加しています。

実施主体となっている住民同士の運営委員会では様々な課題があげられています。この課題に向き合い解決の方策を探るため、今回初めて弘前大学生涯学習教育研究センターの事業を活用させていただきました。

担当者として特に印象に残ったことは、「もしこの『学区まなびい講座』制度が各地域で実施されていなかったらどうなっているでしょう？」との問いかけです。一般的に課題の解決には、課題そのものに意識が向かいがちですが、観点を変えた視点は面白いと思いました。

- (1) 住民同士の関係が希薄化している。
- (2) 地域住民の学び合いが進んでいない。
- (3) 地域の教育力が衰退している。
- (4) 地域内の住民組織、関係団体、学校などの協力が弱くなっている。
- (5) 教育行政や他の行政機関との連携が取れていない。

これまで長期間にわたって自らが実践し、築いてきた地域づくり、人づくりなどの活動の積み重ねを大切に、今回の研修を契機にして地域内外にその活動の効果と成果の共有を図りながら、課題解決に向けた機会を積極的に作り、地域の関係者の皆さんと共に深く掘り下げて話し合っていきたいと思っています。

藤崎町家庭教育相談員支援事業			
対象者	藤崎町家庭教育相談員、藤崎町教育委員会担当者	受講者数	延べ47名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	藤崎町教育委員会
会 場	藤崎町常盤生涯文化会館、藤崎町文化センター 弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大4F 生涯学習教育研究センター多目的室		
日 時	講 師	所 属	実施概要
平成27年 7 月15日(水) 平成27年 7 月17日(金) 平成27年 7 月31日(金) 平成27年 8 月 4 日(火) 平成27年 8 月 7 日(金) 平成27年 8 月21日(金) 平成27年 9 月 3 日(木) 平成27年10月19日(月) 平成27年10月26日(月) 平成28年 1 月15日(金) 平成28年 2 月 8 日(月)	深作 拓郎 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター講師	平成27年6月12日に藤崎町と弘前大学が包括連携協定を締結したことを踏まえ、藤崎町教育委員会と弘前大学生涯学習教育研究センターとの共催により、家庭教育相談員のフォローアップ研修を実施することにより、行政と大学の連携のもと、家庭教育支援についてより高度な専門性を深め、「専門的人材」の育成を図ることを目的とする。

平成27年度 藤崎町家庭教育相談事業「子育てなんでも相談」報告

飯 塚 直 子

(藤崎町教育委員会 生涯学習課)

藤崎町教育委員会では平成27年度より、幼児及び児童生徒の保護者等を対象とした家庭教育相談事業「子育てなんでも相談」を実施した。

本事業は、子育てする上で生じる様々な悩みや問題に対し専門相談員が助言や相談等を行うもので、保護者等の育児不安の解消と幼児及び児童生徒の健全な育成を図ることを目的としている。

相談は面接相談及び電話相談とし、月 1 回（第 3 金曜日）相談時間は午前10時から午後 1 時まで実施した。

今年度は年間を通し、相談件数が少数であったが、内容は多岐にわたり専門機関につないだケース及び継続的支援を要とするケースなど専門的支援を要する内容も複数件あった。

また、継続支援ケースにおいては、弘前大学生涯学習教育研究センター講師 深作拓郎氏のフォローアップのもと関係機関との調整会議を開催したことで情報の共有と連携が密になり、適切で専門的なケース対応が可能となった。

これらのことから、相談において複雑かつ多様化する様々なケースが生じており、専門的な対応が求められていること、また、ケース支援に当たり横のつながりを強化し、関係機関との連携を十分に図ることで様々なケースに対し家庭、学校など地域全体で支援していくことが可能であることを確認することができた。

本事業を通し、子育てに悩む保護者等の相談窓口としての事業継続と共に町家庭教育講座等において保護者等が「子育て」に見通しを持ちながら、親同士がつながりを持てる環境づくりや子育てを支え合う地域づくりを目指した子育て支援施策を一体的に展開していく必要性を感じた。

弘前市公民館関係職員研修会			
対象者	公民館職員、生涯学習担当職員、社会教育委員	受講者数	延べ 77名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	弘前市教育委員会
会 場	①弘前大学総合教育棟2F 大会議室、②弘前市立清水公民館、③弘前市立石川公民館		
日 時	講 師	所 属	実施概要
①平成27年7月17日(金) 13:30～16:00	藤田 公仁子 氏 藤田 昇治 氏	富山大学地域連携推進 機構生涯学習部門教授 弘前大学生涯学習教育 研究センター准教授	今日、健康問題や教育問題、地域活性化、住民の「絆づくり」など、様々な課題が生じています。こうした中で、市内地区公民館や全国の公民館の活動の実践例などをもとに、社会教育・生涯学習の担当職員として必要とされる専門的知識・技能の修得を目指します。
②平成27年10月9日(金) 14:00～16:00 ※10/8より変更となりました。	千葉千鶴子 氏 藤田 昇治 氏	清水公民館 事務長兼 社会教育指導員 弘前大学生涯学習教育 研究センター准教授	
③平成27年12月17日(木) 14:00～16:00	島田麻由美 氏 藤田 昇治 氏	石川公民館 少年教育 指導員 弘前大学生涯学習教育 研究センター准教授	



①「今、公民館職員に求められること」

講師：藤田公仁子（富山大学地域連携推進機構生涯学習部門 教授）
藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：10票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
前半	6	4			
後半ワークショップ	9	1			

②「住民参加・参画事業の在り方を考える」

事例発表：千葉千鶴子（清水公民館 事務長兼社会教育指導員）
講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：26票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
前半	12	11	1		2
後半ワークショップ	8	15			3

③「大学と『協同』し、公民館活動の幅を広げよう」

事例発表：島田麻由美（石川公民館 少年教育員）
講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：17票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
前半	8	9			
後半ワークショップ	5	12			

参加した動機・理由（複数回答可）

	第1回	第2回	第3回
公民館の仕事について基本的なことから学びたかったから	4	5	8
ワークショップに関心を持ったから		3	4
上司に参加するようすすめられたから	2	5	1
友人・知人からすすめられたから			
日常業務の参考にしたかったから	4	11	8
研修に参加することは、当然だと思っていたから	3	6	4
前にも研修会に参加して参考になったから		7	4
その他：		1	3

平成27年度公民館関係職員研修会を共催して

三 上 淳
（弘前市教育委員会 生涯学習課）

公民館で実施している事業への新たな住民の参加を図り、「住民同士の結びつき」および「住民と公民館・社会教育施設等との結びつき」を強めるうえで、今何が必要とされているか、地区公民館の事業発表を基に実践的に考える研修となっており、事例の評価を通して、事業実施の参考とすることとしてきました。

研修会の後半では、テーマに基づいたワークショップを開催し、事業運営方法や手法に関するアドバイスを頂きながら意見を交換、グループごとの発表をし、研修参加者からは、「情報の共有が出来、今後の活動へ結び付けたい。」としています。

3回の開催日程において、毎回第1回目の参加者が低調な感じのため、実施時期の日程調整を図りながら、研修内容等も工夫していきなと思っています。

会場を地区公民館へ移し3年目となり、12地区館中の5館が終わりましたが、職員間の交流も図られ、有意義な研修であるとの評価がされており、残り7地区の事業発表も継続して実施していきたいと考えております。

「地域おこし協力隊研修会」				
対象者	本学の教員・学生、自治体職員、地域おこし協力隊（近県も可）		受講者数	延べ 131名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	弘前大学大学院 地域社会研究科・ 弘前大学地域未 来創生センター
会 場	①弘前大学総合教育棟208講義室、②弘前大学総合教育棟405講義室、 ③弘前大学総合教育棟2階大会議室			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年8月7日(金) 13:00～17:30	中田 誠志 氏	恵那市地域サポ ート人アドバイザー	第1部 講演 「5年目の地域おこし 協力から見えること」 第2部 ワークショップ	青森県内でも 導入が進む地域 おこし協力隊事 業については、 「新たな価値」 を生み地域にブ レークスルーを もたらす存在と して注目してい ます。そこで、 地域おこし協力 隊のみなさんや その受入自治体 職員、今後、受 入を検討してい る自治体職員の みなさんを対象 とした研修会を 開催します。
②平成27年12月4日(金) 13:00～17:30	川口 幹子 氏	対馬市地域サポ ート人アドバイザー	第1部 講演 「『共有価値』を創造す る仕事 地域おこし協 力隊が生み出す社会的 価値」 第2部 ワークショップ	
③平成28年2月5日(金) 13:00～17:30	石塚 直樹 氏	みやぎ連携復興セ ンター事業部長	第1部 講演 「地域おこし協力隊研 修会 話題提供」 第2部 ワークショップ	



①第1回「地域おこし協力隊研修会」

第1部「5年目の地域おこし協力隊から見えること」

講師：中田 誠志（美濃文プランニング事務所代表・地域サポート人アドバイザー）

有効回答票数：23票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	10	11	1	1	
内 容	11	11	1		
資 料	13	10			
話し方	14	9			
雰囲気	15	8			

②第2回「地域おこし協力隊研修会」

第1部「『共有価値』を創造する仕事 地域おこし協力隊が生み出す社会的価値」

講師：川口 幹子（対馬市地域サポート人アドバイザー）

有効回答票数：22票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	12	9	1		
内 容	14	7	1		
資 料	5	8	3	1	5
話し方	14	7	1		
雰囲気	12	9	1		

③第3回「地域おこし協力隊研修会」

第1部「地域おこし協力隊研修会 話題提供」

講師：石塚 直樹（みやぎ連携復興センター事業部長）

有効回答票数：19票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	8	8	3		
内 容	7	8	4		
資 料	8	7	4		
話し方	12	6	1		
雰囲気	10	7	2		

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		12	14	10	5	1		
女		13	4	1				
無回答				3		1		

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌		1						
新聞								
DM		4	5	8	1	1		
テレビ・ラジオ								
知人から		9	5	2	2			
インターネット		1		1				
その他		10	8	2	2	1		
無回答				1				

事業評価「地域おこし協力隊研修会」

平 井 太 郎

(弘前大学生涯学習教育研究センター協力教員・弘前大学地域社会研究科 准教授)

平成27年8月7日(金)、12月4日(金)、平成28年2月5日(金)に、「地域おこし協力隊」の隊員、地域住民、受入自治体職員等を対象とした研修会を開催した。三者の相互理解をすすめ、協働のあり方や、地域おこし協力隊員が地域に定着していくための道筋を検討することを目的に今年度から実施した。講演会とワークショップで構成し、参加者は延べ131人。本研修会を通し、地域おこし協力隊と行政との関わり方や、3年間という限られた任期で活動しなければならないこと等、課題も多い中で、今後どのような活動をしていくのかも話し合わせ、参加者からは「意識向上になりました」「地域とのつながりの重大さが理解できた」といった意見が寄せられ、地域人材育成に加え、地域おこしに係る人材ネットワークを広げることにも寄与したといえる。本研修会における隊員・住民・行政職員の三者合同研修の試みは国（総務省・経済社会研究所）から高く評価され、平成27年度総務省地域おこし協力隊モデル事業の要綱に先行的にとり入れられたほか、同モデル事業には本研修会に参加している弘前市と南部町が採択され（全国6市町村）成果を挙げようとしている。なお、本研修会の枠組みは、実施責任教員が編著者となり平成27年9月に刊行された『地域おこし協力隊』（学芸出版社）でも紹介され、全国的にも周知されつつある。

子育てサークル「ぽぷり」の活動支援「ちびっ子海賊の佐井村まち探検」				
対象者	育児中の保護者と子ども、子どもや育児に関心のある一般の方々		受講者数	延べ 83名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	佐井村教育委員会・佐井村中央公民館
会 場	津軽海峡文化館「アルサス」、児童交流センター「ぽぽらす」、佐井村仏ヶ浦			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
平成27年8月19日(水) ～平成27年8月20日(木)	深作 拓郎 氏 弘前大学 「らぶちる -Love for children-」	弘前大学生涯学習 教育研究センター 講師	佐井村・子育てサー クル「ぽぷり」 活動支援・事業打 合せ	弘前大学「らぶち る」の協力の下、佐 井村の子育てサー クル「ぽぷり」のメン バーと地元中・高校 生ボランティアとと もに、村で子どもと 保護者が楽しめる事 業の企画・運営をす る。
平成27年9月25日(金) ～平成27年9月26日(土)				
平成27年10月31日(土) 10:00～15:00			「ちびっ子海賊の佐 井村まち探検～ち びっこ海賊と謎の 地図」	



弘前大学生涯学習教育研究センターによる 佐井村子育てサークル「ぽぷり」の活動支援 ちびっ子海賊の佐井村まち探検～ちびっ子海賊と謎の地図～

加 藤 久美子
(佐井村教育委員会生涯学習課社会教育係主査)

実施日：平成27年10月31日(土)

参加者：児童35人（3歳～小6）、保護者2人

内 容：佐井村では3回目となる「ちびっ子海賊の佐井村まち探検」を大佐井・古佐井地区で行った。普段はあまり認識していない古い建物などを「探検」という形で、その歴史を学んだ。子育てサークル「ぽぷり」を中心として、弘前大学「らぶちる」の協力で大成功に終わった。

メリット：

- ・佐井村において3回目の実施となった「まち探検」のイベントが、ちびっ子海賊と共に恒例のものになりつつある。
- ・佐井村には高校と大学がないため、児童が中学生、高校生、大学生と一緒に交流する機会はほとんどない。児童のみならず、中学生にとっても貴重な経験である。
- ・ぽぷりのメンバーは打ち合わせ（下見）に積極的に参加した。経験と昨年までの反省をふまえ、よりよい企画を作ろうと積極的に発言できるようになっている。
- ・バンダナやタトゥーシールを身に着けることで「ちびっ子海賊」になるという設定から、普段とは違うまちの見方ができているようだ。
- ・参加児童35人中15人が昨年も参加しており、3回連続の参加者も10人いた。
- ・ボランティアとして参加している中学生も、自身が楽しみながら的確にサポートを行っていた。その姿を見ている現在の小学校高学年の児童が中学生になった時、その経験を生かしリーダーとして活躍できるものと期待している。

デメリット：

- ・村内全域の児童に参加を呼び掛けているが、佐井小学校区の児童のみの参加にとどまっている。福浦や牛滝小学校区の児童にとって移動距離（時間）が負担となっていること、自分たちの生活圏ではないまちの探検に魅力を感じていないことが影響していると思われる。
- ・小規模自治体であるため、学校関係の行事によって参加者数が大きく左右される。また、毎年10月ごろの実施となっており、天候による児童の安全確保に課題がある。
- ・異年齢のグループで活動しているが、小学校高学年が先走って行動し、低学年や未就学児が置き去りにされるような場面があった。初めに「道路を走らない」などの約束事を確認したが、夢中になるとつい忘れてしまうようだ。

まとめ：

今回で3回目ということで「ちびっ子海賊の佐井村まち探検」というイベントが、村内で認識されつつある。また、年々協力者（ボランティア）が増えており、子育て支援のみならずジュニアリーダーの育成の要素もある。

終了後、写真を受け取った児童から「とても楽しかった」、「また来年も参加したい」という声が多く聞かれた。

来年度もぽぷりとらぶちるによる「ちびっ子海賊の佐井村まち探検」を実施したい。

三沢市講演会「文化ボランティアの育成をめざして」				
対象者	一般市民		受講者数	延べ 42名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	三沢市教育委員会
会 場	①～② 三沢市公会堂3階 第8・9集会室			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年10月2日(金) 18:30～20:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	「社会参加の意義に ついて- ボランティ ア活動のすすめ-」	三沢市では、「三沢 市総合振興計画 後 期基本計画」の「豊 かな心と体を育むま ちづくり・文化の振 興」に基づき、三沢 市の伝統・文化等の 資源を次世代に伝承 するため、文化ボラ ンティアの育成を目 指している。三沢市 の歴史・文化・自然 を学ぶだけではなく、 地域の魅力を知 ることから社会参加 へつなげていけるよ う学び合う。
②平成27年10月9日(金) 18:30～20:00	森 樹男 氏	弘前大学人文学部 教授	「地域の魅力発見か ら魅力発信へ」	



平成27年度三沢市公開講座
文化ボランティアの育成をめざして

三沢市では、市の伝統・文化等の資源を次世代に伝承するため、三沢市の歴史・文化・自然についてガイドをする文化ボランティアを配置したいと考えております。文化ボランティアに興味のある方、三沢市の魅力について学びその知識を仕事に役立てたい方など、どなたでもご参加いただけます。今年度は、前半の2回は弘前大学から、3回目は人・自然・教育研究所から講師をお招きします。

※受講料は無料となっておりますので、ぜひこの機会にご参加ください。

10月2日(金)18:30～20:00
社会参加の意義についてーボランティア活動のすすめー
弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授 藤田昇治

本講座はあおり県民カレッジ単位認定講座です。
6単位(全3回出席)

10月9日(金)18:30～20:00
地域の魅力発見から魅力発信へ
弘前大学人文学部 教授 森 樹男

10月16日(金)18:30～20:00
三沢市の歴史・自然・文化を学ぶ
人・自然・教育研究所 所長 川村 正

みんなでめざそう！
ふるさと博士！

会場 三沢市公会堂 3階 第8・9集会室
定員 60名
対象者 一般
受講料 無料
主催・共催 弘前大学生涯学習教育研究センター・三沢市教育委員会
申込方法 氏名・住所・電話番号(差し支えなければ年齢・性別・職業)をご記入の上、下記申込先へ電話・FAX又は下記申込用紙にてお申込みください。申込み締め切りは9月25日(金)です。
※お寄せいただいた個人情報(管理)には万全を期しております。本事業の目的以外に使用することはありません。

申込先 三沢市教育委員会生涯学習課 TEL:0178-62-0111(内線 369) FAX:0178-62-3863

受領申込用紙(平成27年度公開講座) 切り取り線

氏名(ふりがな)	電話番号	年齢	性別	職業
ご住所 市				

①「社会参加の意義についてーボランティアのすすめー」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：18票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	6	7	2		3
内 容	6	8	1		3
資 料	3	8	4		3
話し方	5	8	3	1	1
雰囲気	5	10	2		1

②「地域の魅力発見から魅力発信へ」

講師：森 樹男（弘前大学人文学部 教授）

有効回答票数：19票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	10	8			1
内 容	9	7	1		2
資 料	9	8	1		1
話し方	14	4			1
雰囲気	11	6			2

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		2	1		2	4	3	1
女			2	1	1	11	5	
無回答			2			1	1	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌					2	9	4	
新聞		2						
DM								
テレビ・ラジオ			3				5	1
知人から								
インターネット								
その他			2	1	1	5		
無回答						2		

平成27年度弘前大学公開講座「文化ボランティアの育成をめざして」

沼 畑 有 乃

（三沢市教育委員会事務局 生涯学習課 主査）

今年度は、「文化ボランティアの育成をめざして」をテーマに講座を開催した。三沢市では、市の歴史・文化・自然についてガイドをする、文化ボランティアを設置したいと考えており、来年度からの始動に先駆け、まずはボランティアとしての心構えやボランティアに参加することの意義、全国各地での事例紹介などをお話していただいた。

ボランティアの素晴らしさや必然性について改めて考える大変貴重な機会となった。

メリット

- ・基本であるボランティアの心得などをしっかりと学び、来年度に向けての準備をすることができた。
- ・市民の方に文化ボランティアに興味を持っていただく良いきっかけとなり、来年度からの活動に繋げることができた。
- ・幅広い年齢層の方々に興味を持っていただくことができた。
- ・講師の方々の豊富な知識により、様々な活動例を学ぶことができ、参加者から大変好評だった。
- ・昨年度に引き続き受講料を無料にいただいたことによって、気軽に参加することができた。

デメリット

- ・話し方・伝え方の講座を盛り込むことができなかったため、弘前大学様から講師をお呼びしての講座は2回のみとなった。

つがる市連続講演会「地域課題・生活課題に取り組む人材育成を図る」				
対象者	一般		受講者数	延べ 35名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	つがる市教育委員会
会 場	①～③ つがる市生涯学習交流センター「松の館」			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年10月3日(土) 13:00～15:00	高橋 一平 氏	弘前大学医学研究科 准教授	「短命県を返上する ためにできること から始めよう」	地域課題・生活課題について住民の理解を深めるとともに、課題解決に向けた「人材育成」を図る。
②平成27年10月10日(土) 13:00～15:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	「住民の中で様々な『食育』の取り組みを広めよう」	
③平成27年10月24日(土) 13:00～15:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	「自分だけで背負い込むのではなく、家庭・地域で福祉の課題を考えよう」	



①「短命県を返上するためにできることから始めよう」

講師：高橋 一平（弘前大学医学研究科 准教授）

有効回答票数：10票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	3	5			2
内 容	3	4			3
資 料	3	2	1		4
話し方	5	4			1
雰囲気	1	4			5

②「住民の中で様々な『食育』の取り組みを広めよう」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：13票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	5	5	2		1
内 容	3	6	2		2
資 料	3	4	2		4
話し方	3	4	2		4
雰囲気	3	4	2		4

③「自分だけで背負い込むのではなく、家庭・地域で福祉の課題を考えよう」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：12票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	2	6	2		2
内 容	3	4	2		3
資 料	1	6	2		3
話し方	2	5	2		3
雰囲気	3	3	4		2

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男						2	5	
女					2	16	6	
無回答					1	1	2	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌					3	7	7	
新聞								
DM						3	1	
テレビ・ラジオ								
知人から						5	4	
インターネット								
その他						3	1	
無回答						1		

事業の内容評価について

小山内 宏 幸

（つがる市教育委員会社会教育文化課）

平成27年度は、つがる市連続講演会「地域課題・生活課題に取り組む人材育成を図る」をテーマに、計3回の講座を開きました。

第1回目は弘前大学大学院医学研究科准教授の高橋一平先生を講師に迎え「短命県を返上するためにできることから始めよう」と題して、第2回目は弘前大学生涯学習教育研究センターの藤田昇治先生を迎え「住民の中で様々な『食育』の取り組みを広めよう」と題して、第3回目は同じく藤田昇治先生により「自分だけで背負い込むのではなく家庭・地域で福祉の課題を考えよう」と題して、講演会が開かれました。

高橋先生からは、短命ワースト1位を打破するためどのような取り組みをすればよいか、話題提供がなされ、「短命県というと、ややもすれば平均寿命が長いかわいいか、と捉えがちである。しかし、実際は、10代、20代、30代…と、各世代で他の都道府県と比較して多くの人が死亡している、ということである。また、主として生活習慣病に起因する傾向が強い。だから、子どもの頃から、しっかりと学び、良い生活習慣を確立していく必要がある」という、目からうろこが落ちるような内容でした。

藤田先生からは、「これまで塩分の過剰摂取が問題とされてきたが、最近は若い女性の中でやせ過ぎが問題になっている。また、食育というと毎日摂取すべきカロリーや栄養素などについての教育として捉えられがちだが、農業生産や地球規模の環境問題なども視野に入れて学ぶ必要がある」といった内容や、「健康や福祉の問題（失業、子どもの貧困、家庭内暴力など）は、本人から『助けて!』と言い出しにくい状況にある。だからこそ、回りでそうした人を支えていくようにする必要がある」といったことが話されました。

受講者各人にとって意義のある講演会だったと思いますが、今後、参加者層を拡大していくことが課題だと考えています。

総合文化祭事業「大学生と語り合おう らぶちるカフェ」				
対象者	中学生、高校生		受講者数	延べ 350名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	—
会 場	弘前大学教育学部205教室			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
平成27年10月17日(土) 10:00～16:00 平成27年10月18日(日) 10:00～16:00	深作 拓郎 氏 弘前大学 「らぶちる -Love for children-」	弘前大学生涯学習 教育研究センター 講師	「大学生と語り合おう らぶちるカフェ」	中高生を主対象に、 日常のことや学校での 生活、友人関係などに ついて、大学生と語り 合う、「サロン形式」 の交流会。



総合文化祭事業「大学生と語り合おう らぶちる広場」

深 作 拓 郎

(弘前大学生涯学習教育研究センター 講師)

この「らぶちるカフェ」の開設は今年で4年目となった。総合文化祭に来場する小～高校生がらぶちるメンバーと自由に語り合うことで素になれる時間が創れることを目指し、サロンの空間と機能を提供している。

今年度も、教育学部等205教室に2日間開設したところ、延べ来場者は350名を超え、毎年来る常連メンバーも $\frac{1}{3}$ を占めた。

子どもたちが大学生と語り合う内容は、学校や大人への不満、将来のことなどが主であり、子どもたちが抱える深刻な悩みが垣間見え、子どもたちの常設的な居場所が必要であることを改めて感じた。

また、今年度も近隣自治体の社会教育関係職員が来場し、学生と職員間の情報交換の場になっていることも特筆できる。

佐井村事業の直前であることから準備が後手になってしまったこと、子どもたちの声を次の活動にいか反映させていくかが大きな課題である。

総合文化祭事業「トークと歌でたどる昭和戦後史(その3)」			
対象者	一般	受講者数	延べ 19名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	—
会 場	弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大4階 生涯学習教育研究センター多目的室		
日 時	講 師	所 属	実施概要
平成27年10月18日(日) 10:00~12:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授	日本の戦後のあゆみを、政治・経済・社会・文化などの領域における出来事を中心として振り返るとともに、時代を象徴した歌・思い出の歌・青春を刻んだ歌を、みんなで歌います。



参加 無料

平成27年度 弘前大学総合文化祭
生涯学習教育研究センターイベント

トークと歌でたどる昭和戦後史 (その3)
—戦後70年を迎えて—

日本の戦後のあゆみを、政治・経済・社会・文化などの領域における出来事を中心として振り返るとともに、時代を象徴した歌・思い出の歌・青春を刻んだ歌をみんなで歌いましょう。

■ トーク：藤田 昇治先生（弘前大学生涯学習教育研究センター准教授）
伴奏者：今堀 麗香さん（弘前大学教育学部）

■ 開催日：平成27年10月18日（日）

■ 時 間：10:00～12:00

■ 場 所：弘前大学生涯学習教育研究センター 多目的室
（弘前大学創立60周年記念会館「コラボ弘大」4階）

■ 対象・定員：一般・30名

■ 締切日：平成27年10月14日（水）

■ 申込み方法：講座名・氏名・住所・電話番号・年齢・性別・ご職業をご記入のうえ、はがき・FAX・E-mail等でお申込みください。

※ご参加の皆様には、「歌集」をお渡しします。
この「歌集」を参考に歌っていく予定です。

【国立大学フェスタ2015】
協会ウェブサイト
<http://www.janu.jp/univ/festa/>

〒036-8561 弘前市文京町3番地
弘前大学創立60周年記念会館 コラボ弘大4階
弘前大学生涯学習教育研究センター
TEL&FAX: 0172-39-3146（平日：10:30～16:00）
E-Mail: spcenter@hiroasaki-u.ac.jp

◆主催 弘前大学生涯学習教育研究センター
※お寄せいただいた個人情報の管理には万全を期しております。
本学の目的以外に使用することはありません。

総合文化祭事業

「トークと歌でたどる昭和戦後史(その3) —戦後70年を迎えて—」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：19票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	11	8			
内 容	8	10			1
話し方	10	2	5		2
雰囲気	8		9		2

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男					1	2	1	
女			1	3	2	1	3	
無回答					2	2	1	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌 新聞 DM						1		
テレビ・ラジオ 知人から			1	1	3	3	3	
インターネット			1	2	2	1	2	
その他 無回答								

事業評価総合文化祭「トークと歌でたどる昭和戦後史（その3）」

藤 田 昇 治

（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

「トークと歌でたどる昭和戦後史（その3）」は、10月18日（日）に、「総合文化祭」に協賛した企画であり、一般市民が気軽に参加できるイベントとして実施した。

また、「歌を歌う」ことを通じて参加者同士の交流を促進できる事業である。曲の合間に「トーク」を交え、当時の社会状況・文化状況などを振り返ることもできるイベントでもあることから、例年20人前後の参加者があり、リピーターも多い。

今回は、これまで実施してきた「トークと歌でたどる昭和戦後史」シリーズの第3回目となる。高度経済成長が終わりを告げた1973年以降からバブル期、そしてバブル崩壊の時期を中心として、「トークと歌」が設定された。敗戦直後の日本状況の中の映画音楽の中から「青い山脈」を歌い、「沖縄返還」や「ベトナム戦争終結」などの出来事や、「高度成長から低成長へ」という経済の転換、さらに「バブル経済」として特徴づけられる社会状況等も振り返った。

選曲した中には、「川の流れのように」のような耳なじんではいてもうまく歌えない曲もあり、参加者の歌が途切れそうになる場面もあったが、アンケート全体を見てみると、参加した多くの人は、歌とトークを楽しんでいた。参加者の大半が中高年であることから、時代が新しくなるにつれて、みんなで一緒に歌える歌が少なくなっているため、来年度は「昭和戦後史」という設定を取り払い、より親しみやすい曲を中心にした事業を企画したい。

企業・行政・NPO法人で働く人のための学習講座 「これで自分のパワーアップをめざそう」				
対象者	企業・行政・NPO法人で働く人		受講者数	延べ 16名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	NPO法人 R.ぶらっと
会 場	①～④ 弘前大学総合教育棟206講義室			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年11月4日(水) 18:30～20:00	中澤 侃志 氏	NPO法人 「R.ぶらっと」理事、 弘前市職員	「仲間と信頼関係を 築くために」	社会的な諸問題について、専門的な研究成果をふまえた学習をすることで理解を深めることができ、また、職場内外の人間関係を改善するスキルを修得することを目指します。
②平成27年11月11日(水) 18:30～20:00	櫛引 咲子 氏	NPO法人 「harappa」職員 (百石町展示館勤務)	「文化活動による地域 活性化をめざして」	
③平成27年11月18日(水) 18:30～20:00	赤池あらた 氏	弘前大学保健学 研究科 助教	「介護の領域で今直面 している課題」	
④平成27年11月25日(水) 18:30～20:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	「地域と結び良く場 をより活性化させよう」	



①「仲間と信頼関係を築くために」

講師：中澤 侃志（NPO法人「R.ぶらっと」理事・弘前市職員）

有効回答票数：5票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	1	2	1		1
内 容	1	3	1		
資 料		4	1		
話し方	1	3	1		
雰囲気	1	3	1		

②「文化活動による地域活性化をめざして」

講師：櫛引 咲子（NPO法人「harappa」職員・百石町展示館勤務）

有効回答票数：5票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度		1	2		2
内 容		2	2		1
資 料	1	1	2		1
話し方	1	2	1	1	
雰囲気		2	2		1

生涯学習講座
企業・行政・NPO法人で働く人のための学習講座
これで自分のパワーアップをめざそう

社会的な諸問題について、専門的な研究成果をふまえた学習をすることで理解を深め、また、職場内外の人間関係を改善するスキルを修得することを目指します。

第1回
議題：「仲間と信頼関係を築くために」
日時：平成27年11月4日（水）18:30～20:00
講師：中澤 侃志（NPO法人「R.ぶらっと」理事・弘前市職員）

第2回
議題：「文化活動による地域活性化をめざして」
日時：平成27年11月11日（水）18:30～20:00
講師：櫛引 咲子（NPO法人「harappa」職員・百石町展示館勤務）

第3回
議題：「介護の領域で今直面している課題」
日時：平成27年11月18日（水）18:30～20:00
講師：赤池 あらた（弘前大学保健学研究科 助教）

第4回
議題：「地域と結び良く場をより活性化させよう」
日時：平成27年11月25日（水）18:30～20:00
講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

対 象：企業・行政・NPO法人で働く人
定 員：20名 定 額：1,000円（※1回分ずつでも受講いただけます）
お申し込み・お問い合わせ先
会 場：弘前大学総合教育棟206講義室（5F506）
http://www.jpu.ac.jp/learning/

主催：弘前大学生涯学習教育研究センター・NPO法人「R.ぶらっと」
【申込み・問合せ】
青森県弘前市大宮町3-1-1 弘前大学総合教育棟206講義室 弘前大学生涯学習教育研究センター
TEL:0172-24-1444（受付時間 10:30～16:00（平日））
E-Mail: seugaku@hiraoki-u.ac.jp
FAX: <http://mail.tara.co.hiraoki-u.ac.jp/agentur/>

③「介護の領域で今直面している課題」

講師：赤池あらた（弘前大学保健学研究科 助教）

有効回答票数：3票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	1	2			
内 容	1	2			
資 料	1	1			1
話し方	1	2			
雰囲気	1	2			



④「地域と結び職場をより活性化させよう」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：3票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	1	1	1		
内 容		1	2		
資 料		2	1		
話し方	1	1	1		
雰囲気	1		2		



受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		2		2		2		
女				1	5		3	
無回答							1	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌		1				1	1	
新聞								
DM				1	5	1	3	
テレビ・ラジオ								
知人から								
インターネット								
その他		1		1				
無回答				1				

事業評価「企業・行政・NPO法人で働く人のための学習講座」

藤 田 昇 治
（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

企業・行政・NPO法人で働く人を主な対象とした事業として、今年は11月4日から11月25日までの毎週水曜日の夕方6時30分から8時の時間帯で、「これで自分のパワーアップをめざそう」を基本テーマとして、全4回の講座を実施した。

第1回は「仲間と信頼関係を築くために」、第2回は「文化活動による地域活性化をめざして」、第3回は「介護の職場で今直面している課題」、第4回は「地域と結び職場をより活性化させよう」というテーマが設定された。

企業や行政等で働く人々の中には、必ずしも職場で十分働きがいを持つことができないでいる人、職場の人間関係で悩んでいる人、地域課題などに興味関心を抱きながらも積極的に関わりを持ちきれないでいる人なども多いと考えられる。

この講座は、そうした人々のエンパワーメント（人々に夢や希望を与え、勇気づけ、人が本来持っているすばらしい生きる力を湧かせること）を志向する事業としてスタートさせてきた、という経緯がある。

参加者数は必ずしも多いとは言えず、今後企業等への広報活動をいかに効率的に行うべきか、という課題を残している。しかし、参加者が少人数だったことから、参加者の質問・疑問に講師が積極的に応じ、講師と参加者との間で意見交換がなされながら講座が進行する場面が多く見られ、参加者にとっては実りの多いものとなった、ということが言える。

六ヶ所村「トークと歌でたどる昭和戦後史」			
対象者	一般	受講者数	延べ 36名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	六ヶ所村教育委員会
会 場	六ヶ所村立中央公民館		
日 時	講 師	所 属	実施概要
平成27年11月10日(火) 13:30～15:30	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	青年時代や現役で働いていた時期の懐かしい曲をうたい、当時の社会状況についての「トーク（講話）」を聞くことで、自らの人生を振り返るとともに、参加者同士の交流も深める。

六ヶ所村「トークと歌でたどる昭和戦後史」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：27票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	6	9	3		9
内 容	5	6	1		15
話し方	5	6	6		10
雰囲気	8	1	9		9



受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男						2	4	
女							13	1
無回答						1	5	1

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌						2	5	
新聞							1	
DM								
テレビ・ラジオ							4	
知人から							5	
インターネット								
その他							4	1
無回答						1	3	1

「トークと歌でたどる昭和戦後史」を終えて

西 野 遼 平

（六ヶ所村教育委員会 社会教育課）

本村では村内老人クラブを対象に「ことぶき教室」の事業を毎年行っている。今年度は事業の一環として本講座を初めて依頼した。参加した人にとっては新しい分野において初めての講座ということもあり、普段以上の参加者が集まった。内容としては戦後からの青春時代を経て平成までの時代の歌を講師と受講者で歌いながら当時の背景や文化を振り返る講座となり、貴重な機会となった。

開始時は受講者が知らない歌もあり、歌っている人の割合はあまり多くなかったが、青い山脈や川の流れのようになどの流行歌になると歌える割合が多くなり、会場が活気にあふれていた。

また当日は、当初2時間の講演を予定していたが、都合により若干短くなり、凝縮された内容となった。

設備面では、ピアノや音源が無かったので、アカペラで歌うこととなってしまった。受講者は当時の文化などを振り返りながら聴いていた。

最後に行ったアンケートについても、好評という回答が多かったので、初めて行った内容としては実りあるものとなった。来年度も行うことがあれば、今年度の良かったところを維持し、音響面などの課題についても改善することが出来、受講者の立場から見てみる等、更に良い内容になると思われる。

産み育てたいまち「ひろさき」PR事業 “仮想家族会議～遠くて近い未来の家族像～”				
対象者	弘前大学の学生約20名 ※男女各10名		受講者数	延べ 10名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	弘前市
会 場	弘前大学人文学部 4階多目的ホール			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
平成27年12月1日(火) 18:00～20:00	深作 拓郎 氏 増田由美子 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 講師 フリーアナウンサー	“仮想家族会議～遠 くて近い未来の家 族像～” 集え、若者たち!! 結婚・家庭・子育て の話をしよう	学生が、近い将来、 子どもを産み育てる ことについて、乗り 越えなければならない現実的な諸問題に 対し男女間での理解 を深めるとともに未 来の家族について肯 定的なイメージを持 ってもらうことを 目的とする。



「仮想家族会議～近くて遠い未来の家族像」

講師：増田由美子（フリーアナウンサー）
深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）
有効回答票数：10票

講座の評価

問1 今回の満足度を100点満点で何点かお知らせください。
平均 81.5 点

受講者の割合

問2 性別をお知らせください。
(●女 4 ・ ○男 6)

問3 今回参加して良かった点をお知らせください。

- 結婚について普段あまりイメージすることが無かったが、今回参加によりイメージが具体的になった。
- 弘前市のイベントはたくさん参加しているが、今回の仮想家族会議などのような内容で事業をやってもらえると弘前市で住むうえで安心するし嬉しい。
- それぞれの立場の意見を聞いて良かった。
- 女性の意見や結婚を経験した人の話が、今後の生活の参考になった。
- 女性の考え方に触れることができて良かった。
- 男女での考え方の違いや、それぞれ個人としての考え方の違いが聞いた。
- 男性の立場の話を聞いて勉強になった。
- 普段聞けない男性の話や女性同士の話が聞いて良かった。
- 若い世代の方の考えを聞くことができた。
- 普段異性に対し言えないことや、聞けない考え方に触れることができた。

産み育てたいまち「ひろさき」PR事業

“仮想家族会議～遠くて近い未来の家族像～”

集え、若者たち!!

結婚・家庭・子育ての話をしよう

将来、子どもを産み育てることについての現実的な諸問題に対し男女間での理解を深めるとともに未来の家族について不安を払拭するディスカッション。

《内 容》

12月1日開催

《スケジュール》

①概要説明 18:00～18:10
②男が考える結婚・家庭・育児 18:10～18:40
③女が考える結婚・家庭・育児 18:45～19:15
④夫婦・家庭における役割分担 19:20～19:50
⑤振り返り・総括

コーディネーター：弘前大学生涯学習教育研究センター 講師 深作拓郎 氏
アドバイザー：増田由美子氏（フリーアナウンサー）

《会 場》

弘前大学人文学部4階多目的ホール

《対 象》

弘前大学の学生（約20名）

《主 催》

弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市

《申込締切》

11月24日(火曜日)

《問合せ申込先》

弘前大学生涯学習教育研究センター TEL/FAX 0172-39-3146

問4 今回参加して悪かった点をお知らせください。

- 男女の違いについては、僕らの世代ではあまりない。
- 今回の仮想家族会議は、家族のように話し合うとのことだったが、少し堅い雰囲気があったように感じた。
- もっと話したかった。運営側の話が長く、参加者の意見をあまり聞けなくて残念。
- 結婚が良いことだけではないことを知った。
- もう少し時間が欲しい。
- 時間が足りない。もっと話したい。話し合いは最初から男女一緒でもよかった。
- 話すときの配置がまばらで声が聞き取りにくかった。
- 時間が少し短い。

問5 結婚・家庭・子育てに対するイメージがどう変わりましたか。

- 男女で協力していくことがあたりまえと思っていたが、「子どもの送り迎え」や「ゴミ捨て」など、女性のイメージが強いものをあまり自分に置き換えて考えていなかったということに気付かされた。
- 自分は男性で、(イクメンなど)男性主体の考え方というか、偏った考えを持っていた気がする。女性の意見を聞くことでお互いの不安を知った。
- 年上と自分たちの世代の結婚・家庭・子育てに対するイメージのギャップにびっくりした。
- 辛いことを共有して生きていくことが必要だと感じた。
- 男性の視点と女性の視点の両方を尊重し、二人三脚で上手にやっていくことは難しいですが、やっぱりそれに尽きるのではと思った。
- 理想と現実の違いや、自分の経験とのギャップを感じ、様々な問題が浮き彫りになったため、それぞれに対するアプローチを結婚相手や子ども、親の目線で見ることが大事と感じた。
- 男性は子育てに関してあまり考えていないのでは？と思っていたが、いろいろ考えていることが分かった。
- 「子育ては女性がメイン」と思っていたが、男性の方が意欲的で「自分を理解してくれないのでは」という不安が軽くなった。
- ポジティブに考えていくぞと思えた。
- 女性の負担はやはり大きいと思うけれど、できるだけ役割分担をしつつ、男性には自分にしかできないことを見つけてやってほしいと感じるようになった。

問6 参加した感想を自由にお書きください。

- 共働きが当然と思っていたが、妻だけの単身赴任だったり、保育所の子どもが熱を出した時誰が迎えに行くのかなど、問題が多いことを知った。
- この事業によって行政に何か変化をもたらすことができれば良い。
- 年上の世代の方がよっぽど男女差別的な色眼鏡をつけていると思った。
- 結婚は多くの経験を積んで、子育て、家事を学んでからしたいと思った。
- 違う人の意見に触れて、様々な考え方を知ることができた。将来を見据えるための良い機会となった。
- 男女でのイメージの違いに興味を持った。誘われて参加した。
- 将来ためになるような話し合いだった。もっと時間があれば、より深く話し合っていたいと思った。
- 男性側の意見や結婚の先輩方の意見が聞けて本当によかった。このような場が増えればよいと思う。
- 日頃考えることのないテーマだったので、自分の考えていることを言葉にして話したことで、「自分がこういうことを考えているんだ」と気付いた。
- 普段の授業で取り扱うような内容ではなく、より自分の将来に近い話題であり、なかなか聞くことができない考え方も増えたため良い機会となった。この経験を大切にしたい。

産み育てたいまち「ひろさき」PR事業 仮想家族会議～遠くて近い未来の家族像～

中 澤 侃 志

(弘前市健康福祉部子育て支援課)

今回の事業は若者を対象とし、将来子どもを産み育てることについて、乗り越えなければならない現実的な諸問題に対し、ディスカッションにより男女間での理解を深めるとともに未来の家族について肯定的なイメージを持ってもらうことを目的とする。また、これからの市で行う事業展開に参考とするための若者の意見を聞く機会として弘前大学との連携事業として実施した。

弘前市を中心とした津軽地方の会社は、中小企業も多く、ワーク・ライフ・バランスの優先順位は決して高くない職場環境も少なくない。しかし、若者には夢と希望を持って生きてほしい。それぞれが望むなら、結婚しても子どもが産まれても楽しい社会生活が送れるようにサポートしたい。

少子化が叫ばれ、子育て支援のあり方が問われている昨今。これまで行政は、市民のために良かれと考え様々な施策を講じてきた。しかし、その施策の裏付けとなる市民の声、特に若者のニーズはなかなか捉えることが難しい。だからこそ今回の事業は、大学の力を借りて若者の率直な意見を吸い上げる方法を試行し、若者の声の一端を切り取ったことに成果があり、その意義は大きいものとする。もちろんやり方は今後見直しが必要であるが、他の大学などに事業を広げていくことができれば、市が抱える課題が自然に見えてくるものと期待している。

実際に今回参加した学生の意見を聞くと、思いもよらない意識の高い答えが返ってきた。国が促進するイクメンなどの男性の育児参加についても、“アタリマエの事”と断言された。これは今回協力いただいた学生が子どもに関わる活動をしている方が多かったことも影響している可能性があるが、もしかすると弘前大学においては、既にジェンダー問題は存在しないのかもしれない。これは私たち大人にとっては斬新な驚きであった。

子育てしやすい社会環境実現のため大切なことは、二人の生き方を「こうあるべき」と一般化して示すことではない。どのような生き方をしても、違いを認め周囲から温かく見守ってもらえる多様な社会の実現である。そのためにも過去に囚われない多様な意見が今後とも必要である。

このたびは、弘前大学の協力によりこのような機会を設けることができたことについて心から感謝申し上げる。そして、今後はこのノウハウを市民の満足度の高い事業実施へと発展させていくことに繋げていけるよう価値を高めていきたいと考えている。

子どもの居場所づくりを考える研修会				
対象者	児童クラブやなかよし会などの学童保育、放課後子ども教室等のスタッフ他、希望する一般市民		受講者数	延べ 80名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	弘前市
会 場	①、② ヒロロ3階 多世代交流室 2			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
①平成27年12月11日(金) 10:00～12:00	渡部 達也 氏、 渡部 美樹 氏	NPO法人ゆめ・まち・ねっと代表	「子どもの心地よい居場所とは～大人の役割と子どもの成長～」	児童クラブやなかよし会などの学童保育、児童館、放課後子ども教室等は、学校や塾、家庭以外での子ども達が集う場所であり、いろいろな状況にある全ての子どもの居場所として期待されている。そこで、児童館等のスタッフを対象とし、多様な子ども達の心地よい居場所や環境を如何に作り出すのかを学ぶ機会を創出する。
②平成27年12月18日(金) 10:00～12:00	深作 拓郎 氏	弘前大学生涯学習教育研究センター講師	「自分たちでできる放課後の居場所づくり」	



研修会

子どもの居場所づくりを考える



『Better a broken bone than a broken spirit』
【R】心が折れるより、骨が折れるほうがましだ。

こんな言葉を記した看板を掲げている場所が静岡県富士市にある。「NPO法人ゆめ・まち・ねっと」が運営する「喜ばせびっぴり公園」という場所。遊んでいるのか、勉強しているのか、本を読んでいるのか・・・その場に集まる子どもたちは、誰からも縛られることなく、自分であることを決め、時間を思い通りに過ごす。大人たちは子どもたちが生き生きと遊べる環境を築き、あたたかさと励みを与えている。

そこに集まる子は、大きな自然と地域の大人たちに見守られ、一人ひとりが「う」を生き、輝いている。

静岡県富士市の「NPO法人ゆめ・まち・ねっと」の取り組みを学び、地域でこどもを育む環境について考えます。

12月11日(金)
10:00～12:00

≪基調講演テーマ≫
「子どもの心地よい居場所とは～大人の役割と子どもの成長～」
 ≪講師≫
 NPO法人ゆめ・まち・ねっと代表 渡部達也 氏、渡部美樹 氏

12月18日(金)
10:00～12:00

≪基調講演テーマ≫
「自分たちでできる放課後の居場所づくり」
 ≪講師≫
 弘前大学生涯学習教育研究センター講師 深作拓郎 氏

場 所 ヒロロ3階 多世代交流室2 (駅前9-20)

定 員 30名 (定員になり次第締め切り)

対 象 児童館やなかよし会などの学童保育のスタッフ、放課後子ども教室のスタッフ 希望する一般市民

受講料 無料



≪主 催≫ 弘前大学生涯学習教育研究センター・弘前市
 ≪問い合わせ先≫ 弘前市子育て支援課子育て戦略担当 TEL: 0172-40-7038

①「子どもの心地よい居場所とは～大人の役割と子どもの成長～」

講師：渡部 達也、渡部 美樹（NPO法人 ゆめ・まち・ねっと代表）

有効回答票数：36票

講座の評価

今回の満足度を100点満点で何点かお知らせください。

平均 92.0 点

②「自分たちでできる放課後の居場所づくり」

講師：深作 拓郎（弘前大学生涯学習教育研究センター 講師）

有効回答票数：30票

講座の評価

今回の満足度を100点満点で何点かお知らせください。

平均 92.4 点

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男		2	3	2	2		1	
女		7	9	12	20	1		1
無回答		2	1	1	2			

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌				2	2	1	1	
新聞								
DM				4				
テレビ・ラジオ								
知人から		5		1				
インターネット								
その他		5	12	7	22			
無回答		1	1	1				1



「放課後の子どもの居場所づくりを考える研修会」

中 澤 侃 志

（弘前市健康福祉部子育て支援課）

かつて、私が子どもの時は、学校が終われば子どもだけの自由な遊び時間が夕暮れまで存在していた。今、思い返すとその時の景色と思い出だけがなぜか輝いて見える。

いつからだろうか、子ども達の遊びの時間が安全と安心の名のもとに大人によって管理されるようになったのは。確かに現代は、責任が求められる社会である。子どもが怪我をした時、誰が責任をとるのか、誰が管理者なのか、常に問われる。何かが起きた時、責任問題が自らに及ぶことが怖いため、できることなら子どもを目の届くところに置きたいと考えるようになり危険が予想されることは極力避けることとなった。結果、大人の思いのまま言うことを聞いてくれる子どもが良い子となり、大人が思いもよらない行動をとる子どもは良い子ではないと思われがちである。

現代社会では、「最近の若者は与えられることだけやって、自分で考えて行動することができない」などと言われる。私は、与えられることに慣れすぎて子どもだけで工夫して遊べない状況と、自らで思考し行動できない若い社会人との現象が関連しているように思えてならない。

学校に目を向けると、いじめや不登校など様々な問題を抱えており、学校教育だけでは解決が困難となるため、家庭教育や社会教育にまでも先生の責任が及んでいる現状のほか、さらに個性豊かで多様な子ども達を深く理解しようとする先生方がどんどん多忙となっている。私の子どもの頃の画一的な教えを重視する学校とは明らかに複雑性が違っている。学校が複雑化するのに伴い、子どもも先生も、やるべき事、やらなければならない事が増え本来の学びや育ちという目的を忘れがちである。このような状況では、先生だけではなく子ども達にも多くのストレスがかかるようになった。

人の全ての基礎になる能力は、子どもの時の経験に基づくものが多い。放課後の子どもの居場所を考えると、できることなら子ども達にとって「その場所に居て楽しい」場所であってほしい。このため児童クラブやなかよし会などの学童保育、児童館、放課後子ども教室などは、将来の子ども達を育む大きな役割と期待を背負っていると考えられる。

今回の事業は、多様な子ども達の心地よい居場所や環境を如何に作り出すのか、先進的な実践から成果のある講師を招き学ぶ機会を創出し、これにより、いじめや学校になじめない等の理由により学校に居場所がない子どもの場合や、不登校となってしまう可能性のある児童生徒の理解にもつなげることを目的とし、弘前大学との連携事業として実施した。

深作先生のご協力により、この研修会において的確に現在の弘前市に必要なポイントを抑えることができたことは感謝に堪えない。参加者のアンケートからも、多くの気づきが見られ、これを機に子どもの居場所の環境が大きく変化することを期待する。

子どもは地域の宝と言われるが、今の子ども達も将来大人になって地域を担っていく。そして、将来の子ども達を育てていく。だからこそ、今の子ども達を育む環境にこそ大人が責任を持って関わっていくことが大切だ。

放課後を過ごす子ども達もそれに関わる大人達も、全ての人が楽しく豊かな人生を送ることができ、地域全体が魅力的になることを夢見ている。

「トークと歌で迎えよう冬、クリスマスそしてお正月！」			
対象者	一般	受講者数	延べ 27名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター	共 催	—
会 場	弘前大学総合教育棟310講義室		
日 時	講 師	所 属	実施概要
平成27年12月19日(土) 10:30～12:00	藤田 昇治 氏	弘前大学生涯学習 教育研究センター 准教授	クリスマスと正月にちなんだトークを まじえながら、クリスマス・正月・冬の季 節にちなんだ曲をみんなで歌い、参加者同 士の交流を図る。



参加無料 平成27年度 弘前大学生涯学習教育研究センターイベント

トークと歌で迎えよう冬、クリスマス、そしてお正月！

クリスマスと正月にちなんだトークをまじえながら、クリスマス・正月・冬の季節にちなんだ曲をみんなで歌い、参加者同士の交流を図りましょう。

■講 師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター准教授）
 件 責 者：今堀 麗香（弘前大学教育学部学生）
 ■日 期：2015年12月19日（土） 10時30分～12時
 ■会 場：弘前大学総合教育棟3階 310講義室
 ■定 員：30名
 ■参 加 費：無料
 ■対 象：一般
 ■申 込 先：弘前大学生涯学習教育研究センター
 ■申込締切：12月15日（火）
 ■申込方法：講座名・氏名・住所・電話番号・年齢・性別・ご職業
 をご記入のうえ、はがき・FAX・E-mail 等でお申込み
 ください。
 ※ご参加の皆様には、「歌集」をお渡しします。
 この「歌集」を参考に歌っていく予定です。

【曲目】
 1. 冬の季節・師匠にちなんだ
 ・寒い朝
 ・雪の降る街を、他
 2. 冬の遊び・スノーブーツ
 ・雪山讃歌
 ・ベチカ、他
 3. クリスマス関連
 ・ジャングルベル
 ・きよしこの夜、他
 4. 正月を満喫する
 ・お正月
 ・一月一日

〒036-8561 弘前市文京町3
 弘前大学生涯学習教育研究センター
 TEL/FAX: 0172-39-3146（平日：10:30～16:00）
 E-MAIL: saccenter@hroski-u.ac.jp
 ◆主催 弘前大学生涯学習教育研究センター
 ※お寄せ頂いた個人情報管理には万全を期しております。
 本学の目的以外に使用することはありません。

昨年度は、10時30分～12時まで、総合教育棟3階310講義室にて行いました。チラシをご確認の上、是非ご参加ください。

「トークと歌で迎えよう冬、クリスマスそしてお正月!!」

講師：藤田 昇治（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

有効回答票数：25票

講座の評価

	よい	ややよい	ややよくない	よくない	無回答
理解度	18	7			
内 容	12	8		1	4
話し方	14	4	1	3	3
雰囲気	14		4		7

受講者の割合

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
男						4	2	1
女					3	6	7	
無回答						1	1	

受講のきっかけ

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	無回答
広報誌						1	1	
新聞						1	1	1
DM					2	6	4	
テレビ・ラジオ					1	3	4	
知人から								
インターネット								
その他								
無回答								

事業評価「トークと歌で迎えよう冬、クリスマスそしてお正月！」

藤 田 昇 治

（弘前大学生涯学習教育研究センター 准教授）

「トークと歌」と題する事業として、昨年度同様にクリスマス間近の12月19日(土)に、「トークと歌で迎えよう冬、クリスマスそしてお正月！」を実施した。みんなで歌える親しみのある曲とそれにちなんだトークの内容を設定しようということで、今年度は「冬」に関連する曲を新たに付け加えることにした。

冬の季節と師走にちなんだ曲として、「寒い朝」、「たきび」、「冬の星座」、「歓喜の歌」などを、冬の遊び・スポーツにちなんだ曲として「雪山賛歌」、「スキー」などを、クリスマスにちなんだ曲として「ジングルベル」や「きよしこの夜」などを、そしてお正月にちなんだ曲として「一月一日」などを歌った。

伴奏は、弘前大学の学生に依頼した。

参加者は27人。「友人にも声を掛けて当日参加の人と一緒に来た」という人がいたことや、終了後のアンケートでは、「この事業についてどのように知ったのか」という設問に対して「知人から」と回答した人が8人（32パーセント）いたことが注目される。

参加した理由として自由記述の項目では、「みなさんと一緒に楽しく歌うため」、「歌がすきだから。トークの雰囲気がいいから」、「外に出ないと引きこもりになるので」といった声が寄せられていた。また、内容についての評価では、「よい（とても役に立った）」と「ややよい（まあまあ役に立った）」の合計が8割となっており、好評だったと考える。

「世界自然遺産 白神山地の保全と活用」				
対象者	世界自然遺産の保全と利活用について考えたい人		受講者数	延べ 95名
主 催	弘前大学生涯学習教育研究センター		共 催	—
会 場	弘前大学総合教育棟406講義室			
日 時	講 師	所 属	演 題	実施概要
平成28年2月4日(木)	岡安 直比 氏	WWF ジャパン 自然保護室 主席コーディネーター	「世界自然遺産のこれから—希少価値を求めるか、馴染みやすさで広く知ってもらうかの悩みどころ」	白神山地をはじめとする青森県の自然環境に深い見識をもち、環境の保全に配慮しながら、自然資源の管理と活用をすることのできる人材の育成を目的とする。



平成27年度 弘前大学公開講座
世界自然遺産 白神山地の保全と活用

講演:
世界自然遺産のこれから
希少価値を求めるか、
馴染みやすさで広く知ってもらうかの
悩みどころ

演者: 岡安直比 氏
WWFジャパン
自然保護室主席コーディネーター

■日時: 平成28年2月4日(木)
14:20~15:50

■場所: 弘前大学総合教育棟 406講義室

■対象: 世界自然遺産の保全と利活用について考えたい人

■定員: 50名

■申込締切: 平成28年2月1日(月)

■①氏名、②連絡先、③(あれば)所属を添えて下記へ
メールか電話でお申込みください

〒136-8501 弘前市文京町1 弘前大学生涯学習教育研究センター
Tel: 0177-26-3146 Mail: lgcenter@hiroasaki-u.ac.jp
主幹: 弘前大学生涯学習教育研究センター

「世界自然遺産のこれから
—希少価値を求めるか、馴染みやすさで広く知ってもらうかの悩みどころ」

講師: 岡安 直比 (WWF ジャパン自然保護室主席コーディネーター)

有効回答票数: 88票

受講者の割合 (社会人)

年齢（社会人）	30代	40代	50代	60代	70代	
	2	4	2	1		
性別（社会人）	男性	女性				
	5	4				
職業（社会人）	自営	会社員	無職	団体職員	白神関係	その他
	1	3	2	1	1	1

受講者の割合 (学生)

弘前大学生	人文	理工	農生	医学	無回答
1年		4	62	7	1
2年	3				
3年		1	1		
4年					

講座の評価

講座全体について

良く理解できた	9
理解できた	67
やや難しかった	9
難しかった	0
無回答	3

自然遺産の保護と活用のどちらを重視すべきだと思いましたか

保護に専念すべき	10
保護をより重視すべき	61
活用をより重視すべき	15
活用に専念すべき	1
無回答	1

講座を聞いて、自然遺産をめぐる活動について

実際に参加し活動した	19
情報を集めたいと思った	17
興味を持った	48
興味をもたなかった	0
無回答	4

講座の評価

世界自然遺産に対する関心について

- (1) 自然遺産の保全について専門的に学ぶことに
- (2) 自然遺産の観光化について学ぶことに
- (3) 自然遺産や周辺地域の地域資源の商品化（ブランド化）について学ぶことに
- (4) 自然遺産の価値を次世代に伝える方法を学ぶことに

項目間の関係（「関心がある」のみ）

	観光	ブランド	次世代
保全	18	13	23
観光		15	17
ブランド			15



事業評価「世界自然遺産 白神山地の保全と活用」

曾 我 亨

（弘前大学人文学部 教授・生涯学習教育研究センター長）

青森県は、世界自然遺産白神山地をはじめ、起伏に富んだ豊かな自然環境に恵まれているが、その活用は十分とはいえない。弘前大学生涯学習教育研究センターは、世界自然遺産「白神山地」の保全に配慮しつつ活用をすすめる専門人材の育成講座を平成28年10月より開講する。それに先立ち、育成講座の一部を構成する授業科目「生物学の基礎IIC」と連動した公開講座「世界自然遺産白神山地の保全と活用」を試行し、受講生の関心の在処を探るアンケート調査を実施した。

公開講座は平成28年2月4日（木）に弘前大学総合教育棟406講義室において開催された。「世界自然遺産のこれから：希少価値を求めるか、馴染みやすさで広く知ってもらおうかの悩みどころ」という題で、世界自然保護基金WWFジャパン自然保護室主席コーディネーター・京都大学野生動物研究センター特任教授の岡安直比氏が講師を務めた。

公開講座では、すでに1,000件を超える世界遺産が登録されており、もはや世界遺産であるというだけでは、観光資源として魅力的であるとは言いがたいことが示された。また、世界自然遺産については、「パトロール」「エコツーリズム」「モニタリング調査」の3点が重要であることが指摘され、世界各地の世界自然遺産の取り組みが紹介された。とくに非保護区において生物多様性保全と地域経済の持続的発展を両立させる事例の報告は、今後、我々が実施する専門人材育成講座のカリキュラムを開発する上で有意義であった。

本公開講座を受講した95名を対象に、世界自然遺産の保護と活用について、具体的に何に関心を持っているかアンケート調査をおこなった。アンケートを分析した結果、世界自然遺産の保護保全に対する関心が高いこと、また、そうした人びとは、次世代への継承への関心が高い一方、観光化・ブランド化への関心はやや低いことなどが明らかとなった。これらの結果をもとに、カリキュラムの開発を加速させる。

2. 学部・大学院の主催事業など

【人文学部】

名 称・開催日	講 師	内 容	
北日本考古学研究センター特別展		平成23年度に開始した「冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト」の5年間にわたる活動を通して得られた貴重な資料及び成果を一般に公開するものです。	
平成27年10月17日(土) ～平成27年11月29日(日)	弘前大学人文学部 教授・北日本考古学研究 センター長 関根 達人 弘前大学人文学部 准教授 上條 信彦		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学北日本考古学研究センター展示室ほか 【対 象】一般 【定 員】 【参加費】無料		約800名	弘前大学北日本考古学研究センター

【医学研究科】

名 称・開催日	講 師	内 容	
平成27年度弘前大学大学院医学研究科公開講座「メンタルヘルス」		講義1：メンタルヘルス総論 講義2：子どものメンタルヘルス 講義3：大人のメンタルヘルス—個人の特性と生活環境との関連から—	
平成27年9月4日(金) 18:00～20:00	講義1：弘前大学医学研究科附属子どものこころの発達研究センター 特任准教授 栗林 理人 講義2：弘前大学医学研究科附属子どものこころの発達研究センター 特任助教 足立 匡基 講義3：弘前大学医学研究科附属子どものこころの発達研究センター 特任講師 高柳 伸哉		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学医学研究科1階 基礎大講堂 【対 象】一般の方、教職員、学生 【定 員】80名 【参加費】無料		150名	弘前大学医学研究科広報委員会

名 称・開催日	講 師	内 容	
「健康・医療講演会」 ～大腸がんについて～		講演 1：大腸がんの予防 講演 2：内視鏡治療の実際について	
平成27年10月31日(土) 14:00～16:00	講演 1：公立七戸病院 内科・院長 佐々木博海 講演 2：弘前大学医学部 附属病院光学医療診療部 准教授 三上 達也		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】七戸町 柏葉館 【対 象】一般の方、教職員、学生 【定 員】100名 【参加費】無料		73名	弘前大学医学研究科

【保健学研究科】

名 称・開催日	講 師	内 容	
生体応答科学研究セミナー		Foods for Health at University of Otago ～An introduction to the University of Otago detailing research expertise and capability in the area of functional food research～	
平成27年 4 月13日(月) 18:00～19:00	Enterprise Manager Global Partnerships/ Biomedical Research & Enterprise Office University of Otago David Grimmett		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学保健学研究科 S 棟小会議室 【対 象】教員、学生、大学院生、他 【定 員】なし 【参加費】なし		30名	弘前大学保健学研究科生体応答科学研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学オープンキャンパス 大学院保健学研究科 地域保健医療教育研究センター 特別企画・市民公 開講座医療から介護への境目のない連携をめざして		弘前大学オープンキャンパス特別企画・市民公 開講座 医療から介護への境目のない連携をめざして 講演 1：介護保険制度について 講演 2：地域医療介護の実例 講演 3：地域医療及び介護を支える専門職	
平成27年 8 月 8 日(土) 13:30～15:00	講演 1：介護保険制度に ついて 弘前市健康福祉部 介護福祉課 課長 須藤 悟		

講演 2：弘前大学大学院 保健学研究科医療生命科学領域 教授 丹藤 雄介 講演 3：弘前大学大学院 保健学研究科健康支援科学領域 助教 北嶋 結			
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学保健学研究科総合研究棟24講義室 【対 象】 一般の方、教職員、学生 【定 員】 【参加費】 無料		40名	弘前大学保健学研究科地域保健医療教育研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
平成27年度 弘前大学総合文化祭「知の創造」 市民公開講座「がんは早期発見で予防できる」		弘前大学総合文化祭「知の創造」 「がんは早期発見で予防できる」というテーマで、がんとはどういう病気か、早期発見に貢献する細胞診断、そして、がん死亡率減少に貢献する子宮頸癌検診について、本学の教育研究活動を広く一般市民、学生等に公表した。	
平成27年10月18日(日) 13:30～15:35	弘前大学大学院保健学研究科 教授 渡邊 純 助教 吉岡 治彦 助教 堀江 香代		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部コミュニケーションセンター 【対 象】 一般市民、学生等 【定 員】 100名 【参加費】 無料		40名	弘前大学保健学研究科

名 称・開催日	講 師	内 容	
生体応答科学研究セミナー		リンゴ機能性成分「プロシアニジン」による糖・脂質代謝への影響と腸内細菌叢の関係	
平成27年11月20日(金) 18:00～19:30	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所 栽培・流通利用研究領域 流通利用・機能性研究ユニット ユニットリーダー (主任研究員) 庄司 俊彦		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学保健学研究科F棟1階 大学院講義室 I 【対 象】 教員、学生、大学院生、他 【定 員】 なし 【参加費】 なし		20名	弘前大学保健学研究科生体応答科学研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
生体応答科学研究セミナー		マラリア媒介蚊の唾液タンパクを基盤とした創薬研究	
平成27年12月18日(金) 18:00～19:30	金沢大学医薬保健研究域 薬学系 准教授 伊従 光洋		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学保健学研究科 F棟 3階 セミナー室 5・6 【対 象】 教員、学生、大学院生、他 【定 員】 なし 【参加費】 なし		20名	弘前大学保健学研究科生体応答科学研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学大学院保健学研究科市民公開講座 地域医療の進歩とその基礎		第Ⅰ部 地域医療の進歩 講演1：備え（そなえ）あれば患い（うれい）なし ―健やか力を身につけて、心身の健康増進を― 講演2：高齢者に有用ながん放射線治療 ―地域完結型医療をめざして― 講演3：訪問医療に適した画像診断ツールの有効利用 ―ヘルスプロモーションカーとX線画像情報連携支援システムの活用― 第Ⅱ部 地域医療を支える基礎的研究 ヒアルロン酸とプロテオグリカンの正しい知識	
平成28年1月24日(日) 10:00～12:30	第Ⅰ部 講演1：弘前大学大学院保健学研究科 教授 丹藤 雄介 講演2：弘前大学大学院保健学研究科 教授・地域保健医療教育研究センター長 真里谷 靖 講演3：弘前大学大学院保健学研究科 講師 工藤 幸清 第Ⅱ部 講演1：弘前大学大学院保健学研究科 教授・生体応答科学研究センター長 中村 敏也		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 むつ市立図書館 あすなろホール 【対 象】 一般の方 【定 員】 130名 【参加費】 無料		70名	【主催】 弘前大学保健学研究科地域保健医療教育研究センター/生体応答科学研究センター 【後援】 むつ市、むつサテライトキャンパス

名 称・開催日	講 師	内 容	
生体応答科学研究セミナー		放射線被ばくと放射線治療 ～有害事象の診断・治療から被ばく医療の将来 展望まで～	
平成28年 1 月28日(木) 18:00～19:30	弘前大学大学院保健学研究科医療生命科学領域放射線生命科学分野 教授 真里谷 靖		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学保健学研究科E棟 6 階第24講義室 【対 象】教員、学生、大学院生、他 【定 員】なし 【参加費】なし		40名	弘前大学被ばく医療総合研究所 弘前大学保健学研究科地域保健医療教育研究センター/生体応答科学研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
生体応答科学研究セミナー		環境変異原と染色体異常	
平成28年 2 月22日(月) 13:30～14:30	北海道薬科大学薬学部 基礎薬学系生命科学分野 講師 中田 章史		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学保健学研究科 F 棟 2 階 遠隔講義室 【対 象】教員、学生、大学院生、他 【定 員】なし 【参加費】なし		15名	弘前大学保健学研究科生体応答科学研究センター

【理工学研究科】

名 称・開催日	講 師	内 容	
「地質の日」 in 弘前 2015		・午前の部：恐竜のペーパークラフトを作成し、また化石を観察する、古生物を通して、過去の地球について考えるきっかけとして頂く。 ・午後の部：地質に関する二つの講演「石油・石炭とこれからの資源」及び「青森県の活火山」を行う、講演を通して、我々が生活する地球について学び、考える機会をもって頂く。	
平成27年 5 月10日(日) 10:00～12:30(午前の部) 13:30～15:00(午後の部)	・午前の部：弘前大学理工学研究科 講師 根本 直樹 ・午後の部：元弘前大学理工学研究科 教授 氏家 良博 弘前大学理工学研究科 講師 佐々木 実		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学理工学部 【対 象】・午前の部：小～中学生 ・午後の部：高校生以上 【定 員】・午前の部：15名程度 ・午後の部：100名程度 【参加費】無料		24名	弘前大学理工学部地球環境学科 根本研究室

名 称・開催日	講 師	内 容	
2015年度「化学への招待」 弘前大学一日体験化学教室		先端科学・技術の一端を担う化学に興味を抱いてもらえるよう、高校生（中学生）を対象に「化学への招待」を開催します。	
平成27年 8 月 7 日(金) 10:00～16:30	弘前大学理工学研究科 教授 岡崎 雅明 弘前大学理工学研究科 教授 澤田 英夫 弘前大学理工学研究科 准教授 川上 淳 弘前大学理工学研究科 准教授 北川 文彦 弘前大学理工学研究科 准教授 宮本 量 弘前大学教育学部 教授 長南 幸安 弘前大学農学生命科学部 教授 橋本 勝		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学理工学部、教育学部、農学生命科学部 【対 象】高校生（中学生・一般も可） 【定 員】60名 【参加費】無料		88名	日本化学会東北支部・弘前大学理工学研究科

名 称・開催日	講 師	内 容	
夏休みの数学2015		中学校や高等学校の数学の教科書に出てくる数学の世界のすぐ近くに面白い話題がたくさんあり、そのような数学の魅力を高校生や一般市民に知ってもらうための企画。	
平成27年 8 月 9 日(日) 10:30～15:00 平成27年 8 月10日(月) 10:30～15:00	弘前大学理工学研究科 教授 中里 博 弘前大学理工学研究科 准教授 別宮 耕一		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学理工学部 【対 象】中学校、高校の数学担当教員、一般市民、高校生 【定 員】両日とも40名 【参加費】無料		35名	弘前大学理工学部数理科学科

名 称・開催日	講 師	内 容	
医工連携セミナー（医用機器の知的財産保護）		医療・ライフサイエンス分野の知的財産や中小企業向けの支援施策について講演します。	
平成27年 9 月10日(木) 15:00～16:30	東北大学病院 臨床研究推進センター 宮田 和彦 特任講師		

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学理工学部 【対 象】 学生、企業技術者 【定 員】 なし 【参加費】 なし	80人	【主催】 弘前大学理工学研究科附属 医用システム創造フロンティア 【共催】 ひろさき産学官連携フォー ラム、精密工学会東北支部、材料 学会東北支部

名 称・開催日	講 師	内 容
楽しい科学		理工学部の実験室をみなさんに開放します。教員や学生のていねいな指導のもとで、いろいろな実験や実習を体験することができます。
平成27年10月18日(日) 10:00～16:00	弘前大学理工学研究科教員約15名	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学理工学部 【対 象】 小学生、中学生とその父母 【定 員】 【参加費】 無料	620名	弘前大学理工学研究科

名 称・開催日	講 師	内 容
サイエンスへの招待		理工学部で行っている最新の研究や社会のために役立つ研究の内容を、教員や学生がわかりやすく紹介します。また、いろいろな実験や実習の体験をととして科学の面白さにふれることができます。
平成27年10月18日(日) 10:00～16:00	弘前大学理工学研究科教員約15名	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学理工学部 【対 象】 小学生、中学生、高校生、一般 【定 員】 【参加費】 無料	620名	弘前大学理工学研究科

名 称・開催日	講 師	内 容
医工連携セミナー（先端医用機器開発）		脳動脈瘤の治療機器であるステントの設計最適化、医療機器を評価する血管モデルの開発について紹介した。
平成28年 3 月17日(木) 15:00～16:00	東北大学 流体科学研究所 准教授 太田 信	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学理工学部 【対 象】 学生、企業技術者 【定 員】 なし 【参加費】 なし	80名	【主催】 弘前大学理工学研究科附属 医用システム創造フロンティア 【共催】 ひろさき産学官連携フォー ラム、精密工学会東北支部、材料 学会東北支部

【農学生命科学部】

名 称・開催日	講 師	内 容	
農学生命科学部 公開講座		テーマ：移動～細胞内での分子の移動、生態系での動物の移動～	
平成27年10月18日(日) 13:30～15:30	弘前大学農学生命科学部 教授 大町 鉄雄 弘前大学農学生命科学部 准教授 東 信行	講演1「生物科学の基礎研究の面白さ」 講演2「青森だからよく見える鳥の渡りと魚の回遊そして日々の生活」	
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学農学生命科学部 3階302講義室 【対 象】一般、教職員、学生の方等どなたでも 【定 員】60名 【参加費】無料		40名	弘前大学農学生命科学部

名 称・開催日	講 師	内 容	
親子体験学習「触れ合おう、人と自然と農業に」		自然や農業との触れ合いを通じて、環境と食物生産の関わりを学ぶプログラム。さまざまな体験型学習のメニューが用意されており、講師の指導を受けながら親子が一緒に挑戦するものです。また、学区や学年の枠を超えて、参加した子供たち同士が交流を深める場を提供します。	
①平成27年 5月23日 ② 6月13日 ③ 9月26日 ④10月10日 ⑤10月31日 (いずれも土曜日) ①～③及び⑤は 9:30～15:30、 ④のみ 9:30～12:00	弘前大学農学生命科学部 准教授 姜 東鎮 弘前大学農学生命科学部 助教 房 家琛 弘前大学農学生命科学部 准教授 伊藤 大雄 弘前大学農学生命科学部 助教 松本 和浩 弘前大学農学生命科学部 准教授 池田 紘士 柏木農業高校 教諭 木田 聖子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター金木農場及び藤崎農場 【対 象】一般（小学生とその保護者を対象としています。但し、保護者が2名以上の場合には、小学生と共に未就学児の参加も可能です。） 【定 員】先着25組（保護者1名につき、子供2人までとします。） 【参加費】5回分の参加費として、大人1名につき1000円（子供は無料）		のべ210名 (申込17組 48名)	弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター

名 称・開催日	講 師	内 容	
公開講座「リンゴを科学する」		リンゴ生産者やリンゴ関係者・一般市民を対象として、リンゴに関する様々な最新情報を提供する外、生物共生教育研究センター教員の研究の紹介を行います。	
平成27年12月13日(日) 9:50～15:30	弘前大学農学生命科学部 教職員 等		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 平川市生涯学習センター 【対 象】 一般（リンゴ産業にかかわる方・一般市民） 【定 員】 約100名 【参加費】 無料		111名	【主催】 弘前大学農学生命科学部附属生物共生教育研究センター 【共催】 平川市

【地域社会研究科】

名 称・開催日	講 師	内 容	
津軽学・あおもりツーリズム創発塾公開講座 「ソウルフード津軽 受けつがれた味」		「郷土料理」や「B級グルメ」として取り上げられていない津軽の食文化について	
平成28年 1 月15日(金) 16:00～18:00	学習院大学 教授 赤坂 憲雄 元NHK プロデューサー 菊池 正浩 弘前路地裏探偵団団長 鹿田 智嵩 「津軽学」発行人 杉山 陸子 弘前大学 教授 杉山 祐子 紀行作家 山内 史子 コトハジメ研究所 山田さとみ 弘前大学 准教授 平井 太郎		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 かだれホール（弘前市百石町2-1 かだれ横丁内） 【対 象】 一般 【定 員】 80名 【参加費】 無料		70名	【主催】 弘前大学地域社会研究科（あおもりツーリズム創発塾）、津軽に学ぶ会

【白神自然環境研究所】

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所セミナー		ロシア・カムチャッカの春植物、アメリカ西海岸昆虫採集についての報告会を開催。	
平成27年 4 月24日(金) 17:00～18:00	弘前大学白神自然環境 研究所 教授 石川 幸男 弘前大学白神自然環境 研究所 准教授 中村 剛之 弘前大学白神自然環境 研究所 助教 山岸 洋貴		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【集合場所】 弘前大学コラボ弘大1階玄関ホール 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 無料		20名	弘前大学白神自然環境研究所

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所セミナー		昆虫標本の作り方についての講習会を開催。	
平成27年 6 月15日(月) 13:00～	弘前大学白神自然環境 研究所 准教授 中村 剛之		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学農学生命科学部151教室 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 無料		3 名	弘前大学白神自然環境研究所

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所観察会		春の植物（カタクリやキクザキイチゲ、イワウチワなど）の観察。	
「春の観察園付近を歩こう」 平成27年 5 月15日(金) 13:30～15:00	弘前大学白神自然環境 研究所 助教 山岸 洋貴		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【集合場所】 白神自然観察園（西目屋） 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 100円（保険料として）		17名	弘前大学白神自然環境研究所

開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所観察会		園内に生息するホタルや、夜の動植物の観察。	
「夜の観察会@白神自然観察園」 平成27年 7月16日(木) 18:00～21:00	弘前大学白神自然環境研究所 准教授 中村 剛之		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【集合場所】 白神自然観察園（西目屋） 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 100円（保険料として）		29名	弘前大学白神自然環境研究所

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神山地における空間情報活用セミナー		1. 白神の環境変動が植生に及ぼす影響：広域モニタリングの必要性 2. 白神山地の地すべり発生危険斜面抽出手法と崩壊危険度評価 3. リモートセンシングデータを利用するために 4. 衛星画像活用のためのデータベースの構築 5. フリーGISソフトウェアQGISを用いたオープンデータ利用例の紹介 6. マイクロ波レーダーリモートセンシング 7. 気象レーダー観測で得られる情報	
平成27年12月11日(金) 15:00～17:30	1. 弘前大学白神自然環境研究所 教授 石川 幸男 2. 弘前大学農学生命科学部 助教 鄒 青穎 3. 弘前大学理工学研究科 准教授 丹波 澄雄 4. 弘前大学理工学研究科 教授 飯倉 善和 5. 弘前大学理工学研究科 准教授 片岡 俊一 6. 弘前大学理工学研究科 准教授 齊藤 玄敏 7. 弘前大学理工学研究科 助教 石田 祐宣		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学総合教育棟310教室 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 無料		25名	弘前大学白神自然環境研究所

名 称・開催日	講 師	内 容	
白神自然環境研究所シンポジウム 「自然史情報と市民研究家の活躍」		【講演】 1. 博物館とアマチュア自然史研究家たち 2. 高知県植物誌とこれからの協働体制 3. 津軽植物の会、53年間の活動から 4. 「北のフィールドノート」的な自然誌探究 5. 青森県の自然史研究団体今昔 【パネルディスカッション】	
平成28年 3 月 4 日(金) 13:00～17:00	【講演】 1. 大坂市立自然博物館 学芸員 松本吏樹郎 2. 高知県立牧野植物園 研究員 前田 綾子 3. 津軽植物の会 木村 啓 4. 下北自然学巢 大八木 昭 5. 弘前大学白神自然環境 研究所 准教授 中村 剛之		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学創立50周年記念会館みちのくホール 【対 象】 どなたでも 【定 員】 【参加費】 無料		76名	【主催】 弘前大学白神自然環境研究所 【後援】 青森県、環境省東北地方環境事務所、青森市森林博物館、津軽昆虫同好会、弘前大学白神研究会、白神きのこの会

【医学部附属病院】

名 称・開催日	講 師	内 容	
外科手術体験セミナー in 青森 「未来の医学生たちへ。」		医療従事者自身が病院から外に出て、現地で子供たちと触れ合い、7つの模擬手術を体験してもらい、子供たちに医師の仕事の素晴らしさを知ってもらう。	
平成27年 7 月 4 日(土)	弘前大学医学部附属病院、青森県立中央病院、青森市立市民病院の外科の医師		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 青森県立青森高等学校 【対 象】 青森市周辺地域およびむつ市の高校2・3年生 【定 員】 56名 【参加費】 無料		56名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（外科）

名 称・開催日	講 師	内 容	
平成27年度 認定看護師による公開講座		がん治療中の口腔内トラブルについて学び、適切な口腔ケアを理解する。	
平成27年 5 月15日(金)	弘前大学医学部附属病院 看護師 栗津 朱美 弘前大学医学部附属病院 看護師 佐藤裕美子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 臨床大講義室 【対 象】 看護師免許をお持ちの方 【定 員】 50名 【参加費】 無料		53名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

名 称・開催日	講 師	内 容	
平成27年 6 月19日(金)	弘前大学医学部附属病院 看護師 前田あかね 弘前大学医学部附属病院 看護師 阿保恵美子 弘前大学医学部附属病院 看護師 佐藤裕美子	がん患者の性の問題について学び、看護に取り入れることを目指す。	
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 臨床大講義室 【対 象】 看護師免許をお持ちの方 【定 員】 50名 【参加費】 無料		23名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

開催日	講 師	内 容	
平成27年 7 月10日(金)	弘前大学医学部附属病院 看護師 浅利三和子	リンパ浮腫の基本的知識を学び、リンパ浮腫予防のための日常生活指導を行う技術を習得する。	
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対 象】 看護師免許をお持ちの方 【定 員】 40名 【参加費】		31名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

開催日	講 師	内 容	
平成27年 7 月17日(金)	弘前大学医学部附属病院 看護師 奈良 順子 弘前大学医学部附属病院 看護師 片山 美樹	バイタルサインの変化に対するアセスメント能力を向上する。	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 臨床大講義室 【対 象】 看護師免許をお持ちの方 【定 員】 70名 【参加費】 無料	35名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

開催日	講 師	内 容
平成27年 9 月25日(金)	弘前大学医学部附属病院 看護師 尾崎 浩美	薬剤耐性菌を理解し、必要な感染対策の実践力を習得する。
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 臨床大講義室 【対 象】 看護師免許をお持ちの方 【定 員】 100名 【参加費】 無料	76名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

開催日	講 師	内 容
平成27年10月30日(金)	弘前大学医学部附属病院 看護師 山内 真弓 弘前大学医学部附属病院 看護師 成田亜紀子	患者急変時に適切かつ迅速に対応できるように、アセスメントの思考過程を学ぶ。
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 臨床大講義室 【対 象】 看護師免許をお持ちの方 【定 員】 100名 【参加費】 無料	33名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

開催日	講 師	内 容
平成27年11月 6 日(金)	弘前大学医学部附属病院 看護師 桜庭 咲子 弘前大学医学部附属病院 看護師 鎌田恵里子 弘前大学医学部附属病院 看護師 古川真佐子	フットケアの知識を深め、患者さんに合わせたケア方法を習得する。
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対 象】 看護師免許をお持ちの方 【定 員】 50名 【参加費】 無料	29名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

名 称・開催日	講 師	内 容	
学びなおし研修 ～安全な与薬業務を身につけよう！～		現在臨床の場から離れている看護職を対象に、復職支援の一つとして、他職種専門家からの講義とシミュレーターを用いた静脈穿刺の演習で、安全な与薬業務の実践力を高める。	
平成28年 1 月25日(月)	弘前大学医学部附属病院 准教授 大徳 和之 弘前大学医学部附属病院 薬剤主任 金澤佐知子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対 象】 現在勤務していない看護職 現在育児休業中の看護職 【定 員】 20名 【参加費】 無料		8 名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

名 称・開催日	講 師	内 容	
臨地実習指導者育成研修 魅力的な実習を展開する方策を考えよう！		教育専門家の講義聞いて教育の基礎を知り、人材育成のスペシャリストからコーチングを学んで相手との関わり方を身につける。	
平成28年 2 月 1 日(月) 平成28年 2 月10日(水)	弘前大学教育学部 講師 松本 大 弘前大学大学院保健学研究科 准教授 藤田あけみ 弘前大学大学院保健学研究科 教授 井瀧千恵子 弘前大学大学院保健学研究科 准教授 小倉能理子 株式会社ビジネスコンサルタント 峰野亜由美		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対 象】 現在勤務していない看護職 現在育児休業中の看護職 【定 員】 20名 【参加費】 無料		24名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

名 称・開催日	講 師	内 容	
看護学生実践力向上研修 ～身につけよう！イメージしよう！すぐに役立つ看護技術～		学内実習・臨地実習で経験できなかったあるいは経験が不足している看護技術を経験して、実践力に自信をつける。	
平成28年 2 月23日(火)	弘前大学医学部附属病院 看護部長 小林 朱実 弘前大学医学部附属病院 看護師 古川真佐子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対 象】 来年度、急性期病院に勤務する予定の看護学生 【定 員】 20名 【参加費】 無料		9 名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

名 称・開催日	講 師	内 容	
看護実践スキルアップ研修 Kango Seminar ～看護実践最前線～		認定看護師による最新の看護実践についての情報を、教授内容に活用する。	
平成28年 3 月12日(土)	弘前大学医学部附属病院 看護師 尾崎 浩美 弘前大学医学部附属病院 看護師 栗津 朱美 弘前大学医学部附属病院 看護師 古川真佐子 弘前大学医学部附属病院 看護師 奈良 順子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対 象】 看護師等養成所の教員 【定 員】 20名 【参加費】 無料		10名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

名 称・開催日	講 師	内 容	
第17回家庭でできる看護ケア教室		手術後に早期回復をするための、普段からの健康づくりが大切さと日頃からできるからだの準備について学ぶ。	
平成27年10月28日(水)	弘前大学医学部附属病院 看護師 福岡 幸子 弘前大学医学部附属病院 看護師 尾崎 浩美		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院看護部研修室 【対 象】 一般市民 【定 員】 30名 【参加費】 無料		18名	【主催】 弘前大学医学部附属病院（看護部）

名 称・開催日	講 師	内 容	
第9回弘大病院がん診療市民公開講座		がんと関わりの深い緩和ケア領域について、 本院の専門家が分かりやすく講演。	
平成27年12月 6 日(日)	弘前大学医学部附属病院 講師 佐藤 哲観 弘前大学医学研究科 准教授 古郡 規雄		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前市民会館大会議室 【対 象】一般市民 【定 員】100名程度 【参加費】無料		90名	【主催】弘前大学医学部附属病院 (腫瘍センター) 【共催】「次世代がん治療推進専門 家養成プラン」(弘前大学)

名 称・開催日	講 師	内 容	
第2回地域がん医療フォーラム in HIROSAKI 地域医療実務者プログラム		「がん医療連携との現状と課題～どんな療養 場所でもその人らしく暮らせるために～」	
平成27年11月15日(日)	あんさん訪問看護ステー ション 看護師 沼倉 昌洋 むつ総合病院 看護師 二本柳 舞 ときわ会訪問看護ステー ション 所長 工藤 昌子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学医学部附属病院大会議室 【対 象】医療関係者、福祉関係者、行政関係者 【定 員】30名程度 【参加費】無料		31名	【主催】「次世代がん治療推進専門 家養成プラン」(弘前大学・秋田大 学) 【共催】弘前大学医学部附属病院 (腫瘍センター)

名 称・開催日	講 師	内 容	
平成27年度 弘前大学がんプロ 市民公開講座		がんと共に生きる～いきいきと暮らすために～	
平成28年 2 月21日(日)	特定非営利活動法人がん と暮らしを考える会 理 事長・医療財団法人社団 パリアン 看護師 賢見 卓也 岩手県立医科大学 教授 杉山 徹		

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 ホテルナクアシティ弘前 【対象】 一般市民、企業経営者、人事担当者、行政関係者 【定員】 150名程度 【参加費】 無料	85名	【主催】 「次世代がん治療推進専門家養成プラン」(弘前大学事務局) 【共催】 弘前大学医学部附属病院(腫瘍センター)

名 称・開催日	講 師	内 容
弘前大学医学部附属病院緩和ケア公開講座		倦怠感やリンパ浮腫はがん患者のQOLを著しく低下させる。倦怠感とリンパ浮腫についての基本的な知識とケアの方法を学び、がん患者の身体的苦痛の緩和方法を習得する。
平成27年 7月14日(火)	弘前大学医学部附属病院 講師 佐藤 哲観 弘前大学医学部附属病院 看護師 浅利三和子	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学医学研究科 臨床小講義室 【対象】 医療職、医療機関に勤務されている方 【定員】 特になし 【参加費】 無料	約40名	【主催】 弘前大学医学部附属病院(腫瘍センター)

開催日	講 師	内 容
平成27年10月 6日(火)	弘前大学医学研究科 准教授 古郡 規雄 弘前大学医学部附属病院 臨床心理士 島田 恵子	がん患者への心理的ケアの基本である傾聴と、基本的なコミュニケーションスキルでは対応が難しい患者に対して有効とされる動機付け面接やボーダーラインシフトについて学ぶ。

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学医学研究科 臨床小講義室 【対象】 医療職、医療機関に勤務されている方 【定員】 特になし 【参加費】 無料	約60名	【主催】 弘前大学医学部附属病院(腫瘍センター)

開催日	講 師	内 容
平成28年 1月19日(火)	弘前大学医学部附属病院 講師 佐藤 哲観	疼痛治療で使用されるオピオイド(医療用麻薬)の歴史と現在のがんの医療現場で使われている各オピオイドの働きについて学び、がん性疼痛の緩和方法を習得する。

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学医学研究科 臨床小講義室 【対象】 医療職、医療機関に勤務されている方 【定員】 特になし 【参加費】 無料	約80名	【主催】 弘前大学医学部附属病院(腫瘍センター)

名 称・開催日	講 師	内 容	
青森県抗菌薬化学療法セミナー		抗菌薬適正使用の実践	
平成27年11月30日(月) 平成27年12月 1 日(火)	弘前大学医学部附属病院 准教授 斎藤 紀先		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院小会議室 【対 象】 医療職 【定 員】 特になし 【参加費】 無料		71名	【主催】 弘前大学医学部附属病院 (感染制御センター)

名 称・開催日	講 師	内 容	
第10回訪問看護師学習会		「体を起こす」ことのメリットを理解し、呼吸や栄養状態の回復に繋がるケアのポイントを学ぶ。	
平成28年 2 月20日(土)	弘前大学医学部附属病院 看護師 奈良 順子 弘前大学医学部附属病院 看護師 片山 美樹 弘前大学医学部附属病院 看護師 福岡 幸子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院大会議室 【対 象】 訪問看護師 【定 員】 30名程度 【参加費】 無料		39名	【主催】 弘前大学医学部附属病院 (総合患者支援センター)

名 称・開催日	講 師	内 容	
平成27年度 弘前大学医学部附属病院緩和ケア研修会		「がん対策推進基本計画」において、すべてのがん診療に携わる医師が研修等により、緩和ケアについての基本的な知識を習得することが目標として掲げられています。 本研修会は、青森県内の医師及び看護師、薬剤師ほか医療スタッフを対象に、緩和ケアについての基本的な知識を習得する機会として、国の開催指針に沿って実施するものです。	
平成27年 8 月29日(土) 平成27年 8 月30日(日)	八戸市立市民病院 緩和 医療科部長 佐藤 智 市立岸和田市民病院 緩和ケア内科部長 川島 正裕 社会福祉法人三井記念病 院 緩和ケア科部長 三浦 剛史 山形県立河北病院 緩和 ケア科科長 奥山慎一郎 むつ総合病院 外科副部長 山田 恭吾 ときわ会病院 医師 蝦名 正子		

静岡県立静岡がんセンター 緩和医療科部長 大坂 巖 弘前駅前メンタルクリニック 院長 菊池 淳宏 弘前大学医学研究科 教授 佐藤 温 弘前大学医学研究科 准教授 古郡 規雄 弘前大学医学部附属病院 講師 佐藤 哲観		
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】弘前大学医学部コミュニケーションセンター 【対象】医師、看護師、薬剤師、医療スタッフ 【定員】45名程度 【参加費】無料	22名	【主催】弘前大学医学部附属病院

名 称・開催日	講 師	内 容
第1回肝臓病教室		肝疾患診療連携拠点病院として、肝疾患について肝疾患診療に係る一般的な医療情報の提供や支援をしています。今回は、「肝炎のおはなし」をテーマに開催しました。
平成27年 6 月 5 日(金)	弘前大学医学部附属病院 講師 遠藤 哲	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】弘前大学医学部附属病院内科外来 【対象】肝疾患患者、ご家族 【定員】15名 【参加費】無料	9 名	【主催】弘前大学医学部附属病院 (肝疾患相談センター)

名 称・開催日	講 師	内 容
第2回肝臓病教室		肝疾患診療連携拠点病院として、肝疾患について肝疾患診療に係る一般的な医療情報の提供や支援をしています。今回は、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士が、肝疾患について専門的情報を提供しました。
平成27年 9 月 4 日(金)	弘前大学医学部附属病院 講師 遠藤 哲 弘前大学医学部附属病院 看護師 今 いつみ 弘前大学医学部附属病院 薬剤師 照井 一史 弘前大学医学部附属病院 管理栄養士 須藤 信子	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】弘前大学医学部附属病院内科外来 【対象】肝疾患患者、ご家族 【定員】15名 【参加費】無料	22名	【主催】弘前大学医学部附属病院 (肝疾患相談センター)

名 称・開催日	講 師	内 容	
第3回肝臓病教室		肝疾患診療連携拠点病院として、肝疾患について肝疾患診療に係る一般的な医療情報の提供や支援をしています。今回は、「B型肝炎・C型肝炎」をテーマに開催し、新薬についての情報提供も行った。	
平成27年12月 4 日(金)	弘前大学医学部附属病院 講師 遠藤 哲		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院内科外来 【対 象】 肝疾患患者、ご家族 【定 員】 15名 【参加費】 無料		14名	【主催】 弘前大学医学部附属病院 (肝疾患相談センター)

名 称・開催日	講 師	内 容	
第4回肝臓病教室		肝疾患診療連携拠点病院として、肝疾患について肝疾患診療に係る一般的な医療情報の提供や支援をしています。今回は、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士が、肝疾患について専門的情報を提供しました。	
平成28年 3 月 4 日(金)	弘前大学医学部附属病院 講師 遠藤 哲 弘前大学医学部附属病院 看護師 弘前大学医学部附属病院 薬剤師 照井 一史 弘前大学医学部附属病院 管理栄養士 須藤 信子		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院内科外来 【対 象】 肝疾患患者、ご家族 【定 員】 15名 【参加費】 無料		13名	【主催】 弘前大学医学部附属病院 (肝疾患相談センター)

名 称・開催日	講 師	内 容
ブルーリボンキャラバン もっと知ってほしい大腸がんのこと 2015 in 弘前		大腸がんの科学的根拠に基づいた情報発信 (外科・薬物療法について医師の講演)
平成27年 9 月13日(日)	青森県立中央病院 外科 部長 西村 晋右 青森県立中央病院 外科 部長 村田 暁彦 弘前大学大学院医学研究 科 教授 佐藤 温 弘前大学医学部附属病院 がん相談支援センター相 談員 青木 広美	

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前文化センター中会議室 【対象】 一般市民 【定員】 特になし 【参加費】 無料	125名	【共催】 弘前大学医学部附属病院 弘前大学医学研究科腫瘍内科学講座 次世代がん治療推進専門家養成プラン弘前大学事務局 NPO 法人キャンサーネットジャパン

名称・開催日	講師	内 容
第30回青森県検査医学研究会		臨床検査技師を対象とした生涯教育講演会
平成28年 3 月 5 日(土)	弘前大学医学部附属病院 臨床検査技師 木津 綾乃 弘前大学医学部附属病院 臨床検査技師 小笠原 脩 弘前大学医学部附属病院 臨床検査技師 木村 正彦	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 フォルトーナ 【対象】 臨床検査技師 【定員】 特になし 【参加費】 無料	30名	【主催】 弘前大学医学部附属病院 (検査部同窓会)

名称・開催日	講師	内 容
第52回青森外傷セミナー（第9回弘前大学医学部附属病院高度救命救急センターJPTECプロバイダーコース）		現場における外傷傷病者対応の標準的手技を修得し、地域救急医療の質の向上と現場での職務遂行に役立たせる。
平成27年 6 月21日(日)	弘前大学医学部附属病院 講師 伊藤 勝博 弘前地区消防事務組合 救急救命士 渡邊健一郎 他	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学医学部附属病院 【対象】 医師、看護師、消防職員等 【定員】 16名 【参加費】 8,000円	16名	【主催】 弘前大学医学研究科（救急・災害医学講座） 弘前大学医学部附属病院（高度救命救急センター） 特定非営利活動法人 津軽広域救急支援機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第6回青森ISLS/PSLSコース		脳卒中が疑われる傷病者に対して、初期診療及び病院前救護の現場での標準的な観察・処置の手法を修得する	
平成27年 6 月28日(日)	弘前大学医学部附属病院 講師 伊藤 勝博 弘前大学医学部附属病院 看護師 赤平 良子 他		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院大会議室 【対 象】 医師、看護師、消防職員等 【定 員】 特になし 【参加費】 10,000円		37名	【主催】 弘前大学医学部附属病院 (高度救命救急センター) 【共催】 特定非営利活動法人 津軽広域救急支援機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第55回青森外傷セミナー		現場における外傷傷病者対応の標準的手技を修得し、地域救急医療の質の向上と現場での職務遂行に役立たせる。	
平成27年11月 1 日(日)	弘前大学医学研究科 助教 矢口 慎也 弘前地区消防事務組合 救急救命士 佐藤 正樹 他		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院 【対 象】 医師、看護師、消防職員等 【定 員】 16名 【参加費】 8,000円		20名	【主催】 弘前大学医学研究科（救急・災害医学講座） 弘前大学医学部附属病院（高度救命救急センター） 特定非営利活動法人 津軽広域救急支援機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第3回弘前MCLS標準コース		防ぎ得た災害死を撲滅することを目的に、集団災害時の初期対応や応急救護所の改正時のポイント等を学ぶ。	
平成27年11月15日(日)	弘前大学医学部附属病院 講師 伊藤 勝博 弘前地区消防事務組合 救急救命士 小山内健介 他		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部保健学研究科 【対 象】 医師、看護師、消防職員、行政職員等 【定 員】 36名 【参加費】 12,000円		36名	【主催】 弘前大学医学研究科（救急・災害医学講座） 弘前大学医学部附属病院（高度救命救急センター） 特定非営利活動法人 津軽広域救急支援機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第57回青森外傷セミナー (第11回弘前大学医学部附属病院高度救命救急センターJPTECインストラクターコース)		現場における外傷傷病者対応の標準的手技を修得し、地域救急医療の質の向上と現場での職務遂行に役立たせる。	
平成28年 1 月24日(日)	弘前大学医学部附属病院 講師 伊藤 勝博 弘前地区消防事務組合 救急救命士 藤田 健司 他		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学部附属病院 【対 象】 医師、看護師、消防職員等 【定 員】 20名 【参加費】 12,000円		10名	【主催】 弘前大学医学研究科（救急・災害医学講座） 弘前大学医学部附属病院（高度救命救急センター） 特定非営利活動法人 津軽広域救急支援機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第1回再生医療シンポジウムin弘前		再生医療に関する基礎・臨床の講演	
平成27年10月31日(土)	東北大学大学院医学系研究科 教授 出澤 真理 公益財団法人先端医療振興財団細胞療法研究開発センター センター長 川真田 伸 広島大学 学長 越智 光夫 札幌北榆病院 外科部長 堀江 卓 公益財団法人先端医療振興財団臨床研究情報センター 副センター長 川本 篤彦 弘前記念病院 院長 植山 和正 札幌医科大学医学部附属フロンティア医学研究所 教授 本望 修 医仁会武田総合病院 救急医療センター長 中谷 壽男		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科臨床大講義室 【対 象】 医師他医療関係者 【定 員】 100名 【参加費】 無料		80名	【主催】 弘前大学医学研究科（整形外科科学講座） 弘前記念病院 【共催】 ひろさきLI株式会社（町田アンド町田商会） 公益財団法人先端医療振興財団

【研究・イノベーション推進機構】

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学 起業家塾		大学のもつシーズを活用したベンチャーの創出と地域産業の発展及びイノベーションの創出に向け、学生や若手研究者の起業（VB）を促進することを目的とした起業家塾を開催。	
第1回： 平成27年7月30日(木) 17:00～18:00	第1回：株式会社フォーテック 代表取締役社長 石田 正樹		
第2回： 平成27年10月7日(水) 18:00～20:00	第2回：四元マーケティングデザイン研究室 代表 四元 正弘		
第3回： 平成27年11月9日(月) 18:00～20:00	国立大学北海道大学 特任教授 荒磯 恒久 第3回：日本GE オリンピックプログラムマネージャー 加藤 俊也 株式会社東京大学TLO 代表取締役 山本 貴史		
第4回： 平成27年12月2日(水) 18:00～20:00	第4回：宮田総研株式会社 代表取締役社長 宮田 満 フューチャーベンチャーキャピタル株式会社 青森事務所長 外山 和恵		
第5回： 平成27年12月22日(火) 18:00～20:00	第5回：俯瞰工学研究所 代表 松島 克守 第6回：日本ベンチャー学会 事務局長 田村真理子 インタープロテイン株式会社 代表取締役社長 細田 雅人		
第6回： 平成28年1月25日(月) 18:00～20:00			
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学総合教育等		第1回 86名	研究・イノベーション推進機構
【対 象】 学生・若手研究者・若手経営者		第2回 53名	
【定 員】 第1回 40名、 第2回～第6回 各100名		第3回 46名	
【参加費】 無料		第4回 40名	
		第5回 38名	
		第6回 60名	

【COI研究推進機構】

名 称・開催日	講 師	内 容	
第7回 弘前大学COI特別講演会		「接続可能な社会の構築のためにCOIプログラムの展開と弘前大学への期待」	
平成27年 5月21日(木) 14:00～15:30	名古屋大学前総長 (COI STREAM総括ビジョナリーチームリーダー) 濱口 道成		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般、学生 【定 員】 【参加費】 無料		170名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第8回 弘前大学COI特別講演会		「健康長寿と食－フリーラジカル研究最前線－」	
平成27年 6月30日(火) 10:30～12:00	京都府立医科大学 学長 吉川 敏一		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般、学生 【定 員】 【参加費】 無料		100名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第9回 弘前大学COI特別講演会		「生体の酸化ストレス応答の分子基盤と病態」	
平成27年 7月17日(金) 17:00～18:00	東北大学東北メディカル メガバンク機構 機構長 山本 雅之		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般、学生 【定 員】 【参加費】 無料		中止	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
ヘルシーエイジング・イノベーションフォーラム 『寿命革命』―“健やかに老いる未来社会の実現” に向けて今何をすべきか?―		「ビッグデータで『寿命革命』を!」、「GE インダストリアルインターネット戦略」、「イオンのめざす健康社会」、「スポーツと健康を考える」等	
平成27年 7 月 3 日(金) 13:00~17:00	弘前大学医学研究科長 中路 重之、日本GE株式会社 専務執行役員 田中 豊人 イオンリテール株式会社 取締役会長 梅本 和典 親子体操教室主宰 (NHK おかあさんといっしょ10 代目体操のお兄さん) 佐藤 弘道 等		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】一橋講堂 【対 象】企業、研究関係者、一般市民等 【定 員】300名 【参加費】		600名	【主催】弘前大学 (COI研究推進機構/研究・イノベーション推進機構)、青森県 【共催】(国研) 科学技術振興機構 (JST)

名 称・開催日	講 師	内 容	
第10回 弘前大学COI特別講演会		「ゲノム医療実現への展望」	
平成27年 9 月11日(金) 16:30~17:30	東京大学大学院医学系研究科 (脳神経内科) 教授 辻 省次		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学医学研究科 臨床大講義室 【対 象】一般、学生 【定 員】 【参加費】無料		100名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第11回 弘前大学COI特別講演会		「個別化医療・予防の実現に向けて」	
平成27年11月20日(金) 13:30~14:30	国立研究開発法人理化学研究所 総合生命医科学研究センター 副センター長 (統括) 久保 充明		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】一般、学生 【定 員】 【参加費】無料		70名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第12回 弘前大学COI特別講演会		「久山町研究の最前線」	
平成27年12月 4 日(金) 14:00～15:00	九州大学医学研究院附属 総合コホートセンター 教授 二宮 利治		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般、学生 【定 員】 【参加費】 無料		80名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第13回 弘前大学COI特別講演会		「腸内細菌研究の最前線」	
平成27年12月15日(火) 13:30～14:30	東京工業大学生命理工学 研究科 生命情報専攻 講師 山田 拓司		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般、学生 【定 員】 【参加費】 無料		80名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第14回 弘前大学COI特別講演会		「ライフビッグデータの医療健康分野応用研究の最前線」	
平成28年 1 月 8 日(金) 14:00～15:20	京都大学医学研究科 教授 奥野 恭史		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 基礎第二講義室 【対 象】 一般、学生 【定 員】 【参加費】 無料		90名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第15回 弘前大学COI特別講演会		「医学と工学の融合でかなえる「自分で守る健康社会」―東大COIの新たな戦略展開―」	
平成28年1月21日(木) 13:30~14:30	東京大学COI 研究総括 (RL) / 東京大学大学院 工学系研究科バイオエン 지니어リング専攻 教授 鄭 雄一		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】 一般、学生 【定 員】 【参加費】 無料		70名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学COIヘルシーエイジング・イノベーションサミット2016 「真の「健康の姿（未来）」を考える」		「健康教育・啓発で『健康の未来』を変える!」、 「次世代ヘルスケア産業創出」、「データヘルス で予防・健康増進を」、「超健康食で寿命革命へ (3Dレシピコンテスト)」等	
平成28年1月29日(金) 13:30~17:15	弘前大学医学研究科長 中路 重之 経済産業省商務情報政策 局ヘルスケア産業課 課長補佐 富原 早夏 厚生労働省保険局医療介 護連携政策課医療費適正 化対策推進室 室長 安藤 公一 楽天(株)執行役員/楽天 マーケティングジャパン 事業長 濱野斗百礼 等		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 ホテルナクアシティ弘前 プレミアホール 【対 象】 一般市民、学生、医療関係者、大学、企業、 研究機関等 【定 員】 300名 【参加費】		500名	【主催】 弘前大学（COI研究推進機 構/研究・イノベーション推進機 構）、青森県、弘前市 【共催】 青森県医師会、健やか力推 進センター、(財)21あおり産業 総合支援センター等

名 称・開催日	講 師	内 容	
第16回 弘前大学COI特別講演会		「医療を変えるICTと医療情報データベース」	
平成28年 2月16日(火) 17:00～18:00	東京大学医学研究科 社会医学専攻医療情報 経済学分野 教授 大江 和彦		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学医学研究科 臨床大講義室 【対 象】一般、学生 【定 員】 【参加費】無料		80名	弘前大学COI研究推進機構

名 称・開催日	講 師	内 容	
第17回 弘前大学COI特別講演会		「ゲノムビッグデータ時代の予防医療応用研究 最前線」	
平成28年 2月24日(水) 16:00～17:00	東京大学医科学研究所 ヘルスインテリジェンス センター 健康医療デー タサイエンス分野 教授 井元 清哉		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学医学研究科 基礎大講堂 【対 象】一般、学生 【定 員】 【参加費】無料		70名	弘前大学COI研究推進機構

【男女共同参画推進室】

名 称・開催日	講 師	内 容	
平成27年度北東北国立3大学連携推進会議連携協議 会 男女共同参画シンポジウム「男女共同参画の視 点から地方創生を考える」		政策説明 基調講演「地方創生と男女共同参画推進」	
平成27年 9月14日(月) 13:30～16:00	文部科学省生涯学習政策 局男女共同参画学習 課長 高橋 雅之 慶應義塾大学商学部 教授 樋口 美雄		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学人文学部校舎 4 階 多目的ホール 【対 象】テーマに関心のある地域の方々、北東北 国立 3 大学教職員、学生ほか 【定 員】100名 【参加費】無料		86名	【主催】弘前大学 【共催】秋田大学、岩手大学

名 称・開催日	講 師	内 容	
女子高校生工学系キャリアサポート		シャボン玉を用いた消火法の実験	
平成27年12月19日(土) 10:00～17:30 平成27年12月20日(日) 9:00～16:00	弘前大学理工学研究科 准教授 鳥飼 宏之		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学理工学部校舎1号館3階8番講義室 【対 象】 八戸東高校、八戸北高校、弘前中央高校、弘前南高校の女子生徒 【定 員】 20名 【参加費】 無料		19名	弘前大学男女共同参画推進室

名 称・開催日	講 師	内 容	
弘前大学ダイバーシティワークショップ		性別、国籍、人種、民族、言語、宗教、年齢、障害、性的指向、性別自認、家族のかたち、ライフ ステージなど、人の多様性について、気づきを得るグループワーク	
平成18年 1 月22日(金) 18:00～20:00	弘前大学男女共同参画推進室 助教 山下 梓		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】 集会所 indriya 【対 象】 テーマに関心のある地域住民、弘前大学生・教職員 【定 員】 30名 【参加費】 無料		16名	弘前大学

【事務局】

名 称・開催日	講 師	内 容
2015年度 弘前大学シニアサマーカレッジ		全国の50歳以上のシニア層を主な対象とした地域滞在型学習プログラムを提供することにより、本学の持つ知を広くアピールするとともに様々な地域文化・地域人材を活用することで、地域振興をも視野に入れた学習プログラムを本学から発信することを目的とする。 Aコース 弘前城本丸石垣大改修と100年ぶり天守の移動、歴史めぐり Bコース 太宰治と旅するふるさと「津軽」 Cコース 世界自然遺産「白神山地」と津軽の手仕事・津軽三味線ほか
平成27年 9 月 6 日(日) ～平成27年 9 月11日(金)	1 日目 弘前市立博物館長 弘前 大学名誉教授 長谷川成一 2 日目 弘前市立博物館長 弘前 大学名誉教授 長谷川成一 3 日目 弘前大学研究推進部学術 情報課長 三上 豊 弘前大学附属図書館長 教育学部教授 郡 千寿子	

	4 日目 弘前大学教育学部 講師 仁平 政人 5 日目 弘前大学白神自然環境研 究所 教員 石川幸男、中村剛之、 山岸洋貴 弘前大学教育学部 教授 石川 善朗 6 日目 弘前大学教育学部 准教 授 高瀬 雅弘 弘前大学教育学部 准教 授 富田 晃	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】弘前公園、斜陽館、白神自然環境研究所、 ブナコ株式会社 ほか 【対 象】どなたでも 【定 員】 2 日間コース A (9/6,7) 50名 2 日間コース B (9/8,9) 30名 2 日間コース C (9/10,11) 30名 4 日間コース A・B・Cのいずれか2コース 6 日間コース A・B・Cすべてのコース 【参加費】 2 日間コース A (9/6,7) 20,000円 2 日間コース B (9/8,9) 20,000円 2 日間コース C (9/10,11) 20,000円 4 日間コース 30,000円 6 日間コース 50,000円	2 日間 コース 32名 4 日間 コース 10名 6 日間 コース 4 名	【主催】 弘前大学 公益社団法人弘前観光コンベン ション協会 【後援】 青森県 弘前市

名 称・開催日	講 師	内 容
短命県返上「健康講座」 平成27年4月4日(土)～平 成27年5月23日(土)の毎週 土曜日14:00～15:30 ※平成27年3月28日(土)に 第1回を開催しました。 H26年報へ掲載。		第2回:「健康度の測定・評価」(血圧、体組成、 骨密度、肺機能) 第3回:「生活習慣病」(がん) 第4回:「生活習慣病」(高血圧、脳卒中、心臓 病) 第5回:「認知症・うつ病」 第6回:「骨粗しょう症・ロコモティブシンド ローム」 第7回:「生活習慣病」(糖尿病、脂質異常症) 第8回:「短命対策について」
	第2回:弘前大学医学研 究科社会医学講座 准教授 高橋 一平 第3回:弘前大学医学研 究科地域がん疫学講座 講師 松坂 方士 第4回:あおば循環器内 科クリニック・院長 木村 俊昭 第5回:ささクリニック 院長 笹 博 第6回:八戸市立市民病 院 副院長 末綱 太	

	第7回：弘前大学医学研究科内分泌代謝内科学講座 教授 大門 眞 第8回：弘前大学医学研究科長・社会医学講座 教授 中路 重之	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 八戸商工会館4階 大会議室、※4月4日のみ3階ホール 【対象】 県南地域の住民のみなさま 【定員】 各講座 120名 【参加費】 無料	第2回 90名 第3回 111名 第4回 121名 第5回 113名 第6回 106名 第7回 111名 第8回 98名	弘前大学八戸サテライト

名称・開催日	講師	内 容
市民のための「やさしい介護講座」		第1回：「介護保健制度はどうすれば利用できるの？」 第2回：「介護サービスはどうすれば受けられるの？」 第3回：「認知症の正しい知識と対応」 第4回：「介護に係わる権利擁護の基礎知識と対応」 第5回：「家庭でできるやさしい介護」 第6回：「介護施設」の見学と説明
平成27年6月10日(水) ～平成27年7月15日(水)の 毎週水曜日14:00～15:30	第1回：八戸市医療生活協同組合 介護部長 獅子内和子 第2回：八戸市医療生活協同組合 介護部長 獅子内和子 第3回：認知サポーターキャラバン・メイト 松倉 典子、ほか 第4回：社会福祉法人八戸市社会福祉協議会 福祉支援課 中里 雅恵 第5回：社会福祉法人スプリング 特別養護老人ホーム 福寿草 介護福祉士 森 忠義 第6回：社会福祉法人同仲会 特別養護老人ホーム瑞光園 チーフマネージャー 沢田 章	
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会場】 弘前大学八戸サテライト ※7月15日のみ特別養護老人ホーム「瑞光園」2階 地域交流ホール 【対象】 県南地域の住民のみなさま 【定員】 50名 【参加費】 無料	第1回 49名 第2回 48名 第3回 44名 第4回 45名 第5回 47名 第6回 32名	弘前大学八戸サテライト

名 称・開催日	講 師	内 容	
高校生のための「やさしいネット講座」		「本当はこわいSNS」 1日目：スマートフォンの安全性、いじめ問題 2日目：インターネット詐欺問題、安全、安心な利用	
平成27年 8月17日(月) 平成27年 8月18日(火) 14:00～15:30	(株)ビジネスサービスソリューション 営業推進部 小山 康輝		
会場・対象・定員・参加費		参加人数	主催・共催
【会 場】弘前大学八戸サテライト 【対 象】高校生 【定 員】50名 【参加費】無料		1日目 19名 2日目 17名	弘前大学八戸サテライト

名 称・開催日	講 師	内 容	
ナチュラル・イノベーション講座 「新たな事業発想による地域創生への挑戦」		第1回：「青森県における新たな漁業資源創出の可能性を探る」 第2回：「地熱発電エネルギーによる新事業創出への挑戦」 第3回：「健康・医療・アンチエイジング商品の開発」 第4回：「微生物による食のブランド化の推進」～わたしのアイデア交流会～ 第5回：「弘大育成新品種リンゴで切り開く新たなビジネス」	
第1回： 平成27年11月4日(水) 第2回： 平成27年11月25日(水) 第3回： 平成27年12月9日(水) 第4回： 平成28年1月27日(水) 第5回： 平成28年2月18日(木) 各日とも14:30～17:20	第1回： 国立研究開発法人 水産総合研究センター 東北 区水産研究所 農学博士 酒井 光夫 弘前大学食料科学研究所 所長 嵯峨 直恆 第2回： 弘前大学北日本新エネルギー研究所・所長 村岡 洋文 株式会社元気アップつちゆ 代表取締役社長 加藤 勝一 第3回： 弘前大学教育学部 特任教授 加藤 陽治 サンスター株式会社 新規素材活用事業開発プロジェクト 山本 和司 第4回： 弘前大学農学生命科学部 准教授 殿内 暁夫 地方独立行政法人 青森 県産業技術センター 弘前地域研究所 総括研究推進監 村中 文人 第5回： 弘前大学農学生命科学部 助教 松本 和浩 弘前大学研究推進部 社会連携コーディネーター 上平 好弘		

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学八戸サテライト 【対 象】 県南地域のものづくり企業・事業者、興味をお持ちの地域住民のみなさま 【定 員】 50名 【参加費】 無料	第1回 27名 第2回 21名 第3回 27名 第4回 24名 第5回 18名	【主催】 弘前大学八戸サテライト 【共催】 株式会社 八戸インテリジェントプラザ（第1回・第2回・第3回） 公益財団法人 八戸地域高度技術振興センター（第4回）

名 称・開催日	講 師	内 容	
第1回市民ボランティア講座&ワークショップ		『ひとり親家庭の子どもに対する学習支援活動「サタディ☆くらぶ」の取組』	
平成27年 6月26日(金) 18:30~20:00	青森家庭少年問題研究会 最上 和幸		
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催	
【会 場】 弘前大学総合教育棟201講義室 【対 象】 市民、学生、教職員等 【定 員】 【参加費】 無料	30名	弘前大学ボランティアセンター	

名 称・開催日	講 師	内 容	
第2回市民ボランティア講座&ワークショップ		『野田村の震災前から現在まで』 『ワークショップ これからの復興を考える』	
平成27年11月22日(日) 10:30~12:30 13:30~15:30	チーム北リアス現地事務 所長 久慈広域観光協議 会専務理事 貫牛 利一		
会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催	
【会 場】 岩手県野田村 えぼし荘 【対 象】 市民、学生、教職員等 【定 員】 【参加費】 無料	69名	弘前大学ボランティアセンター	

名 称・開催日	講 師	内 容	
第3回市民ボランティア講座&ワークショップ		『「てんでんこ」 リスクの受容と日本とアメリカにおける津波リスクの軽減』 Tendenko, Acceptable Risk and Tsunami Mitigation in Japan and the United States	
平成28年 1月29日(金) 18:30~20:00	京都大学防災研究所・巨 大災害研究センター 客員教授 James Dennis Goltz		

会場・対象・定員・参加費	参加人数	主催・共催
【会 場】 弘前大学人文学部棟 4 階 多目的ホール 【対 象】 市民、学生、教職員等 【定 員】 【参加費】 無料	45名	弘前大学ボランティアセンター

Ⅲ. センター関連規則等

1. センター関連規則

(1) 弘前大学生涯学習教育研究センター規程

(平成16年4月1日制定)
規程第144号
(最終改正：平28.3.18)

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号。以下「管理運営規則」という。）第6条第2項の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター（以下「センター」という。）に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 センターは、学内共同教育研究施設として、生涯学習に関する教育（医学及び保健に関することを含む。）及び研究を行い、弘前大学（以下「本学」という。）の教育研究の進展と地域における生涯学習の振興に資することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 生涯学習に関する教育内容及び教育方法の研究
- (2) 社会人を対象とする公開講座等の生涯学習事業の実施
- (3) 生涯学習指導者の養成
- (4) 生涯学習に関する情報の収集及び提供
- (5) 生涯学習に関する相談事業
- (6) 生涯学習に関する調査・研究報告書等の刊行
- (7) メディカルコミュニケーションセンターの業務に関すること。
- (8) その他生涯学習に関すること。

(職員)

第4条 センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) センター長
- (2) 専任担当教員
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第5条 センター長は、センターの業務を掌理する。

第6条 削除

(センター協力教員)

第7条 センターに、センターが行う事業を円滑に実施するため、センター協力教員を置くことができる。

2 センター協力教員の任期は、担当する業務が終了するまでの期間とする。

3 センター協力教員は、学長が任命する。

(運営委員会)

第8条 センターの管理運営に関する事項を審議するため、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会の組織及び運営については、別に定める。

(事務)

第9条 センターの事務は、社会連携部社会連携課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

附 則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成16年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年2月9日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年5月28日から施行し、改正後の規定は、平成21年4月1日から適用する。

附 則（平成22年5月17日規程第53号）

この規程は、平成22年5月17日から施行する。

附 則（平成23年7月28日規程第68号）

この規程は、平成23年7月28日から施行し、改正後の規定は、平成23年5月20日から適用する。

附 則（平成25年4月19日規程第74号）

この規程は、平成25年4月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年4月1日から適用する。

附 則（平成26年5月16日規程第61号）

この規程は、平成26年6月1日から施行する。

附 則（平成27年3月20日規程第48号）

この規程は、平成27年3月20日から施行する。

附 則（平成27年9月14日規程第212号）

この規程は、平成27年10月1日から施行する。

附 則（平成28年3月18日規程第126号）

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

(2) 弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会内規

(平成16年4月1日制定)
(最終改正：平25. 4. 19)

(趣旨)

第1条 この内規は、国立大学法人弘前大学管理運営規則（平成16年規則第1号）第95条及び弘前大学生涯学習教育研究センター規程第8条の規定に基づき、弘前大学生涯学習教育研究センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(組織)

第2条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) センターの専任教員
- (3) 各部局から推薦された教員各1名
- (4) 学長が指名する教員以外の職員1名
- (5) その他委員長が必要と認めた職員

2 前項第3号の委員は、学長が任命する。

(委員の任期)

第3条 前条第3号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

2 委員長は、会議を招集し、その議長となる。

3 運営委員会に副委員長を置き、委員長が指名する委員をもって充てる。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

2 運営委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員の代理出席)

第6条 委員に事故があるときは、当該委員の指名した者が委員として代理出席することができる。

(委員以外の出席)

第7条 運営委員会が必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(専門委員会)

第8条 運営委員会に専門的事項を調査し、又は企画、立案若しくは実施をするため、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会の名称、組織及び運営については、運営委員会が別に定める。

(庶務)

第9条 運営委員会の庶務は、研究推進部社会連携課において処理する。

(その他)

第10条 この内規に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附 則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成16年10月1日から施行する。

附 則

この内規は、平成17年10月28日から施行し、平成17年4月1日から適用する。

附 則

この内規は、平成19年4月1日から施行する。

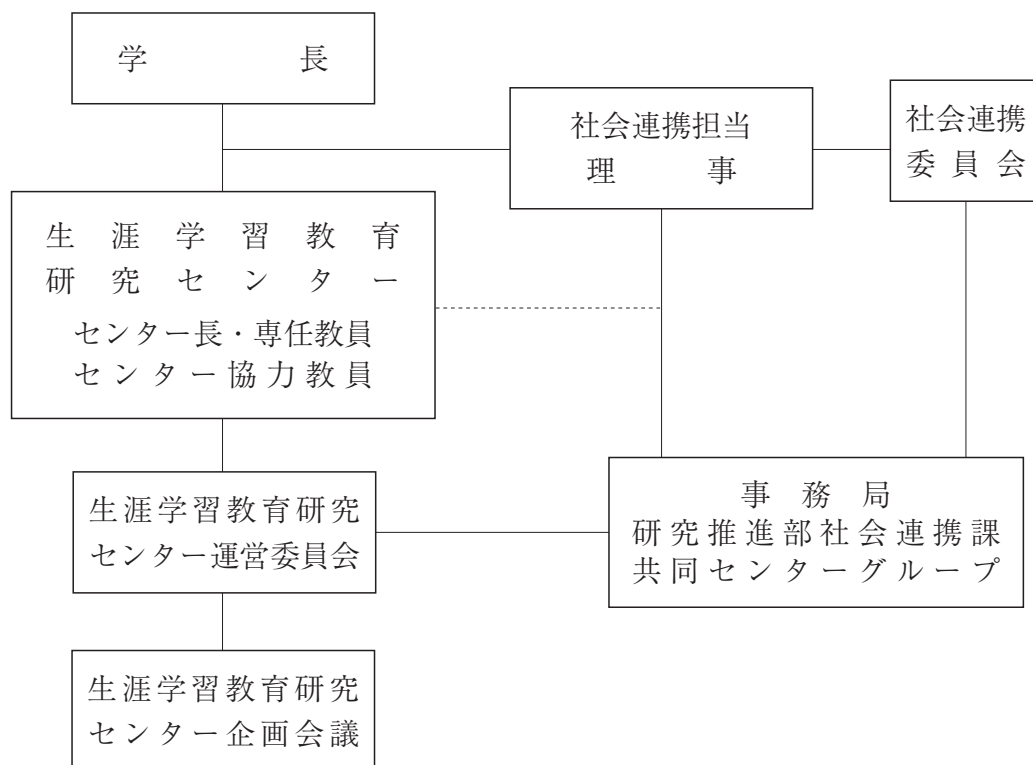
附 則

この内規は、平成21年4月1日から施行する。

附 則（平成25年4月19日）

この内規は、平成25年4月19日から施行し、改正後の規定は、平成25年4月1日から適用する。

2. 機構・組織



○生涯学習教育研究センター運営委員会

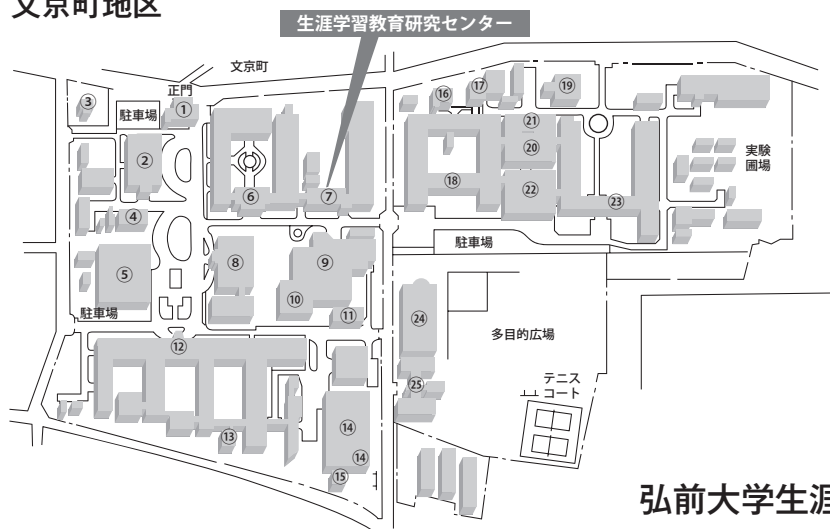
生涯学習教育研究センター	教授	曾我亨
生涯学習教育研究センター	准教授	藤田昇治
生涯学習教育研究センター	講師	深作拓郎
人文学部	教授	大橋忠宏
教育学部	教授	大坪正一
医学研究科	教授	大山力
保健学研究科	講師	七島直樹
理工学研究科	講師	岡崎功
農学生命科学部	准教授	大河浩
研究推進部社会連携課	課長	小田桐努

○センター協力教員

人文学部	准教授	金目哲郎 (26.6.1～28.3.31)
教育学部	准教授	小瑤史朗 (26.6.1～28.3.31)
農学生命科学部	准教授	石塚哉史 (26.6.1～28.3.31)
白神自然環境研究所	准教授	中村剛之 (26.6.1～28.3.31)
地域社会研究科	准教授	平井太郎 (27.5.1～28.3.31)

3. 地図・連絡先

文京町地区



- | | | |
|-----------------------|-----------------|---------------------|
| ①案内所(守衛所) | ②事務所 | ③旧制弘前高等学校
外国人教師館 |
| ④保健管理センター | ⑤創立50周年記念会館 | ⑥総合教育棟 |
| ⑦人文社会科学部校舎 | ⑧附属図書館 | ⑨学生食堂 |
| ⑩学生会館 | ⑪合宿所及びサークル共用施設 | ⑫教育学部校舎 |
| ⑬教育学部附属
教育実践総合センター | ⑭第一体育館 | ⑮弓道場 |
| ⑯地震火山観測所 | ⑰総合情報処理センター | ⑱理工学部1号館 |
| ⑲遺伝子実験施設 | ⑳附属コラボレーションセンター | ㉑農学生命科学部校舎 |
| ㉒創立60周年記念会館
コラボ弘大 | ㉓理工学部2号館 | |
| ㉔第二体育館 | ㉕武道館 | |

弘前大学生涯学習教育研究センター

〒036-8560 弘前市文京町1番地

人文社会科学部3F

TEL (0172) 39-3146 (直通)

FAX (0172) 39-3146

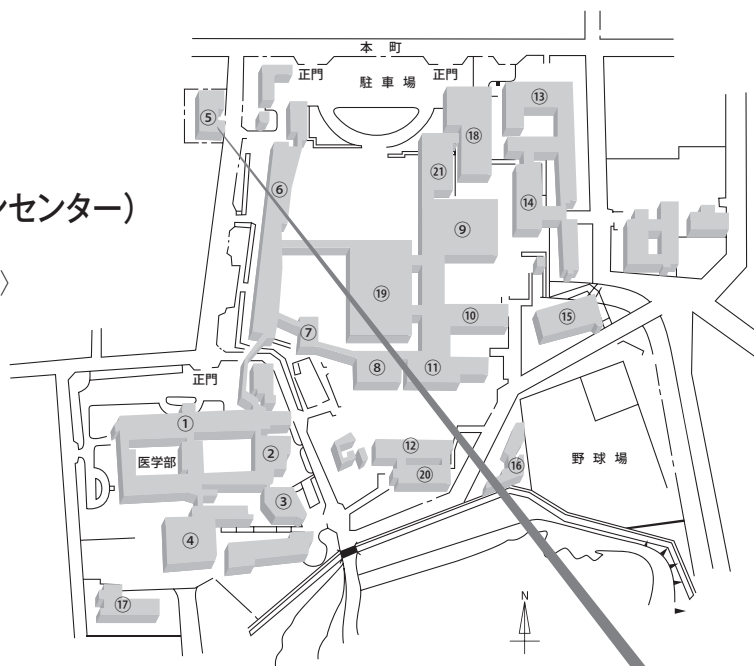
本町地区

分室(医学部コミュニケーションセンター)

〒036-8203 弘前市本町40-1

TEL (0172) 39-5240 (直通)

FAX (0172) 39-4056



- | | | |
|--------------------------|-------------|---------------------------------|
| ①医学研究科 | ②附属図書館医学部分館 | ③基礎講義棟 |
| ④附属動物実験施設
アイソトープ総合実験室 | ⑦臨床講義棟 | ⑧エネルギーセンター |
| ⑥臨床研究棟 | ⑩第二病棟 | ⑪第一病棟 |
| ⑨中央診療棟 | ⑫保健学研究科 | ⑬総合研究棟 |
| ⑫一般管理棟 | ⑭医学部会館 | ⑰本町地区共同利用施設
(附属高度先進医学研究センター) |
| ⑮体育館 | ⑯外来診療棟 | ⑱ひろだい保育園 |
| ⑲立体駐車場 | | |
| ㉑高度救命救急センター | | |

事務局

社会連携部社会連携課

〒036-8561 弘前市文京町3番地

TEL (0172) 39-3914

FAX (0172) 39-3919

編 集 後 記

この一年間を振り返る中で、いくつか懸念されることがある。とりわけ「集团的自衛権」を行使できるように法律が強引に成立させられたこと、「異次元の金融政策」と「株高」で日本経済が発展していくという「夢」が破綻したこと、が印象深い。とはいえ、「秘密保護法」等の施行により、政治・経済・文化などの様々な領域に「秘密保護」が貫徹していく。換言すれば、「社会の仕組み」そのものの大きな変容をもたらすものとして捉える必要がある。

平成28年度は、弘前大学の予算が大幅に削減されることになった。「予算削減」という「現象」の中に、いわば「亡国の文教政策」があることを認識している人は決して少なくはないと信じたいが、「不平・不満」にとどまり、そうした政策を変える展望を示すことができる人は意外に少ないのではないか。現在、「地方創生」といった取り組みが追求されているが、本質的には同様なことが言えるのではないだろうか。

今回の『年報』には2編の「大学開放」に関連した研究論文が収録されている。地域や社会に内在する問題の核心を捉え課題解決の実践力を養う上での一助になれば、と願うところである。(藤田)

発行 平成 28 年 5 月 27 日

弘前大学生涯学習教育研究センター 年報 第 19 号

発行 弘前大学生涯学習教育研究センター

〒036-8561 弘前市文京町 1 番地

☎ (0172) 39-3146

印刷 や ま と 印 刷 株 式 会 社

〒036-8061 弘前市神田 4 丁目 4 - 5

☎ (0172) 34-4111

ANNUAL REPORT
CENTER FOR RESEARCH AND EDUCATION OF LIFELONG LEARNING
HIROSAKI UNIVERSITY
NO.19, 2016

CONTENTS

Academic Articles

- Regional Educational Problems and *University Extension*
FUJITA Shoji1
- Consider the university extension program
that a university student team plans it and carries out
FUKASAKU Takurou15

Activity Reports: Center for Research and Education of Lifelong Learning27

The Faculties and Other On-campus Organizations77

Rules and Organization113
